化け者交流会談記

石勿 想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
化け者交流会談記

【Ｎコード】
Ｎ１２４１Ｒ

【作者名】
石勿　想

【あらすじ】
超能力や霊能力などは全く使えないが腹筋を鍛えたことにより最強レベルとなった男、霊能太郎。主人公である彼は、友達がいない生活からの脱却をめざす！
だがしかし、いくら頑張っても人間の友達は出来ない・・・ならいっそ人外で作っちゃえばいいじゃね？
そんな発想から動きだす人外探しの物語。
早速できた友達は変態紳士な幽霊に幼女な貞子、さらには目が死んでる口裂け女など個性豊かなメンバーたち！

基本コメディ、ときどきシリアス。
果たして霊能は友達をどれだけ作れるのか！！
※主人公が一番人外じみてるとかは禁句（笑

第一話　霊能太郎と赤紙青紙

「あ～・・・友達欲しいなぁ・・・」

とある高校で、かなり寂しい独り言をつぶやいた男がいた。

何を隠そう、彼には友達がいない。いない理由は分からない。彼が人見知りだからではない。なぜなら彼には知り合いはたくさんいる。たとえば今いるこの教室の同じクラスのメンバーとは当然知り合いだ。

だが彼には友達ができない。

「なんだよ・・・俺は普通だよ・・・」

だが人は彼をそれとなく避ける。

唯一の友人とも言える存在、出家した幼馴染のゴンザレス（♂）いわく、

「おぬしはどこかずれておるからのぉ」

だそうだ。別にずれてるつもりはないんだが・・・と思う今日この頃。

「はぁ・・・もうこの際誰でもいいよ・・俺と友達になってくれよ・・」

彼の名前は霊能太郎、筋トレ好きの高校生男子だ。

「トイレ行こう・・」

この時、このタイミングでトイレに行ったことが――――

――――後の人生に大きく関わってくることになる・・・

第一話　霊能太郎と赤紙青紙

「あ、紙が無い・・・困ったな」
紙が無いのである、非常事態だ。切実に。
ヤバイ、本気でヤバイ。
具体的には満員電車で偶然となりの女性の胸に触ってしまい、悲鳴をあげられた時並にやばい。人生終了である。いや実際はトイレで紙が無かったくらいでは人生は終了しないのだが・・・
その時の彼はそのくらい焦っていたのだ。助けを呼ぶ友達もいない。
知り合い程度のやつに紙を持ってきてくれとは頼めない。
ピンチだ、全力でピンチだ。だがその時・・奇跡は起きた・・・
『赤い紙が欲しいか？青い紙が欲しいか？』
そう、天の助けである。いや・・・実際は赤紙青紙という妖怪なのだが・・・
今の彼には関係ない。

「トイレットペーパーを頼む！！」

妖怪がでた開口一番にこれだ。
『赤い紙が欲しいか？青い紙が欲しいか？』
「だからトイレットペーパーだって！！頼む！！」
『・・・赤い紙か青い紙か』
「分かった！赤でいい！何でもいいから紙をくれ！！」
そう、彼に色などこの際関係ない。紙でさえあれば拭くことができるのだから。
だがこの赤紙青紙という妖怪は当然のごとくトイレットペーパーが無くなった人に紙を渡す親切な妖怪何ぞではない。この妖怪は被害者に赤い紙か青い紙かを選ばせて、赤と答えれば血祭り。青と答

えれば血を抜き真っ青にさせ殺すという。
　では他の色を選ぶとどうなるのか。一説では冥界に引きずり込まれるとも言われている。
『・・・赤だな・・・』
　そう妖怪は言うとその恐るべき力で彼を血まみれにする――

「うわ鼻血でた」

　――はずだったんだが・・・
『ッ！！何故だ・・・』
「ちょっとぉー鼻血でたんだけど、マジで頼むからなんか紙くれよ。ヤバイって、このままじゃお尻も鼻も汚れたまんまになっちゃうよ？このままトイレ出たら俺本当に生きていけなくなっちゃうよ？社会的に」
　そりゃトイレから鼻血だらっだらの尻を拭いてない男が出てくるのを見たら誰だってトラウマもんである。
『青い紙欲しいか？』
「だから紙なら何でもいいって。頼むから急げって。トイレでしゃがみながら上向いてる俺なかなかにシュールだよ？客観的に見たらキモいことこの上ないよ？」
『いいだろう・・・青い紙をやろう』
　そして妖怪は彼の血を抜き殺す――
「うわくらくらしてきた・・この状態で貧血ってひどくね？何この三重苦」
『・・・なんでだよっ！！！』
　どうやら妖怪も突っ込まざるを得なかったらしい。
「知るか！早く紙をくれ！！プリーズ！！紙プリィィズ！！」
『何でお前死なないんだよ！なんで鼻血と貧血で済むんだよ！！』
「さぁ？腹筋鍛えてるからじゃない？」
『答えになってねぇよ！！もうお前帰れよちくしょう！！』

「だから紙渡せって言ってんだろうがァァァァ！！拭くもん拭かないと帰れねぇ事くらい分かれやァァァ！！！」
『本当だな？紙を渡したら帰るんだな？』
「当然だろうが、いいから紙もってこい！赤でも青でも黄色でもいいから！！」
『黄色でいいんだな？いいだろう』
その瞬間・・・その場の空気が変わった・・・
便器の向こう側が黄泉の世界へとつながり・・・彼を吸い込み始めたのだ！！
「ああ・・・換気扇か」
『もういいよ！！俺が悪かったですぅ！！普通の紙やるから帰ってください！！プライドズッタズタだよこんちきしょう！！』
そうしてどこからとも無くトイレットペーパーが補充され、全ては終わった・・・

「それにしても・・・助かったな・・・俺に紙をくれるなんて・・・良いやつだったな・・つーか妖怪だかお化けだかの類って本当にいたんだ」
そして彼は何かを閃いた顔でこう言った。
「・・・そうだ・・・友達・・・人間で作れないなら人外で作ればいいじゃん！！」
彼、霊能太郎はとても健やかな笑顔で言った。
「よし、明日からＧＴＯ作戦開始だ！！」

※Ｇ（人外と）Ｔ（友達になろ）Ｏ（ぉ）作戦

第二話　霊能太郎と人っぽい友達

「さて・・・人外と友達になるのを目指したのはいいけど・・・どこに行ったらいるんだ？俺の友達候補は」
放課後の学校の廊下で一人、人に聞かれたら全力で引かれるレベルのことを言ってる彼の名前は霊能太郎。趣味は筋トレ、そしていまだに牛乳キャップの見本を集めている男である。
「さて・・・やっぱ人外っていったら学校のどこかにいると思うんだよな・・・」

第二話　霊能太郎と人っぽい友達

彼は捜し歩いた。廊下の隅から隅まで。だが何も見つからない。おかしい、もう彼は全ての廊下を歩いた。廊下という廊下を全部見て回った。
だが会えない、もしかしてこの学校の廊下には人外はいないのだろうか。
そこで彼はついに気づいた・・・。なんで俺廊下ばっか調べてんだろう、と。
そして彼はとりあえず前回会ったトイレの赤青さんに聞きに行くことにしたのである。
コンコン
「居るんだろー赤青さーん、ちょっと相談に乗ってくれよー」
しかし何も起こらない。
「返事しないならずっとここに居座るぞー。友達を無視するとか酷

いんじゃねーかー？」
『誰が友達だ！帰れ！！』
今度はしっかり返事が聞こえた。
「照れるなよ、俺のピンチを無償で助けてくれたんだ。もう友達だろ」
『違げぇよ、断じて友達じゃねぇよ。あと気安く赤青さんって呼ぶな』
あきらかにイライラ感が伝わってくる声がトイレに響く。まぁ彼にはそのイライラは伝わってないようだが・・・
「で、だ。赤青さんはこの学校で他の人外の場所知らないかー？」
『スルーか、オールスルーかちくしょう。知らねぇよ、花子さんとか人体模型とかいるんじゃねぇーの？』
「おお、そいつらに会うのもいいな！他は？？」
『えーっと・・確かかなり前に屋上から飛び降りた男子生徒がいたな。未練たらたらっぽかったしまだ地縛ってんじゃねーの？』
なんだかんだで教えてくれるあたり、なかなかいいやつである。
「ありがと！！感謝するぜ赤青さん！あとでトイレットペーパー追加しといてやるよ！」
『いやいらねぇよ』
こうして彼は地縛霊を探すことにした。やはり飛び降りたんだし屋上だよな・・・と思いながら屋上へ向かう。しかし屋上には鍵がかかってて入れないことが判明した。
これに彼は、仕方ないので四階の窓から出て壁を登って屋上に行った。

『いやおかしいだろう君！』

するとどこからか声が聞こえる。
その声に霊能の目は輝きだした。
「見つけたぁぁぁ！！友達になってくれ！」

さっそくである。
そんな彼の前にはどことなく古ぼけた制服を着た、メガネの男子生徒が立っていた。微妙に透けているが足はある。
『いやその前に！何さらっと流してるの！？何あたりまえのように壁のぼってきてるの！？』
「あたりまえのように、じゃない。当たり前なんだ」
『認めれるか！一瞬納得しそうになったわ！！』
「でも俺の友達のゴンザレス（黒人）なら壁登るのに手すら使わないぞ？」
『マジで！？いや駄目だ！僕は認めれない！！それを現実だと認めたくない！！』
「どうでもいいから友達になろうぜ！」
『ここまでの流れ完全否定！？』
いい笑顔でいう霊能、それに対してやたらと突っ込む幽霊。
シュールな絵面である。
「で、友達になってくれるのか？」
その言葉に一瞬うれしそうな顔をする幽霊、しかしすぐにその笑顔は曇る。
『だめだよ。僕はここを離れれないんだ。』
寂しそうに言う。
「断る」
それを当たり前のように断る霊能。
『いや断るって言われても・・・僕がここにい』ズドン！！
言葉を遮るように聞こえた大きな音。それは紛れも無く足音。
二メートルはあろうかという妖怪がそこにはいた。
その妖怪の見た目は犬。しかし当然普通の犬ではない。
首が三つある犬、ケロベロスだ。
なぜ学校にケロベロスが？その理由は分からない。ただ、その犬が禍々しいことだけは誰が見ても分かった。
「ペットか？でっかいな」

彼一人を除いて。
『あれのどこがペットなんだよ・・・とにかくアレが僕がここにいなくてはいけない理由さ』
「何ゆえ？」
『初めは別にここに居る理由なんて無かった、むしろいろいろな場所に行っていたさ。だけどどこからかここにあの犬が住み着いたんだ』
幽霊の彼は続ける。
『あの犬は人を食う、魂ごとね。だから僕はあいつを見張っていなくちゃならない』
「何でだ？ほっといて逃げればいいのに」
『僕があいつを止めてれば襲われるはずだった誰かが助かるんだよ？むしろ止めない理由がないじゃないか』
「いい事言うね」
そんな話をしている間に犬は猛然と襲ってくる――――
『早く逃げて！ここは僕がひきつけるから！！』
「お手」ズドンッ！！
幽霊の前でケロベロスに潰される霊能。
『っておい！！お手ってなんだよお手って！！今シリアスだったじゃん！！かっこいい場面だったじゃん！！』
「しつけがなってないな。お手は頭にするもんじゃ無いぞ？」
平然と犬の手を持ち上げる霊能。
『なんで無事なんだよ・・・とにかくここは僕にまかせて逃げてくれ』
「おかわり」ズドンッ！！！
『アホかァァァ！！』
そして平然と犬の前足を持ち上げて立ち上がる霊能。犬にも若干の怯えが目に見える。
「いいぜ、こいつが人を襲うせいでお前が俺と友達になれないって言うなら――

――――まずはその幻想をぶ『著作権ーーー！！！』」
『やめろ！！リアルに止めろ！！』
「いい所だったのに・・・まぁいいや、ようはこいつが人を襲わなければお前はここを離れれるんだろ？なら俺が持って帰ってこいつを飼う。んでしつける」
二メートルのでかい犬を指差して言う霊能。
『無理言うな。どうやってこんなのを飼うんだよ。でかすぎるだろうが』
「大丈夫だ、こんな時のために大きな犬をチワワサイズに変える不思議なお札を友人のゴンザレス（歯並び綺麗）からもらったから」
そういってポケットから取り出したのは何か字が書かれているお札。それにしても限定的過ぎる能力である。
だがそれをケロベロスに当てると・・・見事なほどの効力を見せ、二メートルあったケロベロスは一瞬でチワワサイズになった。反則過ぎるお札である。
『なぁ・・・僕は夢を見ているのか？』
呆然と一連の流れを見ていた幽霊はつぶやく。
「幽霊が夢を見るのかは知らないけどこれは現実だよ」
『そうか、夢であって欲しかったよ』
憔悴しきった顔で言う幽霊、なんとなく彼の気持ちも分からんでもない。
「これで俺とお前は友達だな。ああそうだ、俺の名前は霊能太郎。お前の名前は？」
『蘇我（そが）　入鹿（いるか）だ。これからよろしく。』
「ああ！これから人外を探し回るけど付き合ってくれよ？」
『ここに居る理由も無くなったしね。成仏する気も無いし。そもそも僕の未練は人生を楽しめなかったことだ。これからの予定も無いさ』
こうして二人は出会い、これからさまざまな事を体験していくことになる。

だがそれはまだ先の話、とりあえず今は――――
「なぁ、ちっちゃくなったケロちゃんは何を食べるんだ？」
『さぁ・・・犬だしドックフードでいいんじゃない？』
もう外は暗いし、家に帰ろう。

第三話　霊能太郎と呪いのビデオ

「これは・・・本物なのか？」

自宅でとある物を手に持ち言う。

彼の名は霊能太郎、筋トレ好きで前方倒立回転とびができる男だ。

『ああ、間違い無い。たぶん』

そんな彼の隣にいるなんか透けているメガネの男の名前は蘇我入鹿、特徴は幽霊であることと前方倒立回転とびができる事だ。

「見よう！！今すぐ見よう！！！」

はしゃいでいる霊能の目は輝いていた、そりゃあもう生き生きと。

そもそも彼らが何をしているのかを説明するのは・・・少し過去にさかのぼらなくてはならないだろう。

第三話　霊能太郎と呪いのビデオ

それは学校が終わった放課後・・・霊能と彼に取り憑いてる感じになってる蘇我は最近の日課のように男子トイレの個室に来ていた。

「赤青さーん、授業おわったよー」

『そうか、だが何で俺に報告に来るんだ？おい？』

『僕と霊能が赤青さんの友達だから？』

「大体そんな感じ」

『理由になってねぇよ！つーか俺お前らの友達じゃねぇーからな』
「照れ屋だな」
『ああ、間違いない、照れ屋だ』
『帰れ！！』
トイレで彼らと話しているのは赤紙青紙という妖怪である。
ほとんど実体は無いようなものだから前方倒立回転とびはできない。
『で、本当に何しに来たんだお前らは・・・』
「いやぁ・・・人外探してるんだけどなかなか見つからなくって・・・」
『赤青さんならどこにいるか知ってるかな、と』
『知るか、知ってても教えんわ』
「またトイレットペーパー補充しとくからさ、頼むよ」
『いらねぇよ、つーかお前が前に補充したトイレットペーパーことごとく濡れてたじゃねぇか、いやがらせか』
「あれは俺のせいじゃないぞ？もともと濡れてたんだ」
『それを持ってきたのはお前だろうがぁぁ！！』
個室トイレに響く叫び声、蘇我は多少声の大きさにビクッとしたようだが霊能は微塵も動揺しない。
「まぁまぁ落ち着いて・・・今度は乾いたのにするから教えてよ」
『乾いてるのは前提だろうが・・・はぁ、まぁいいや。で、花子さんとか人体模型は探したのか？』
『探した。僕と霊能であらゆるところを駆けずり回ったよ・・・』
『いや女子トイレと理科室だけだろ調べるのは・・・』
「でもだめだった。女子トイレは入りづらいし理科室にはそもそも人体模型が無かった」
『そっちの幽霊なら女子トイレにも入れるだろう？』
『ばれないからってやっていいことと悪いことがあるでしょう？紳士なめないでくださいよ』
「えっ？蘇我って紳士なの？？」

『紳士だよ！！紳士オブ紳士だ！！』
『てっきり見えないのをいいことに覗きやらなにやらいろいろやってると思ったが・・・』
『赤青さんまで！？僕は紳士だよ！！』
「んじゃ紳士って十回言ってみて」
『紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士紳士！！！』
「はぁ、本当の紳士ってやつは自分が紳士であることをひけらかしたりしないもんだよ。この偽紳士」
『霊能が言えって言ったんだろうがぁぁぁぁ！！』
またしてもトイレの個室に叫び声が響く。うるさいトイレである。
『じゃあとりあえず学校の七不思議的ななにかから探せば良いんじゃないか？』
「それが・・・その・・」
珍しく霊能にしては歯切れが悪い。
『僕の代から受け継がれてるこの学校の七不思議を知らないんですか？』
その横で意外そうに言う蘇我。
『ああ、知らないな・・・そんなに言いづらいもんなのか？』
『言いづらいわけではないんですが・・・霊能は認めたくないんでしょうね』
『興味深いな、聞かせてくれ』
「・・・一つ目」
ぼそっと霊能が声を振り絞るように言う。
「四時四四分に計ると廊下の長さが変わる」
『おお・・・案外それっぽいじゃないか』
「三センチほど」
『しょっぼいな！』
「二つ目、二つ目の不思議が無い不思議」
『早くもネタ切れ！？』
「三つ目～七つ目、それぞれの不思議が無い不思議」

『適当だぁぁぁ！！』
むなし過ぎる七不思議である。
『いやこれそもそも七不思議って言えるのか？実質一つだしその一つもしょぼ過ぎるだろうが・・・』
『まぁそんな感じで・・・で、何か人外の手がかりを知りませんか？』
『うーん・・・そんな漠然と言われても分からんなぁ』
『ですよね・・・それじゃ今日は帰ります。さよーならー』
「ばいばい赤青さん！！また明日！」
『いやもう来なくていいぞー、つーか来るな』

そんなこんなで家に帰ってきた二人は適当にケロちゃんの相手をしてからポストに見覚えの無いビデオテープが入ってるのを見つけた。
色は黒く、うっすらと血の跡がある。
「これは・・・？」
手にとって見てみると、このビデオテープには名前が書いてあった。
ＳＡＤＡＫＯ、と。
『なんでローマ字なんだよ！！』
「とりあえず家に入ろう、話はそれからだな」
そして家に入った後、現在に、冒頭に戻るわけである。

「これは・・・本物なのか？」
『ああ、間違い無い。たぶん』

蘇我はそのビデオテープの禍々しさが分かったようだ。
「見よう！！今すぐ見よう！！！」
まぁ霊能はまったく分かってないようだが。いや、分かってて無視してるのかもしれない。
『まぁ大丈夫だろう、とりあえずテレビ用意だ！』
すばやいコンビネーションで準備をする。そしてジュースとお菓子を用意、寝転がってビデオをつける！！当然ジュースはカルピスと三ツ矢サイダーだ。
だがテレビは砂嵐、なかなか何も映らない。
「マダー？」ポリポリ
『もうちょいだと思うよー』ゴクゴク
お菓子を食べ、ジュースを飲む二人。
気分はまさに金曜ロードショーのカリオストロの城を見るときな感じである。
するとテレビの映像が映り始めた・・・奥に井戸があり、そこから女の手が出てきて・・・
「おおー」ゴクゴク
少しずつこちらに向かってくる――――
『すげー』ポリポリ
やがて女は画面に近づき――――
『あ、ちょっとカラムーチョ取ってくるわ』
「今いいとこなんだから後にしろって」
ありえないことに画面から手が出てくる――――
「あ、ポテチ無くなった・・蘇我ーやっぱカラムーチョお願いー」
『えー今クライマックスだろうがーだからさっき言ったのに・・・』
そして画面からその女が出てきた――――！！
『の、呪い殺しますどすえー！』
画面から出てきたのは見た目小学校高学年の黒髪ロングな女子！！
服装は白い着物！！さらに裸足！！！このとき霊能と蘇我の心は一つになった。

やべぇこの子かわいい・・・と。
『うぅぅ・・・怖がってくださいよぉ・・・』
だがその反応はお気に召さなかったようで若干涙目になる少女。
「おおい！泣くなよ？めっちゃ怖いから！な？」
『ああ、怖い怖い！可愛すぎて怖いよ！』
全力で慰める二人、たしかに女の涙ほど怖いものは無いのかもしれない。
『ほんとどすかぁ？』
「ああ、本当だ！だから元気出せ？」
そういうとえへへと笑う少女、とりあえずは泣き止んだようだ。
『で、君の名前は？』
『えぇと、山村貞子です。呪い殺しにきましたぁ』
『君みたいな可愛い子に呪い殺されるなら紳士として本望さ！！』
「蘇我はすでに死んでるだろうが」
『ああ画面から出てきた瞬間に萌え死にしたな』
「もう死んじゃえよお前」
おかしな会話が繰り広げられる霊能君の家、ちなみに霊能は一人暮らし（幽霊憑き）だ。
「まぁ紳士（へんたい）は置いといて、俺と友達になろう」
『え、・・でも私は呪い殺しに・・・』
『霊能を殺す自信があったら試してみると良いんじゃない？』
「おいコラ何さりげなく人殺し推奨してんの？馬鹿なの？」
『じゃあ・・やってみますえ』
「さっちんも何試してみようとしてんの？自重という言葉を知らないの？」
『むむむむむぅ・・・・・あれ？』
「どうしたんださっちん」
『さりげなくさっちんって呼んではりますねぇ。全力で呪ってるんですけど・・・』
『霊能、体調の変化は？』

「背中がかゆい」
『それだけどすか！！？ショックです・・・』
『まぁそんなもんだって、ちなみに霊能は霊能力どころか霊感すら皆無だぞ』
『さすがにうそですよね！！？』
「いや本当だぜ？蘇我が見えるのもたぶん視力が良いからじゃないか？」
視力が良い程度で霊が見えるならマサイ族は大変である。
「で、友達にならないか？まぁさっちんの帰る井戸は壊しといたが」
テレビをみるとなぜか井戸が壊れている。
『ええぇ！！！何で画面の中のものを壊せるんどすかぁぁ！！？』
「気合で」
『・・・信じられないどすなぁ』
『ま、これでさっちんは帰れなくなった訳だからここに居るしかないな』
「これからよろしく、さっちん」
『・・・これからよろしくどすぅ・・・』
貞子が仲間に　なった。その後はさっちん歓迎会という名目でお菓子とジュースを飲み、時間が過ぎていった・・・。ちなみに歓迎会のとき貞子は
『おいしいどすぇ・・・おいしいどすぇぇぇ』
やたらお菓子やジュースに感動していた。
井戸暮らしのサダコッティな彼女にはお菓子もジュースも食べる機会が無かったのだろう。

「電気消すぞー」
『紳士としては少女に帰る場所を壊して同居をせまるってただの犯罪に見えるがまぁいいかかわいいし・・・』

「結果オーライさ」
『布団で寝れるって最高どすなぁ・・』
ふとんにくるまりながらうっすら涙を浮かべる貞子。
「ホラ本人も最高って言ってるし」
『まぁ井戸の生活よりかはよっぽどいいだろうな』
そりゃそうだ、井戸よりは霊能の家のほうが居心地がいいに決まってる。
「あ、さっちーん」
『なんどすかぁ？』
「まだまだ同居人とか増えるかも知れないけどかまわない？」
『私がここに居させてもらえるならぜんぜんかまへんどすぅ』
「じゃ、また明日からも人外探しだな！」
呪い殺されることも無く、妹のような存在ができた今日みたいな日もあれば、人外が誰も見つからない日だってある。
だが友達がゴンザレス（筋肉質）しかいなかった時に比べて、人外を探し始めてからなんだかんだで充実した日々を送っている気がする霊能であった。

第四話　霊能太郎と口裂け女

「じゃあ、行ってくる！！！」
日曜日の夜中、霊能家の玄関でやたら楽しみそうに言うこの男の名前は霊能太郎、
筋トレ好きでがむしゃらに腹筋ばかりを鍛える男だ。
『おう、行ってこい！！』
その隣で笑顔でサムズアップしている彼は蘇我入鹿、幽霊である。
地縛霊なのか背後霊なのかいまいち分からないポジションになっているが、まぁ悪霊ではないだろう、たぶん。
『いってらっしゃいどすー』
にこにこしながら手を振る白い着物の少女はさっちん、貞子である。
好きなものは甘い物。特技はテレビなどの画面の中に入れることである。

「よっしゃ！！！待ってろよ人外ーー！！！」バタン！！

『・・・行ったな。だけど玄関で大声だして言うことじゃないと思うんだが・・・』
『・・・本人曰くもう近所の人の目なんて数年前に諦めたらしいどすぇ』
家に残った二人、なぜ残ったのかは簡単。蘇我が夜中に小さな子を連れまわすのは気が引けるし、さっちんを夜中なのに家に一人にするのも紳士としてできない。

という建前で二人っきりになりたかったのである。
『でも霊能はん大丈夫なんどすかぁ・・・？』
さっちんは心配そうだ。そりゃそうだ、霊能力も何にもない男が自分から人外に会いに行くのだから。
『俺はむしろ相手を心配するね・・・』
蘇我も不安そうだ。なんたって霊能は小型隕石を蹴り返した事のある男なのだから。
『あいつは人外人外言ってるけど本人が人外みたいなもんだよなぁ・・・』
『それを言ったら負けなんじゃないどすか・・・？』
二人の目が遠くを見ている。
『でもまぁこれから会う相手は対処法があるから最悪の場合も大丈夫でしょ』
『ポマード・・でしたっけ？』

第四話　霊能太郎と口裂け女

一方、そんな二人の見送りを受けた霊能は人通りの少ない路地をうろうろしていた。
目的は一つ！人外と会うためである。最近どこからともなく噂が広がっているのである。
夜中に外を出歩くな、口裂け女に殺される。と。
まぁそんなのお構い無しに霊能は友達になろうとしているわけだが・・・
なかなか出会えない。
「まだかな！まだかな！！」
遠足の前日の小学生のようなテンションの霊能、彼の頭の中はすでにこれから会えるであろう口裂け女でいっぱいだった。

「楽しみだ・・・ああ楽しみだ・・・」
もう彼のわくわくは光る雲を突き抜けてｆｌｙ　ａｗａｙしていた。
だがまだ出てこない、時間がたてば立つほど期待は高まり、テンションが上がる一方だ。
だいたい家を出てから3時間はたっただろうか・・・
だがテンションはとどまる所を知らない。今の気持ちを聞かれたら「最高です！！」と答えたいくらいにはテンションが上がっていた。
―――そしてついにそのときは来た。

『ねぇ貴方・・・』

「最高です！！」

―――訪れる微妙な空気・・・・とまどうマスクをつけた女性。
『ええぇと・・・まだ何も言ってないんだけど・・・』
正直やっちまったという感じでテンションがどんどん下がっていく霊能。
「・・・どうしたんですか？」
そういうと女性はニヤリと笑うような目線で・・・
『私、きれい？』
「目が濁ってる」
―――そしてまた訪れる微妙な空気・・・・
『・・・目とかじゃなくて、私キレイ??』
「グラサンしたらいいんじゃないか？目も隠せるしマスクにもあうぞ」
目に見えていらいらしてきたマスクの女。
『・・・い、一般的にみて私は美しいの部類に入る？』
「まぁ入るんじゃね？目さえ隠せば」

・・・ブチッという音が女のこめかみのあたりから聞こえたような気がする。
『これでもかぁ！！！』
そういうと女はマスクをはずし、人並み外れた大きさの口をみせる――――！！
それをみた霊能はと言うと・・・・
「はぁ・・・思ったより裂けてないじゃねーかふざけんなそんなんで口裂け名乗るな」
『へ？』
「なんだよせっかく期待してたのにせいぜい一般人の１．５倍程度じゃねーかしょぼいわちくしょう」
『・・・へっ？？えっ？？？』
「まだ新年会にやったゴンザレス（ちくわ好き）の一発芸、［あたしんちのおかあさんの真似］のほうが裂けてたよ。あご全部が口といっても過言じゃないくらい裂けてたよ。仮にも口裂け女やってるならだれにも口が裂けてることでは負けないくらいの気概見せろよ」
なかなかの酷評である。
『・・・うるさい、私だって・・好きでこんな口になった訳じゃないのよ！！！』
するとどこからとも無く大きな鎌を取り出す口裂け。少なくとも口から出したわけではないようだ。
『殺す！！殺してやる！！！』
その大きな鎌が霊能の首に――――

ガッッ！！

もう一度首に――――

ガッッ！！！

まだまだ首に――――

ガツッ！！！！

「痛い」

『痛いで済ますな！！　！！』

『何で！！？何で切れないの！！？』

大きな鎌が首に当たっているがすり傷すらない霊能の首。本当にこいつは人間なのだろうか。

「だから痛いって。俺腹筋鍛えてるから簡単には切れないって」

『今切ってるのは首でしょうが！！』

ボキッ！！

何かが折れる音がした・・・だが当然霊能の首は無傷だ。つまり・・・

『私の鎌がぁ！！首の筋力に負けた！！？』

焦る口裂け女。

『くっ・・・いったん退却ね・・・』

口裂け女の怖いところは、なにもその鎌だけではない。彼女は１００メートルを三～五秒で走るといわれている。その速さも彼女が有名になるほど恐れられている理由でもある。

「どこいくんだ？」

当然のごとく並走している霊能。

『な、なんでついてこれるのよ！！来ないでよ！！』

「だが断る、まだ俺は目的を果たしてないからな」

逃げ切れないと悟ったのか、折れた鎌を構えてとまる女。ちなみに鎌を構えるは別に駄洒落でいった訳ではない。

『・・・私を殺すのね、醜いからって貴方も私を殺そうとするのね！！』

「はぁ？」
『来ないで！！私だって・・・こんな口にならなければ・・・ッ！！』
「まぁいい、友達になってくれ」
『殺っ・・・え？』
「だから、友達になってくれ、つーかなれ」
『・・・私が怖くないの？醜いから近づきたくないんじゃないの？』
「うるせぇ中途半端女、口もおもったほど裂けてないくせに。お前のどこに怖がる要素がある？せいぜいその濁った目だけだ」
『・・・いいの？私が近くにいていいの？』
「当然だ、友達だからな」
そういって笑う霊能、対照的に泣き出す口裂け女。
「うわっ！！泣くなよ！え？俺のせい？俺のせいなの？」
『ううん・・・貴方、名前なんていうの？』
「霊能太郎だ、ちなみに愛犬の名前はケロちゃんだ」
『愛犬は聞いてないけど・・・そっか、霊能・・これからよろしくね』
「おう！ちなみにお前はなんて呼べばいいんだ？」
『名前なんてもう忘れちゃったからなぁ・・・』
「じゃぁくっちーで」
『うわ、なんか適当！！』
「いいじゃねぇかくっちー。・・・帰るところはあるのか？」
『一応住んでる空き家があるわよ』
「そっか、じゃ・・また今度な！なんかあったら俺を頼れよ？友達なんだからな！？あ、これ携帯番号です」
そういって携帯番号を差し出す霊能。ちなみに霊能の携帯には親の連絡先とゴンザレスの寺の番号しか入っていない。悲しいやつである。
『携帯かぁ・・・私も今度買おうかな。いや買えるのかな・・・あ、お金無いわ・・・』

なにやらぶつぶつ言いだしたくっちー。
「んじゃじゃーなー」
こうして霊能とくっちーは別れ、帰宅した。
ちょうどこの頃から口裂け女の出没したという噂は一切聞かれなくなったという・・。
そしてこの頃からとあるコンビニでマスクをしながら働いている女性がいるとかいないとか・・・。

「ただいまー」
『おかえり。どうだった？』
帰宅した霊能を待っていたのは蘇我だけ。さっちんは既に寝てしまったようだ。まぁ夜中だしね。
「くっちーの目は濁ってたけど根はいいやつだ、とだけ言っておこう」
『時々お前が何を言ってるか分からなくなるよ・・・』
「まぁいいじゃないか、友達にはなれたよ」
『そうか、そいつはよかった』
「『じゃ、もう寝るとしますか』」
こうして今日も一日が過ぎていく・・・だけども友達も増え、とても充実した一日だった。
願わくばこれからもこんな日が続きますように・・そうつぶやいてから霊能は寝るのであった。
ちなみに、二人っきりで留守番していたとき、蘇我はさっちんの寝顔を見て
『ああ・・・これを見れるだけで生きている価値がある・・・っ！』
と感動していたそうな。お前もう死んでるっちゅーに。

第五話　霊能太郎とメリーと敵と

はぁい！！私メリー！
今廃ビルにいるの。

私はいつもランダムで誰かに電話をして、標的をきめたらその人に電話を逐一かけながらどんどん近づいていって後ろから襲うんだけど・・・

プルルルル・・・プルルルル・・・

・・・どうやら私は運が果てしなく悪いらしい。

プルルルル・・・プルルルル・・・

ガチャ「もしもし、俺霊能、今お前の二キロ圏内にいるよ」

私、メリー。今、ピンチです。

第五話　霊能太郎とメリーと敵と

『ええぇ・・・なんなの？どういう事なの・・・！？』
落ち着け！落ち着くのよメリー！！大丈夫、自分を信じて！氷のように冷静に、冷えたこんにゃくのようにＣＯＯＬに！！
いやこんにゃくって何よ！こんにゃくはこんにゃく芋からできてい

る食べ物！！違うそういう意味じゃないわ！！！
まずは状況を確認・・・！！！
『えぇーと・・いつものようにランダムに電話をかけて・・・』
そう、この時点では何も起きてなかった。電話をかけた相手がとてつもなく悪かったのよ！！そう・・・かけた相手が・・・
プルルルル
ガチャ「もしもし、俺霊能、今お前の一キロ圏内にいるよ」ガチャ
ホンギャァァァァ！！！
霊能って誰よ！！そう、私はこの霊能って人に電話をかけた。
そしたら・・・

『もしもし私メリー、今「俺は霊能だ、今から行く」あなたの・・・』ガチャ
って・・・・

この時点で何かがおかしかった！！今から行くって何！！？来ないで！！
それからリダイアルしてきて・・・初めは遠かったのにそれでどんどん近づいてきて・・・

プルルルル
ガチャ「もしもし、俺霊能、今お前の５０メートル圏内にいるよ」ガチャ

今こんな感じですギャァァァァァ！！！！嫌ぁぁぁぁぁ！！助けて！！
こんにゃく神よ！メリーを助けてぇぇぇ！！こんにゃく神って誰だよぉぉぉぉ！！
もういやぁぁぁぁぁ！！！いや、待って！落ち着いて・・・
ＣＯＯＬになるのよメリー・・・この霊能って人が私の居場所を知

ってるわけが無い・・・
そう、これはいたずらよ！怖がる必要なんてどこにも無いわ！！

プルルルル
ガチャ「もしもし、俺霊能、今お前のいる廃ビルの前にいるよ」ガチャ

場所もばれてたぁぁぁぁ！！！こいつ何者なのよぉぉぉ！！！
逃げよう・・！！逃げるしかない！！私の生きる道は逃げに徹することで真の意味を発揮するのよ！！逃げて逃げて将来はこんにゃく畑で優雅な老後を・・・
って意味が分からない！！混乱しすぎよメリー！！とにかく窓から脱出を・・・！！！
あれ・・・？足音が聞こえてきた・・・？

プルルルル
ガチャ「もしもし、俺霊能、今お前のいる部屋の扉の前にいるよ」ガチャ

もう逃げる時間無いぃぃぃぃぃ！！！パニックしすぎたぁぁぁ！！！

（（落ち着きなさい、メリーよ））

あ、こんにゃく神様！！・・・こんにゃく神様ぁ！！？
いやまぁいいわ！！もう幻覚でも幻聴でもいいから私を助けてぇぇぇ！！！

（（そしてあきらめなさい、メリーよ））

裏切られたぁぁぁぁぁ！！！！こんにゃくのようにつるっと裏切ら

れたぁぁぁ！！！

トントン

『誰！！？私の肩をたたくのは・・・今それどころじゃないのよ！！』

トントン

『ああもう！！だから今はどうやって逃げるのかを――――「俺霊能、今お前の後ろにいるよ」』

あ、私死んだわ。あーあ、これ間違いなく殺されるパターンだわ。だって世界がスローだもの。色が無いもの。ふだん人の背後をとって襲うのは私だったのに・・・・ある意味私にはふさわしい最後かもね。

（（いまこそこんにゃくを食べるのです、メリーよ））

もってねぇよ！！お前絶対殺す！！私が死んでも絶対殺す！！

ああもう・・・まだ死にたくな・・・あ！！そうだ！！そう！私にはアレがある！！

見た目か弱い少女にしか見えない私が人の背後を取れるのはアレのおかげ！！

（（こんにゃくか？））

死ね！！

私の妖怪としての能力は・・・電話した相手の背後に瞬間移動する能力！！！

いつもじわじわと距離を詰めてくみたいに言ってるけどあれ実際距離つめてるわけじゃないから！！私が動いてるのは実は最後の電話のときだけ！！誰でもいいから電話をかけてテレポートすれば逃げれる！！

「俺と友達にな」

『番号は適当に！！通話！！』

ガチャ「もしもし、某はゴンザレ『もしもし私メリー今あなたの後

ろに行くの！！！』」ガチャ！！！

シュン！！

「消えた・・・」

廃ビルの中でｏｒｚをしている彼の名前は霊能太郎、趣味は筋トレでインナーマッスルも適度に鍛えている男だ。

『逃げられたな・・・まぁ・・・ドンマイ』

そのとなりで慰めている幽霊、彼の名前は蘇我入鹿、筋トレは霊能に勧められてたまにやるが幽霊に効果があるのかは微妙だ。

『だからやめろって言ったのに・・・』

「友達逃した・・・・」

そう、彼らはメリーさんから電話がきたのをいいことにリダイアルしまくっていたのである。

そのたびにどんどん近づいていったのでだいぶ遠いところにきてしまった。ちなみにメリーさんの位置を逆探知したのは蘇我だ。蘇我いわく、霊力と電気は相性がいいらしい。メリーさんに近づいていっているときの彼らはとても楽しそうだった。

蘇我はそれこそ

『やめとけって・・・普通に会いに行こうぜ』

とか言っていたが今回のスニーキングミッションにはダンボールをかぶるほどノリノリで楽しんでいた。

『さて・・・帰るか』

蘇我が霊能をつれて帰宅しようと歩き出す。

しばらくとぼとぼと歩く霊能にあわせて帰っていると、ザンッ！！と突然何かに襲われた。

鋭い爪で襲ってくるその何かは明らかにこちらを狙ってきていた。

『・・・悪魔か！？』

そう悪魔である。禍々しいオーラと濃厚な殺意にまみれたそれは—

――
――――的確に命を狙ってきている！！
「友達になろ」ザンッ！！「危なっ！！」
霊能の言うことなど理解すらしていない・・・いや、耳にすら入っていないのだろう。
ただただその悪魔は命だけを狙ってきているっ！！
『霊能！！こいつはおそらく低級悪魔だ！！話の通じるようなやつじゃない！！』
「肉体言語は？」
『多分通じる！！』
『コロスコロスコロス！妖怪幽霊妖精悪魔！！ソノ全テヲコロス！！』
自分が悪魔の癖に殺す対象に悪魔が入っているとはいかがなものか。
『全テハ現世カラ消滅シ！人間ハ人間ノ場所ニ！人外ハ人外ノ場所ニ！！』
そう言いながら悪魔は蘇我にその鋭い爪を向ける。
だがバックステップで間一髪避ける蘇我、反撃とばかりに顔面に蹴りを叩き込む！
そして蹴られて一瞬動きが止まった所を――――
「何物騒なこと言ってやがる！！」ドグチャァ！
霊能が思いっきり殴る！！！
その一撃にはメリーさんに逃げられたことへの苛立ちも大いに含まれているだろう。
八つ当たりもいいとこである。
『全テハ・・カマタリ様ノタ・・・メニ・・・』
最後にそういい残すと悪魔は光の粒になって消えていった。
「蘇我・・・今のやつはいったいなんだったんだ？随分物騒なことを言っていたが・・」
だが蘇我はうつむいたまま何も答えない・・・霊能はもう一度問う、
「おーい、蘇我ー。今のに心当たりはあるかーい？」

蘇我はうつむいたまま答えた・・・それこそ、信じられないような顔をしながら。
『最後にカマタリ様って言っていたよな・・・？』
「ああ、うんなんか言ってたね。」
『多分それは・・・鎌足。中臣鎌足のことだと思う』
「そんな深刻そうに言われても・・・誰だよ。赤い帽子の配管工の進むステージにおいてあるコインを設置してるやつくらい誰だよ」
その言葉をシリアスなんだからふざけんなといわんばかりにスルーしつつ、
搾り出すように・・・懐かしむように・・・それでいて苦しむように蘇我は言った。
『中臣鎌足は・・・俺の親友だった男だ』

第六話　霊能太郎と中臣鎌足

『中臣鎌足は・・・俺の親友だった男だ』
蘇我の言った言葉に、霊能は驚いた。
「お前・・・友達いたのか・・・」
流石霊能、驚くところが違う。
『生前のな、まぁあいつは僕よりも早く死んでしまったが・・・』
「蘇我だけが一方的に友達だと思ってたんじゃないのか？」
『いや、親友だったよ』
「本当にそうだと思ってるのか？実は違うかも知れんぞ？？」
『お前は僕に何の恨みがあるんだよ・・・』

第六話　霊能太郎と中臣鎌足

低級悪魔が最後に言った「中臣鎌足」という男が本当に蘇我の元親友だったかは置いといて、二人はなぜ悪魔が突然襲ってきたのかについて考えていた。
「んで蘇我はその・・・鎌足君に恨まれるようなことでもしたのか？靴に画鋲入れるとか」
『陰湿だな・・・やってないよ。入れたのはせいぜいうまい棒くらいだ』
「生前のお前はどうやら頭が壊れていたようだな」
『何を言う、明太子味だぞ？』
「訂正、今でも壊れっぱなしだわ」
だがいくら考えても話はまとまらない。

なぜ悪魔は襲ってきたのか？なぜ鎌足は刺客を放ってきたのか？なぜうまい棒を砕いてから食べるやつが存在するのか？それはうまい棒への冒涜じゃないのかなど、さまざまなことについて考えたが、一向に分からない。

とりあえず霊能は近くの空き地の草むらからこっちを覗いていた悪魔を引っ張り出して話を聞くことにした。

『霊能・・・？いつからそこにその悪魔がいるって気がついたんだ・・・？』

なに当たり前のように悪魔引っ張り出してんだよ！！！と、内心叫びつつ、冷や汗をたらしながら蘇我は言う。

危なかった。

霊能が気づかなければ後ろから奇襲を仕掛けられていたのかもしれなかったからだ。

「いや、肩甲骨にやたら視線を感じたから・・・」

意味が分からない。

肩甲骨で視線を感じる霊能もそうだが、肩甲骨を見ている悪魔も悪魔だ。アホか。

「で、お前は何者だ？？手短に話せ」

霊能が威圧しながら悪魔に話す。その瞬間、バッとその悪魔、見た目はどこぞの爺さんに羽と牙が生えているだけだが・・・が霊能の手を振り切って距離をとった。

そして霊能に襲い掛かった！！！

『貴様らに教えることなど何も無い！！！今ここで死ねぇぇぇぇ！！！』

パァン！！

『・・・なんでも答えましょう』

霊能の容赦ないビンタで一瞬にして改心した翁の悪魔。惨めである。

「襲った理由、初恋の相手の名前、そして鎌足の目的を言ってもらおうか」
『二番目は果てしなくいらないだろ・・・』
『鎌足様に言われたから、まゆちゃん、そして人外をこの世から消すためですな』
『あんたも答えなくていいだろ!!』
蘇我のつっこみが静かな町にむなしく響く。だが聞き捨てならないことを聞いた。
「あぁ!?人外を消すってどういうことだ!!?」
『簡単なことじゃ・・・鎌足様はその魂を悪魔に捧げるほどに人外に恨みがあったのじゃろうて・・・』
『悪魔に魂を・・・?』
『そのとおり!!鎌足様は大魔王とも呼ばれるお方、アスモデウス様と契約なさったのだ!』
「つまり、鎌足君は人外を消すためになんか凄そうな悪魔と契約して頑張ろうとしている・・・と?」
霊能からすればふざけた話である。なんてったってそれは霊能から友達&友達候補を奪うということに他ならないのだから。人外がいなくなれば霊能にはまた灰色の生活が待っている。
それだけは全力で避けなくてはならない。
「オイコラ、鎌足君は今どこにいるんだ?ちょっとそれは見過ごせねぇなぁ・・・」
怒りオーラを出しまくりながら翁を尋問する霊能、知らない人が見たら通報間違い無しであろう。
『貴様なんぞに教える訳なか』
パァン!!
『滋賀県です』
またもやビンタで態度を一変する翁
『滋賀県・・・?ちょうどいいな・・・今から会いに行くか・・』
何がちょうどいいのか?それは簡単。メリーさんを追ってきた二

人は今滋賀県にいるのだ。ちなみに二人が住んでるのは愛知県。メリーさんを追うためだけにこの移動距離とは・・・行動力のある馬鹿は凄い。
「滋賀のどこだ？」
『知らん。ワシもそこまで教えてもらってないのでな。ただ滋賀のビルとしか聞いていない』
困った。詳しい位置まで分からないことにはどうしようもない。せめてヒントでもあればいいのだが、残念なことにヒントもなさそうである。
と、そのようなことを考えているときに蘇我がふと言った。
『あいつの実家は滋賀だったな・・・』
それしかない上に最大のヒントである。二人はもうそこに行くしかない。
「場所分かるか！？」
『・・・お前の後ろだ』
そういわれて霊能が振り向くとビルが立っていた。
ビル看板にはでかでかと［中臣鎌足基地！よいこは入らない！！］と書いてある。
「なんで気づかなかったんだろうな・・・」
『・・・まったくだ』
『ワシもう帰っていい？』
「じゃ、潰しに行くか」
そういってビルに入っていく霊能と蘇我。そしてその場には翁だけが取り残された。
『・・・魔界に帰ろう』
そう疲れた顔で言うと、光の粒になり翁は消えた。

霊能たちがビルの中に入ると、男が立っていた。
「お前が鎌足か！？」

『ちがうな、私の名前は悪魔四天王の一人！タナカだ！！』
「じゃあ邪魔だ！」
ベシッ！
霊能が凄い速さではたいた。それと同時に吹っ飛び、壁にめり込むタナカ。
果てしなくかわいそうなやつである。蘇我はそれを見て心の中で合掌をした。
そして二人は一つ上の階に上る。そして次の階。
『私が悪魔四天王の一人！スズキだ！！』
二階にも四天王がいた。
ブーメランパンツのみを着用したスピード重視の悪魔のようだ。
『霊能！こいつは俺に任せて先に行け！』
「ああ！！次の階で待ってるぞ！！」
『すぐに殺してあげますよ！！』
そう言って残像が残るほどの速さで襲ってくるスズキ。
その狙いは蘇我。蘇我にはスズキを一発で倒す力が無い。霊能のようにふざけたパワーをもっているわけでもない。
はたして蘇我は戦えるのか？
だが学校の屋上でケロちゃんを抑えていたのは紛れも無く蘇我だったのだ。
そう、蘇我には蘇我の戦い方がある。凄まじい速さで突進してくる半裸の悪魔。それを間一髪で右に避けつつ、体勢を整える蘇我。
『外しましたかぁ・・まぁいいですよこれで死になさい！！』
そういうとまたもや突進してくるスズキ。だがこれも間一髪で右に避ける蘇我。続いてまたもや突進してくるスズキ。ぎりっぎりで右に避ける蘇我。一発当たれば蘇我はひとたまりも無い。立て続けに避けられてスズキもイライラしてきたようだ。
『避けてばかりで攻撃もできないんですかぁ・・まぁいいです。次は全力で殺しましょう』
そういうと、クラウチングスタートの格好になるスズキ、どうや

ら本気で来るようだ。
『ああ、準備は整った。来いよ、変態』
と、中指を立てる蘇我。
たしかにブーメランパンツ一丁では変態といわれても仕方ないだろう。
だが実力は本物だ。その弾丸のような速さで突進してくるスズキを紙一重で避けつつ・・・足を引っ掛ける！！するとつまづいたスズキは宙に浮き――
『なんで僕が右にしか動かなかったのか分からなかったのか？』

バリーン！！！

――蘇我の後ろにあった窓にダイブした。
グシャ！！
窓ガラスが全身に刺さりながら二階から頭を下にして落ちるスズキ。
むちゃくちゃ痛そうである。事実耐え切れなかったようで、光となり消えていく。
『さて、霊能を追うか』
相手がアホでよかったなぁとか思いつつ階段を上っていく蘇我。
三階についたが、そこには不自然に何かがぶつかったとしか思えない形でめり込んだ壁しかなかった。
『まぁ・・・霊能なら瞬殺だよな・・・』
若干冷や汗を流して言う蘇我。そしてその階をスルーして次の階へ進む。
と、そこではちょうど霊能が敵を壁にめり込ませた所だった。
「お、来たか」
『倒してきたぞ。まぁその間に霊能は二人倒したみたいだが』
「いやでもなかなかやるやつらだったぞ。サトウとカトウは・・・」
なんでここの四天王はやたら日本人っぽい名前なのだろう。

『霊能がてこずったのか??』
「ああ、まさかあそこでメガネを三本取り出すとはな・・・」
『どんな戦いだよ!!』
無事に合流した二人はさらに次の階に進む。

五階。

『我こそが悪魔四天王最後の一人!!ナカムラである!!』
そう高らかに宣言したナカムラに二人は無言で近づいていく・・・
そして・・・
『「四天王五人目じゃねーか!!」』
思いっきり同時に殴った。ナイスコンビネーションである。
そんなこんなでついた最上階、そこに凄まじい威圧感を出している男がいた。
『きたな・・・蘇我・・・・』
『僕は汚くない』
『そういう意味じゃない。来たなだ来たな。相変わらずだな君は・・・』
ちょっとしたやり取りをする二人。どこか懐かしそうに話している。
だが今はそんな話をしている場合ではない。
「鎌足君か?・・・人外を消すってのはどういうことだ?」
『簡単だ。そのまんまの意味さ』
『説明、してくれるんだろうな?鎌足?』
『ああ、この世界にはたくさんの人外がいる。そしてその多くが人に危害を加えているんだよ。そう、今この瞬間もね。君らはどう思う?何もしてないのに突然妖怪に襲われて命を落とす人がいる。幽霊に取り付かれて人生を狂わされた人がいる。悪魔に取り殺される人がいる!僕はそんな被害をなくしたいだけなんだ。そう、妖怪に殺された僕がねぇ!!　!!』

そういうと突然鎌足から黒い靄が出てくる！！
その靄は悪魔のオーラ。鎌足と契約したというアスモデウスのものだろう。悪魔との契約の代償はさまざまだ。そのなかでも鎌足は魂を代償に力を求めた。魂を代償にした力は強い。
だが、売り払った魂は狂う。なんせ文字道理悪魔に魂をささげたのだから・・・
「たしかに人外には人を襲うやつがいる・・・だがなぁ・・だから全員消すって事にはつながらないだろう！！」
『ならばドウスレバイイ！！？殺スしか無イダロウ！！』
「確かに全員殺せば人外の被害はなくなるかもな！！だけどなぁ・・・そんなことしたら大変なことになるだろうが！！」
『何が起キルト言うのダ！！モンダイナイはずダ！！』
霊能が、力をこめて叫び、殴る！！
「俺の・・・俺の友達がいなくなっちまうだろうが！！　！！　！！」
ズドン！！！
そのパンチは鎌足にクリーンヒット・・・したはずだったのだが。
『アマイアマイ！！それじゃア僕は倒せナい！！コロセコロセ！殺セバイイ！全テ殺しテシマエばいい！！』
狂ったように、いや実際に狂っているのだろう。
黒い靄をまきちらしながら鎌足は叫ぶ。
『コノ自己中心！！計画ヲ邪魔スルナラ貴様モコロス！！！』
「わがままで何が悪い！！友達を殺すといわれたんだ！！阻止するしかないだろう！！！」
二人の戦いは激しい。霊能が優勢だが、霊能とここまで戦えるやつは初めてだった。
霊能が腹を殴る。だが鎌足は倒れない。鎌足が霊能を殴る。だが霊能には効いていない。
蘇我が離れたところから見ている。だが戦闘には参加しない。
『霊能！！鎌足を本気でぶちのめしてやってくれ！！』

「了解！！」
『殺ス！！』
蘇我の昔の友人ということでどこか手加減しているところがあったのだろう。
だが蘇我がＯＫをだしたなら手加減は無用だ。霊能は少し距離を取り、腕を振りかぶった。
「この一撃で沈めてやるよ。奥義・・・全力ノ拳（ゼンリョクコブシ）！！　！！！」
ヅグシャァ！！　！！
めり込む拳。
吹っ飛ぶ鎌足。
また別の形で出会ったのなら、鎌足と霊能は友人になれたのだろうか。
おそらく仲良くなれただろう。友達になれただろう。
だが、悪魔に魂を売り狂ったものは、二度と戻らない。
『コロ・・・コロ・・・コロ・・ス・・・』
『鎌足・・・なんで魂まで売っちまったんだよ・・・ちくしょう・・・』
死にかけの鎌足と、昔の親友を殺すしかない蘇我。悪魔との契約を断ち切るには死しかない。
鎌足は既に一度死に、幽霊になった者だ。すなわち、もう一度殺せば強制的に成仏、つまり消えることになる。
『コロ・・・コロ・・・』
もう狂いすぎて理性どころか何も考えれないのだろう。ぶつぶつとつぶやくだけの鎌足の売り払った魂を開放するために、殺す。
「俺がやろうか？」
『いや、こんなんでも元親友だ。僕がやるよ』
そういって胸にナイフを刺し、一連のごたごたは全て終わった――

帰り道、何も話さずに二人は家に向かって歩いていた。
長い長い沈黙をやぶったのは霊能だった。
「・・・俺、正しかったのかなぁ・・・」
確かに人外の中には人を襲うやつもいる。あのまま鎌足が人外殺しをしていれば、それにより助かった命もあったのかもしれない。霊能は鎌足を止めた。それは間接的に霊能が助かるはずの命を摘み取ったことにもなる。
『さぁ・・？僕にも分からんよ。ただ・・・』
「ただ？」
『自分を貫いた結果がそれなら、最後まで自分を貫くべきじゃないのか？』
「・・・そうだな。悩むなんていまさらか、なんてったって止めなければ友達がゴンザレス（スキップが苦手）しかいなくなっちまうもんな」
二人は顔を見合わせて笑う。
『それに・・・人を襲うやつがいるなら、そいつと友達になっちまえばいいじゃないか』
「そうだな！！そうすれば一石二鳥だな！！」
徐々にテンションが上がる二人。
「よっし！！人助けにもなるし、いっちょ人外バスターズでも結成するか！！」
『バスターどころかフレンドだけどな』
「人外フレンズじゃぁなんか語呂が・・・」
『まぁ・・な。まぁ名前なんてどうでもいいだろう。大切なのは行動することなのだよ！！』
「確かにな！では明日から片っ端から人外に困ってる人を探しに行くか！！」
こうして当面の目標がきまった二人はテンションが上がったこと

もあわせて、家に走って帰っていく。滋賀まで来たのだから、そうとう走らないと帰れない気がするが・・・

それもご愛嬌だろう。

第七話　霊能太郎と沼の紳士

『いってきますどすぇー』
バタンッ

『なんか最近さっちんがよく外出するようになったな・・・？』
そうつぶやく彼の名前は蘇我入鹿、自称紳士でさっちんのことが妹的な意味で大好きだ。
あくまでも妹的な意味で。
「まぁ・・・前までみたくずっと家でパソコンやアニメやゲームしながらお菓子食べてる生活よりはずっと健全なんじゃねーの？」
そう返すこっちの彼の名前は霊能太郎、自称人間・・・いや普通に人間のはずだけど・・・本当に人間だよな・・・？とか疑問に思えるレベルの人間である。
ついさっき家を出たさっちんこと山村貞子はビデオの中の井戸に住んでた貞子で、いろいろあって今は霊能の家に住んでいる。井戸の生活からは考えれないようなハイテクな生活と快適空間、それに甘いお菓子などが最高らしい。
見ためは小学校高学年黒髪ロングな女子で、ビデオの中にいただけのこともあり、画面（テレビだろうが映画だろうが）の中に入れる能力を持っている。
さっちんが家をよく出かけるようになったのはこの前霊能たちが人外バスターズを作ってからである。
人外バスターズとは何か？
その目的は人外に対する情報を集め、友達になること。もしくは人を襲ったりしている人外を説得（暴力も辞さない）して止めさせることである。

とりあえず大々的に人外バスターズ情報募集とか言っても頭の痛い人扱いされるのは必須なので、基本は情報係としてさっちんがパソコンでホームページを作ってそこで募集している。
さっちんも情報係に任命されたことで張り切っているようだ。
『人外の情報もなかなか集まらないもんだな・・・』
「赤青さんは人外には詳しくても場所とかは知らない、いわば辞典みたいな人だからなぁ・・」
『それにしてもさっちんはどこに行ってんだろうな』
「案外彼氏が出来ててそこに行ってるとかな（笑）」

『！！！くいえｆｗせｋｇじおｒｇｓ！！！』

「・・・慌てすぎじゃないか？」

第七話　霊能太郎と沼の紳士

『えｆじょいｗｆ！！？いｆひおうぇｆんｗｓきえ！！！』

「落ち着け！日本語で話せ！！あと涙を拭け！！」
『大丈夫だ霊能、僕は落ちついている。いつでもゴミをこの世から塵も残さず排除する準備は出来ている』シュコォォ・・シュコォォ・・・
「呼吸音がシュコォとか言ってるやつに落ち着いてるやつなんていねぇ」
実際、今の蘇我は殺気だらけでいつもとオーラが断然違う。具体的には駅に置いといた自転車のサドルにカイワレが植えられていたときのような怒りを見せている。
『行くぞ霊能、バスターズ初仕事だ。この世界から確実にバスター

してやる』
「・・・俺の友人を作るのが目的なんだが・・・殺すなよ？頼むから」
こうして二人はさっちんの後をこっそりとついていくことにした。
だって堂々とついていったら彼氏が出てこないかもしれないからね！
「でもさっちんがどこに行ったのか分かんないぞ？」
『大丈夫、こっちだ。今の僕は紳士レーダーが使える』
「紳士ってなんなんだろうな。あ、本当にいたし」
さっちんがいた。後ろで隠れながらついていく二人に気づくそぶりをまったく見せずに歩いている。しだいにどんどん人気のないところに入っていく。
『こんな人気の無い道の先に何があるって言うんだ・・・』
「さぁ・・・？」
さらにさっちんは森の中へと入っていく。ここの森は人気が無さ過ぎて自殺志願者くらいしか入らないといわれている森だ。どれくらい人気が無いかというと、この森に一つも秘密基地がないと言えば分かってもらえるだろう。そしてなんかよく分からない沼についた。
さっちんは誰かを探しているようだ。
『・・・沼？』
「沼・・・だな。誰を探してんだろね」
するとさっちんにどこからか現れた少年が声をかける。そして何やらさっちんと話している。

『・・・さて霊能、今日の夕飯はハンバーグでいいよな』シュコォォ・・・シュコォォ・・・
「やめろ、まだミンチにするのは早いから。まだ彼氏と決まったわけじゃないから」
耳をすますと、向こうの二人の会話が聞こえてくる。

『ちょマジで貞子ちゃんカワイイねェwwマジパネェwww』
『はぁ・・・それでどうなんどすかぁ・・・？』
『もうマジでヤバイwww貞子ちゃんの可愛さくらいやべぇんだってマジでww』
どうやらあの少年はチャラ男のようだ。

『離せぇぇぇ！！！僕は世界を救うんだぁぁぁ！！！』
「落ち着けぇぇぇ！！さっちんに覗きがばれるぞ！！！」
隠れながら蘇我を全力で抑えつける霊能。
だがずりずりと前に進む蘇我、紳士パワーは無敵なのか。
「直接チャラ男をボコったらアレがさっちんの彼氏だった場合さっちんに嫌われるぞ！！」
『・・・たしかに。OKならばあの害虫を事故に装って駆除すればいいんだな？』シュコォォ・・シュコォォ・・・
「まぁ・・・そういうことになるな。だがどうするんだ？」
『そうだな・・・』
『わが息子ながら殺したい・・・』
「オイなんか物騒な言葉が向こうから聞こえたんだが」
霊能が言葉の聞こえたほうを見ると、頭に皿をのっけたおじさんがさっちんたちを見て呪っている。おじさんもこちらに気がついたようだ。
蘇我がおじさんに近づいていく。
おじさんも蘇我に近づいていく。
そして何も言わず・・・二人はがっちりと握手をした。
「いや何が起きたんだよ！」
そして二人同時に霊能のほうに振り向き、とてもいい笑顔で言った。

『『ちょっくら殺ってくる』』

「さっそく息を合わせてんじゃねぇ！！・・・ところであんたは誰

なんだ？」
『私か？・・・とても残念だがあそこであの可愛い子にちょっかいを出している馬鹿の親父だ』
『そうか・・・あなたほどのジェントルからあんなゴミが生まれるなんて・・・奇跡ですね』
『私ごときがジェントルだなんて・・・あなたにはかないませんよ』
『『ＨＡＨＡＨＡ～』』
「こいつらうぜぇ」
『ところでジェントルの名前をお聞きしても？』
『僕は蘇我入鹿です。でこっちが霊能。あそこのとても可愛い子がさっちんです』
『ふむ、あの子はさっちん君というのか・・・失礼、私は川流佐悟（かわながれさご）と申します。あっちの馬鹿は悟丈（ごじょう）といいます。どうぞよろしく』
「よろしく。ところで沙悟さんは頭の皿っぽいのからしてカッパなのか？」
『そのとおりだ。ＮＡＳＡには秘密にしといてくれると助かる』
『別に言いませんよ。僕だって幽霊ですし』
『ふむ・・・驚いたな。まさか幽霊と知り合いになれるとは』
『知り合い？違いますよ。僕たちはそう・・・紳士同盟を組んだ兄弟じゃないですか』
『・・・！そうだな。すまない、兄弟よ。私が間違っていたようだ』
『謝る事はありませんよｍｙブラザー』
『君も敬語なんて必要ないさｍｙブラザー』
『『ＨＡＨＡＨＡ～』』
「こいつらマジでうぜぇ」
『ふむところで君たちは人外バスターズというのを聞いたことがあるかな？』
「へ？」
『いや最近聞いたんだがね、彼らに依頼があるのだよ』

「人外バスターズっての『ちょっとどこ触ってるんどすかぁ！！』は俺ら・・・・」
『『コロス』』

彼らの豹変は早かった。
ついさっきまでなごやかに談笑していたとは思えないレベルの切り替えに霊能も冷や汗をかいた。この豹変っぷりたるやマザーテレサも裸足で逃げるレベルである。
『ごめん霊能・・・ハンバーグ作れそうにないや。跡形も残さないから』シュコォォ・・シュコォォ・・・
「いや、いいです。別にいいです」
『すまない霊能君・・・息子(ゴミ)が迷惑をかけた。死をもって償わせるから許してくれ』シュコォォ・・シュコォォ・・・
「大丈夫です気にしてないんで殺気を漏らさないでください本当に」

『『レッツパァァリィィィィイイ！！！！！！』』

その瞬間霊能は彼らを見失った。気づいたときには視界にはさっちんしかいなかった。
ただ、何かが何かを潰す音と、『スイマセンッ！マジでスイマセン！！』という声だけが森に響いていた。

「おーいさっちーん」
『あ、霊能はん。こんな所でどうしたんどすか？』
「いや・・・あ、さっちんはこんなところでどうしたの？」
『それがなぁ、ここの沼に怪物が住みついたから退治して欲しいって話があってな、聞き込みしてたんどす』
「聞き込みかぁ・・・そっかぁ・・・」
『で、聞き込みしてたカッパはんがとにかく絡んできてなぁ・・・

それで腰を触られたかと思ったら消えてしまったんどす・・・』
「・・・大丈夫、そのカッパは今頃星になってるから」
『はぁ・・・そういえば蘇我はんは？』
「・・・今頃星を作ってるんじゃないかな・・・」
それにしても怪物ねぇ・・・佐悟さんたちのことじゃないだろうな・・・
とか思いつつ沼を覗く霊能。すると全長三メートルはありそうな蛙がざぱぁと沼から顔をだした！その蛙は突然舌をものすごい速さでさっちんにむかって突き刺した！！
「なっ！！」
霊能が間に合わない、まずい！！と思い、さっちんが驚いて目をつぶるが、何時までたってもさっちんに予想していた衝撃は来ない。
おそるおそるさっちんが目を開けると・・・

―――オイ　クソガエル　キサマ　ダレヲネラッタ？――――

・・・修羅がいた。もとい、蛙の舌を握りつぶした蘇我がいた。
その後は酷かった。おそらくこの沼に住みついた怪物だろうと思われる蛙は、沼から一瞬で引きづり出され、
『さっちん、ちょっと俺この蛙とオハナシがあるから』
と言って蘇我が森の奥深くに連れていった。
その後、その蛙を見たものは誰もいないという・・・ちなみにその時の蘇我を見た霊能は後日こう語る―――
「・・・あれは何かと思いましたね。まさかこの俺が殺気に飲まれて動けなくなるとは思いませんでした」

そしてそれから数分後・・・

ぼろ雑巾のような何か、いやかすかに息をしているようだ・・・を持った佐悟さんと、返り血のような汁を体中につけている蘇我が沼に帰ってきた。
『いやぁ蘇我君たちが人外バスターズだったとは驚いたなぁ』
「ははは・・・依頼ってのは蛙のことでしたか？」
『ああ、あの蛙がある日あの沼に住み着いて無差別に生き物を食い漁るもんだから困り果ててな・・・』
『とにかく解決してよかった！これで佐悟さんは安心してこの沼に住めますね』
『そうだな、礼を言うよ。ありがとう君たち』
「今回俺何もしてない気がするけどね」

そして帰り道・・・

『いやぁ・・・さっちんが聞き込みとはなぁ・・・一言言ってくれたらよかったのに』
『すいまへん・・・バスターズの情報係に任命されてうれしかったんどすぇ・・・』
「はぁ・・さっちんが張り切るのはいいことだしいいじゃねぇか、何とかなったんだし。佐悟さんとも知り合えたし」
いろいろあったが、バスターズの初仕事は終わった。
困ってる佐悟さんも助けられたし、何も活躍は出来なかったがなんだかんだで初仕事に満足している霊能なのであった。

第八話　霊能太郎と鍋パーティー

「鍋パーティーをするぞ！！」

自宅でそう唐突に言い放った彼の名前は霊能太郎、カップ焼きそばは焼きそばじゃない、湯でそばだといって譲らない男だ。

『乗った！！』

即座に鍋パーティーに賛成した彼の名前は蘇我入鹿、カップ焼きそばについては正直どうでもいいと考えている。

『はぁ・・・鍋どすかぁ・・・』

霊能の言葉にビクッとしつつも鍋を否定しない彼女の名前は山村貞子、通称さっちんだ。

カップ焼きそばって凄い技術だなと純粋にそう思っている。

『で、なんで鍋なんだ？』

蘇我がふと疑問に思い聞く。

「簡単だ。・・・そこに鍋があるからだ」

『・・・うちの鍋、棚にしまったままなんどすけどなぁ・・』

第八話　霊能太郎と鍋パーティー

『霊能、当然キムチ鍋だよな？』
『私はコンソメ系鳥団子鍋がいいどすぇー』
「俺は味噌煮込みにしようかと思っていたんだけど・・・」
にらみ合う三者。全員が全員、自分の意見をいかにして通すかを全力で考えている。
『おっと！こんな所にキムチ鍋の元が！！これはキムチ鍋をするしかないなぁ～』
と、どこからかキムチ鍋の元を取り出す蘇我。マジでどこに持ってたんだろうか。
「おっと！！手が・・・盛大に滑ったぁぁぁ！！！」
キムチ鍋の元をつかんで窓からぶん投げる霊能。キムチ鍋と味噌煮込みは相容れない関係だ。
霊能も自分の意見を通すのに必死なのだ。
「飛んでいってしまったものは仕方ない。ここは冷蔵庫に残っていたはずの味噌を使うしかないな」
『あ、それなら今日味噌漬けを作るのに全部使いましたどすぇ』
「なにぃ！！」
驚きつつさっちんを見ると、うっすらと笑っている。さっちんだって攻めるときは攻めるのだ。
『でもコンソメの元は残ってるはずなので今日はコンソメ系鳥団子鍋で決定どすなぁ』
勝ち誇った顔のさっちん。するとどこからか蘇我がコンソメの元を持ってきて・・
『水が無いと飲みにくいな・・・』
ザーーーっと粉状のコンソメの元を飲みきる蘇我。さっちんは唖然としている。
「・・・全員引く気はないのか？」
『当然』
『もちろんどすぇ』
「・・・よろしい、ならば全員が平等の鍋を考えたぞ・・・」

『ま、まさか・・・』
「そう、闇鍋だ！！！！！」
『なん・・・だと・・・・・』
　そのとき、霊能家のチャイムがなった。この家に客がくるなんてかなり珍しいことである。
　コリン星の存在を信じている人並に珍しい。

　ピーンポーン

「霊能さーん！ツキミですっけどー」
「ん？ツキミか、今開けるからチョイ待てー」ガチャ
「どーもー。ゴン兄からのおすそ分け持って来ましったよー」
『霊能、その子はどちら様？』
「！！？幽霊ですかっ！！？」
『しかも僕のこと見えてるみたいだし・・・今は実体化してないんだけどなぁ・・・』
「ええぇと・・・お互い説明するからとりあえず部屋に行くぞー」
　ツキミを部屋に連れて行く霊能。そして霊能の後をついていくツキミ。
「ツキミ、この幽霊が蘇我で、俺の友達だ」
『よろしくっ！！』
「んでこっちの子がさっちんだ」
『貞子どすぇーよろしくどすぅー』
「で今度は・・・この子はツキミって言って、俺の友達のゴンザレス（カップ焼きそばを食べたことがない）の妹だ。」
「よろしくおねがいしまっす♪」
　このツキミという女の子、見た目はやたら元気そうなショートカットの女子だ。
　歳は霊能の一つ下。兄との仲は良好。言っておくが見た目は普通の日本人女子高生だ。

兄とはまったく似ていない。
『なんでツキミちゃんは僕が見えるんだ？』
「むむ！こう見えてもあたしは陰陽師なんですよ？それっくらい余裕のよしずみさんです！」
「そこはよっちゃんにしとこうぜ」
『ほぇぇ・・・陰陽師どすかーかっこいいどすなぁー』
「ありがとっ！あ、でこれゴン兄から霊能さんにって」
「おう、ありがとうって伝えといてくれ。・・・そうだ！ツキミも闇鍋に参加決定な」
「闇鍋ですか！？ＯＫ参加してやろうじゃないっですか！！」
「そんじゃ食材持って夜にまた来てくれ」
「了解っです！」
『さて霊能、俺も食材調達してくる』
『私もどすぇー』
そうしてとりあえずみんな闇鍋の食材を買いに行った。
果たしてまともな食材はあるのだろうか。とまぁそんなこんなで時間はたって・・・

闇鍋パーティー開催の時間になった・・・
「と言うわけで闇鍋だ。諸君、集まってくれてありがとう」
今この場にいるのは霊能、蘇我、さっちん、ツキミ、そして口裂け女のくっちーだ。
余談だがくっちーは霊能に誘われたときそうとう喜んでいたと言う。
『ルールは・・・真っ暗にして一人ずつ順番に食材を取る・・そして取ったものは絶対に食べなくてはならない・・・だよな？』
と蘇我が言うと、
『ちょっと待って、一斉に取るんじゃないの？』
とくっちーから質問が飛ぶ。気軽に質問できるくらいにはもうく

っちーはみんなと仲良くなれたようだ。
「こんかいは順番ルールを採用した。文句は無しだ」
『順番はどうするんどすぇ？』
「座ってるところから時計回りでいいんじゃないっですか？」
『じゃあ一番を誰にするかはじゃんけんだな』
そしてじゃんけんを始める一同。
結果、くっちー、蘇我、さっちん、ツキミ、霊能という順番になった。
そして禁断の闇鍋が始まる―――

一番手、くっちー。

・・・さてどうしましょう。出来れば霊能君が入れた食材を食べたい！私が霊能君の食材を食べて・・・
「あ、それ俺のだ」
『とてもおいしいわ。最高の味よ！』
「そう言われると嬉しいな」
そして私に微笑む霊能君！！そう！闇鍋から始まる二人のラブストーリー！
ふふふ・・・完璧だわ。完璧な作戦よ！・・・問題はどこに霊能君の食材があるかね・・・普通だったら霊能君の前・・・でもこれは闇鍋・・・分からないわ・・・いや、意外と私の前にあったりして？・・・
ええぇ！真ん中でどう！？
『ここよ！！』

そして出てきたのは・・・なにやら白い塊！
「あ、それ俺のだ」

やった!?奇跡が起きたわ!!さぁあとはこれを食べておいしいと絶賛するだけ・・・!!

『・・・霊能、これ何だ?』

「あたしも気になりまっす・・・」

「大福だ」

大福ぅ!!?鍋に大福ぅ!!?霊能君流石にそれはきついんじゃない!!?

でも・・・これを食べて霊能君の微笑みを見るのよ!頑張れ私!!女は度胸!!なんでもやってみるものよ!!ぱくっ!!

「ちなみに中身は味噌だ」

『ぶふぅぅぅ!!!・・・おいし・・おい・・・駄目だやっぱ不味いわよ!!!』

『開始早々に怖くなってきましたどすぅ・・・』

二番手、蘇我

僕の番か・・・初っ端からキツイのを見せられたな・・・

だが!くっちーが犠牲になったことにより霊能の食材に当たる確立は減った!!あとは何が何でも自分の食材に当たらなければ完璧・・・!ツキミは何を入れているか読めないが・・・くっちーとさっちんは間違いなく安全パイ!!そしてさっちんは深く考えずに自分の目の前に食材を入れたに違いない!!

つまり・・・さっちんの前から取れば安全だ!!

『ここだ!!』

そして蘇我が掴みあげたのは・・・卑猥な形のキノコ。

『なんでじゃぁぁぁぁぁ!!!!』

もう見た目は完璧にアレ。

ふざけてんのかってくらいにアレ。本当にキノコかこれ？
「・・・誰が入れたんだこれ」
霊能が静まりきった部屋でそっとつぶやく。
『・・・僕だよ』
ぼそりと蘇我が言う。そして蘇我はだんだん自棄になっていき・・・
『畜生僕だよこれを入れたのは！！！違うんだ！！別に卑猥な気持ちはなかったんだ！！ただ・・たださっちんがこれを食べるところを見たかっただけなんだ！！霊能！お前なら分かってくれるよな？これは男の本能だ！！仕方のないことなんだ！！みんな！落ち着いて考えてみろ・・・これを食べるさっちん・・・めっちゃかわいいじゃねぇか！！僕は紳士的に・・・あくまで紳士的にこれをさっちんに食べさせたかっただけなんだぁぁぁぁ！！！！！』

「最低だな」

「最低っです」

『最低だわ』

『・・・死ね』

『ぶへぇあ！！』バタン！！

全員に最低と言われ、さっちんに心の底から軽蔑した目で見られて・・・蘇我は吐血しながらぶっ倒れた。ちなみに闇鍋開始直後に鍋の配置を変えるため、さりげなく霊能が鍋をかき回していたことに蘇我は気づいていなかった・・・
そんな蘇我をスルーしてまだまだ闇鍋は次の回まで続く――――

第九話　霊能太郎と闇鍋祭り

前回のあらすじ！

暗黒超大魔王を倒すためにたちあがった男、佐悟は自慢の高級麻雀パイをたくみに駆使して奇跡のタイミングを狙いつつ長座体前屈をやってのけた！！

だがしかしそれをけして認めないと断言するレフェリーの赤青さんが右斜め上から現れる！！そんな赤青さんと佐悟さんは突然出てきた回転寿司のレーンに戸惑うしかないのであった！！

まぁ嘘だが。

そんな訳で闇鍋がまだまだ続いている・・・

第九話　霊能太郎と闇鍋祭り

三番手、さっちん

どうするどすぇー。別に深く考えなくても適当で大丈夫そうどす

なぁ・・・まぁとりあえず取るどすぇ・・・
そしてさっちんが掴んだものは・・・・

・・・・・・卑猥な形のキノコ！！！！

『ふはははは！！！誰が一つしか入れてないと言ったぁ！！この僕をなめてはいけないよ！！！さぁ食べるんださっちん！！おいしそうにほおばる姿を見せておくれ！』
「馬鹿が復活したっです・・・」
『さだこちゃん？嫌なら別に食べなくてもいいのよ？』
『なにを言っているのだくっちー！！闇鍋だぞ？食べないといけないに決まってるだろうがぁぁ！ヒィィィヤッハァァァ！！！』
蘇我のテンションは限界突破している。
それに対し、肝心のさっちんは何もしゃべっていない・・・
『ほらほらどうしたんださっちん！！早く食べ』

ベキッ！！メキャメキャァ！！グチャ。

なにかが粉砕するような音が部屋に響く。
『あ、これ味は悪くないどすなぁ』
そこにはキノコを砕いて潰してから食べるさっちんの姿が！！
『「・・・・」』
男二人は痛そうな顔をして一箇所を抑えている。こうして蘇我の陰謀はもろくも崩れ去った・・・。

四番手、ツキミ

あたしの番っですか・・・いままででまだまともな食材が出てきてないっですねぇ・・・ふざけすぎでしょうみなさん・・・この流れだとあたしも変なのがきそうっですねぇ・・・
でもおびえていても始まりませんし、やるしかないっですね！
ここっです！！
ツキミのつかんだ端の先にあるものは・・・

・・・油揚げ！！

「普通っですねぇ」
だが気をつけなくてはいけない。なぜなら闇鍋を囲むメンバーがメンバーだから。もしかしたら普通の油揚げに見せかけた別の何か・・・の可能性も捨てきれない！！
「・・・別に何かがはさんであるってわけでもないっですねぇ・・・」
そう、なにも見た目はおかしくないのだ。これが逆におかしい。なぜなら普通の食材がこの闇鍋に入ってる気がしないから！！
さて・・・この油揚げはいったいどこに罠が仕掛けてあるのか・・・
『警戒しすぎじゃないどすか？』
「いや、警戒はしてもしすぎることは無いっですよさっちんさん」
・・・確かにさっちんさんの言う通りかもしれない。これはただの、本当に何の変哲も無い油揚げである可能性も否めないっです。
でも・・・
「ところでそれは誰が入れたやつなんだ？」
『あ、それ私のよ。コンビニのバイトでなんかいろいろあってもらったので今回いれたのよ」
「てことはなんだ、本当に普通の油揚げなんっですね！？よかった・・・これで安心してたべれます・・・」
そういって油揚げを口に含むツキミ。

だが一秒もしないうちにそれを吐き出す。
「ブフゥ！！不味いっです！！不味すぎっです！！！！」
そりゃそうだ。
味噌汁に入っている油揚げを思い出して欲しい。凄く味噌汁を吸っているだろう？
そう、油揚げは汁を吸う。その事により、なんの変哲も無い油揚げは・・・この闇鍋汁によって進化を遂げていたのだ！！！当然ながらさまざまなものが入っているこの鍋の汁がおいしいわけがない。そんな汁を一気に口に含んだも同然なのである。それは不味いわ。
「当たりだと思ったのに・・・うぇ、本気で不味いっです・・・」
『まぁ・・・ドンマイよ、頑張るのよツキミちゃん』
「いや・・・くっちーさんの食材なんですけど・・・」
『・・文句はコンビニの店長に言ってね』
「・・・釈然としないっです・・・」

最後、霊能の番

さてついに俺の番が来たか・・・今のところまだ当たりが出てないな・・・
・・・・当たりが無い可能性もあるけど・・・
いやでもさっちんは多分まともな食材を入れてると思うんだ。
鳥団子とか。そう！俺は鳥団子を狙うぜ！！そうと決まればどこを狙うかだが・・・俺が鍋をかき回してしまったからなぁ・・・さっちんの前にはおそらく無いと考えてもいいだろう・・・。
ではいったいどこにあるのか？それはおそらく・・・俺の前にあるだろう！！多分！！
完全に勘だがなんかあるような気がする。すくなくともはずれではない様な・・・そんな気がする！！！
よし！俺の前を取るぜ！！

そういってつかんだ霊能の箸には・・・真ん中に穴が開いた、細長い魚介類の練り物があった！！はやい話がちくわである。

「・・・ちく・・わ・・・？」

そうちくわである。とあるゴから始まってスで終わる名前の人の大好物である。

「まぁ・・・当たりだな！いやぁよかった俺はセーフだ」

実際これには霊能もかなり安心していた。だってちくわだもの。余裕さ！！

『ちくわかぁ・・誰が入れたんだ？』

「あ、それあたしが入れたやつっです。良かった・・・霊能さんが取ってくれて・・・」

『よかったってどういうことなのツキミちゃん？かなり詳しく教えてくれるかしら・・？』

くっちーがほほをひくひくさせている！！

「そのちくわゴン兄から渡された特別製っでしてね、もし霊能さん以外の人が食べそうになったら全力で止めろっていわれてたんっですよ～」

『・・・一番の危険パイかもしれんね』

ツキミの一言に汗をだばだばかきだす霊能。

さっきまでの安心を返せと叫びたい気持ちでいっぱいだ！！

「・・・他には何て言ってたか覚えてるか？」

「えぇと・・・［多分太郎なら多分耐え切る、多分・・多分。］って言ってたっです」

「いやいやいやいやぁぁぁぁぁ！！！ちょい待ってめっちゃ食いたくねぇぇぇぇ！！！不安！！超不安！！つーか耐え切るって何！！？あと多分言いすぎぃぃぃぃぃぃ！！！！」

『大丈夫だ霊能、お前なら多分大丈夫だ』

『多分霊能はんなら耐え切れるから安心していいどすぇ』

『不安だけど・・・霊能君なら多分大丈夫なんじゃない多分』
「てめぇら楽しんでるだろ！！？俺のピンチ楽しんでるよね！！？ちくしょう誰かヘルプミィィィィ！！！」
だが闇鍋のルールは残酷だ。闇鍋発案者として破るわけにはいかない。
「霊能さんなら大丈夫っですよ多分！！」
「ちくしょうあああもうおんどりゃぁぁぁ！！」
半分パニックになりながら食べる霊能。ちくわをぱくっと一口で口の中に放り込んだ。
するとみるみるうちに霊能の肌の色が虹色になっていき、目は残像が残る速さで動いている。
「イヒィィン！！」バタンッ！！！
ぶっ倒れた。
「『『『霊能（君、さん、はん）ーーー！！！』』』」
『くっ・・・耐え切れなかったか・・・』
『いやいやそんなこと言ってる場合じゃないわよ！？』
『・・・死んではりますなぁ・・・』
「ウソォォ！！？もしかしてあたし殺人犯っですか！？事故でしょう！！？あたし捕まりませんよね！！？」
『毒殺の疑いで逮捕だな』
『ツキミはん・・・短い間だったけど楽しかったどすぇ』
『あなたたち今ふざけてる場合じゃないでしょぉぉぉぉ！！！』

霊能が死んだ。
死因、ちくわ
享年１７歳であった。

『ってかマジで死んでるなぁ・・・』
『霊能はんなら自力で生き返りそうではありそうどすけどなぁ』
「あ、体の色が戻った・・・でも生き返りそうにはないっですねぇ・

・・」
『なんであなたたちはそんなに冷静なのよ！！霊能君死んじゃったのよ！！？』
『だって俺も一度死んだことあるし・・・』
『身近に幽霊がいるどすからなぁ』
『あぁ・・・そっか、蘇我君幽霊だっけ？ってことは霊能君も人外の仲間入りってこと？喜んでいいのか複雑だわぁ・・・』
「蘇我さん、霊能さんが幽霊になるのにどれくらいかかるんっですか？」
『さぁ・・・？人によってまちまちらしいから分からん。下手したら１００年とかかかるかもな』
『はぁ！！？１００年！！？そんなの待ってられないわよ！！！』
『・・・僕だって待つ気は無いよ。死人が行くのは天国か地獄、あいつは面白そうとか言って地獄に行くんじゃないか？だったら僕らも地獄に行ってあいつを連れ戻せばいい』
『そんなこと言ったって・・どうやってそこまで行くのよ！？』
もっともな反論である。地獄なんて普通の人間にはそう気軽に行ける場所ではない。
・・・だが、普通の人間なんてここにはいないのである。
『僕は幽霊だから三途の川の向こう側くらい簡単に行けるよ。まぁ帰りは・・・どうなるか分かんないけど』
「蘇我さん一人で行く気っですか！？危険すぎっですよ！！」
『先に一人で行く気ではあるけど・・・みんなも後から来れるだろ？な、さっちん』
『我が家には頼もしい愛犬がいてはるどすからなぁ。ケロちゃんなら行けると思うどすぇ』
こうして地獄に行くだろうと思われる霊能を救うべく、彼らは動き出した。果たしてこれからどうなるのか。霊能は現世に生き返ってくることができるのか？ちなみに霊能が食べたちくわはゴンザレスの手作り罰ゲーム用ちくわだそうだ。

ただ作るときに塩加減を間違えたと言ってたとか言って無かったとか・・・

第十話　霊能太郎と地獄の入り口

「川だ・・・」

今現在、霊能は川にいる。正確には川岸というべきか。
霊能の周りでは子供たちが石を積んでいる・・・。

「どこだ・・・ここ・・・？」

思い出せばさっきまで自宅で闇鍋をしていたはずなのだ。
それがなぜか今では川岸にいるのである。

・・・最後の記憶はちくわを食べたこと・・・

あああれが原因か・・・と霊能は納得する。
ようするにここは三途の川と呼ばれる場所で・・・自分は・・・
死んだのだ。

第十話　霊能太郎と地獄の入り口

「うっはー死んじゃったかー俺。死後の世界って本当にあったんだなー」
気楽なもんである。
だが慌てていてもどうしようもないのも事実だ。川を渡るための船も見る限り今はいないようだし・・・

『ひとつつんでは父のため・・・ふたつつんでは・・・』

近くにいた子供の石の山作りを手伝うことにした。

『霊能どこいったかな・・・』

一方こちらは霊能を追って三途の川に来た幽霊、蘇我入鹿である。蘇我は幽霊なので一方通行ではあるが黄泉の国へは行くことができる。まぁどうにかして霊能をつれて帰る気満々であるが・・・

『まだ川にいるとは思うんだけどなぁ・・・』

と、そのとき少し離れたところから声が聞こえてきた。

『凄ぇー兄ちゃんすげぇー!!』

『わーっすっごーい!!』

「ふははは!!俺にかかればこんなもんじゃーい!!」

・・・そこには石でサクラダファミリアを再現している霊能がいた・・・。

『凄いってレベルじゃねぇよ!!!』

「お、蘇我じゃん。お前も死んだのか?」

『俺はもともと死んでるけどな』

ひとまず合流した二人、だが二人が話しているときに事件は起こった。

ガシャン!

霊能たちの近くで起きた音。それは紛れも無くサクラダファミリアが崩れた・・いや崩された音だった。

『すまんな、ワシも仕事なんじゃ、悪く思わんでくれ』
鬼がいた。
体格のいい鬼が子供たちの積んだ石をかたっぱしから崩していた。
当然霊能のサクラダ以下略を崩したのもこの鬼だ。
「OKおっさん、芸術ってのを拳で教えてやる」
霊能はせっかくの作品を壊されたことに怒ったようだ。
『いや落ち着け霊能、おっさんの言うとおりだ。ここで石を積んだお前が悪い』
「なんでだ？」
『ここで石を積むのは生前の罰らしいぞ。鬼が壊すから永遠に完成しない石の塔を作り続ける・・・霊能が邪魔したら罰にならん。最悪もっとキツイ罰に変わるかもしれない』
「・・・どうしようもないのか？」
『ああ・・・どうしようもない。その鬼のおっさんも仕事だ。ホレ、さっさと帰るぞ』
「どうやって帰るんだ？帰り道俺知らないんだけど・・・」
『そうだな・・・どうしよう』
「知らないのかよ・・・あ、鬼のおっさん、帰り道知らない？」
『ワシか？普通は帰れんと思うが・・・なんだ？そんなに生き返りたいのか？』
「ああ、未練バリバリだ」
『僕もまだまだ楽しみたりないね』
『そうか・・・ならば閻魔様にでも聞いてみるといいじゃろう』
「おっさんいい人・・・いや、鬼だな。ありがと！おっさんの名前を教えてくれるか？」
『ワシの名は・・・帝鬼（ていき）と言う。まぁもう会うことも無いじゃろうが・・・元気でな』
「ああ、おっさん！俺は霊能だ！じゃ俺たちは行くよ、また会おうな！」
『次に会うときは本当に死んだときになるけどな。僕は蘇我だよ。

では閻魔様のところに行ってきます』
　こうして鬼の帝鬼と別れた霊能たちだが閻魔のところに行くには川を渡らねばならない。
　なのでしばらく船着場で待っていると小船がこちらに近づいてきた。
『すいませーん、乗せてくださーい』
『はいよ、六文ね』
「げっ・・・」
『なんだい文無しかい？そんなやつらは乗せれないねぇ』
　当然二人とも六文銭など持っていない。そして泣く泣く船に乗ることを諦めた・・・。
『どうする・・・泳ぐか？』
「服濡れるしな・・・そうだ、蘇我、背中に乗れ」
　そうしておんぶのかっこうになる霊能、何がしたいのかは分からない。
『よっと・・・それで、どうするんだ？泳がないんだろ？』
「泳いだら服が濡れるからな・・・走る」
『は？』

　ズダダダダ！！！

　こうして蘇我をおんぶした霊能は川を走った。
　無論、水面を・・である。
『えええぇぇ！！！つくづくぶっとんでるなオイ！！』
「到着！」
『・・・霊能といると退屈しないよ』
「それはほめ言葉だな」
　なんだかんだで川の向こう側についた二人、とりあえず閻魔を探さなくてはならない。
　閻魔といえば死者の捌きをしていることで有名である。そして二

人の前には先が見えないような死者の列がある。
「まさか・・これ全部裁き待ちか！！？」
『・・・多分な』
『・・・おそらくそうでござろう』
流石にこんなのを並んでいる暇は無い。
だが列に横入りしたら流石に話を聞いてくれないだろう。
閻魔といえば裁き以外にも地獄の管理をしていることでも有名だ。つまり流石に四六時中捌きをしてるわけでもあるまい。地獄に監視に行っていたりしているときに見つけて話を聞くほうが並ぶより楽だ。
「並んでもいられないし・・・地獄に行ってみようぜ、そこで閻魔さん探そう」
『そうだな、さっちんたちも地獄に行くって言ってたし』
『地獄でござるかぁ・・どんな所なのでござろうか・・・』

霊能と蘇我に沈黙が走る――――

『霊能、少し気になることがあるんだが・・・』
「奇遇だな、俺もだ」
『気になること？なんでござるか？』
「『誰だお前はぁぁぁ！！』」
そう、さっきから当たり前のように会話に参加しているやつがいるのである。さりげなく同行しようとしている男。あまりのさりげなさに霊能たちもノリツッコミをしてしまうほどである。
『拙者でござるか？やだなぁ冗談は止めて欲しいでござるよ。まるで拙者のことを知らないみたいに言うのは心が痛むでござる』
「いや誰だよ」
『事実知らないよ』
『酷いでござる・・・同じ釜の飯を食べた友であるのに・・・』
「『食った覚え無ぇよ』」

『まぁ冗談でござる。拙者はぬらりひょんの小次郎というものでござる。あ、同じ飯を食べたのは本当でござるよ？』
霊能たちの前にいるこの男、見た目は青い着物を着て、帯刀している。
ぶっちゃけ［拙者武士でござる］を地で言っている。まぁちょんまげではないが。
だがぬらりひょんだというのに頭は長くない。ぶっちゃけ武士の格好でなければ一般人と見分けがつかないくらいだ。
歳は霊能たちよりも年上・・・２２歳くらいのように見える。ちなみに余談だがくっちーも見た目は２２歳くらいである。オイコラそこ、嘘じゃないぞ、マジだ。

「小次郎か・・・俺は霊能だ。よし友達になってくれ」
『ぶれないなお前！！まぁいいや。僕は蘇我、同じ飯ってのはさすがぬらりひょんとしか言えないね。よろしく小次郎』
『ああよろしくでござる。拙者はぬらりひょんであるがゆえにどこにでも現れる存在、時間も持て余しているし闇魔に会う旅に同行させてもらうでござる』
こうして思わぬ形で友達が増えた霊能。
これだけでも地獄にきた意味があるというものである。
「時に、ぬらりひょんの能力ってどんなもんなんだ？」
『そうでござるな・・・認識をずらす・・・それが一番の能力でござるよ』
『それってどのくらいなもんなの？』
『実演したほうが分かりやすいでござるな、霊能殿、拙者に対して小石を投げてもらえるでござるか？』
そういって霊能たちから少し離れる小次郎。そして振りかぶって小次郎の胴体狙いで石を投げる霊能。だが小次郎には当たらず、石は勢いを衰えずに飛んでいく。
「おお！！すり抜けた！！！」

『すり抜けたように見えるなら成功でござるよ。本当は石より少し右に体があっただけでござる』

ズドンッ！！！ガラガラガラッ！！！！

霊能の直線上にある遠くのとても大きな岩が崩壊した。

『・・・流石にアレが当たってたら拙者トマトになってたでござるよ・・・』

冷や汗だらけの小次郎、本当に危ないところだった。

『霊能殿や蘇我殿はなにか特別な能力をお持ちで？』

「俺は腹筋を鍛えてるだけの一般人だぞ？」

『嘘だな、霊能が一般人ってのは認めん。さっきの投げた石が証拠だ』

「なにをいう、蘇我だって腹筋を鍛えればあれくらい・・・」

『出来てたまるか、・・・そうだな、僕は長いこと幽霊やってるし、ポルターガイストくらいなら出来るよ』

「マジで！！？知らんかったんだけど！！！」

『普段やらないしね、ホラ』

そういうと足元の小石が浮いた。

『どのくらいのことが出来るんでござるか？』

『僕の腕力分くらいの物しか持ち上がらないよ、持ち上げたまま維持するのも大変だしね』

「へぇ～・・・腹筋鍛えたら俺にもできるかな」

『お願い、止めて。僕の数少ない見せ場を取らないで』

実際に霊能なら出来てしまいそうだから蘇我もマジになって懇願する。せっかくのアピールポイントをそう簡単に潰されてはかなわない。まぁ霊能には霊力だとか魔力だとか言われるものがまったく無いから絶対に出来ないはずなのだが。・・・出来ないよね？

少なくとも霊能は直接触らない限り力ずくってのも無理である。逆に直接触れるものならなんでも出来そうだが・・・ちなみにゴン

ザレス（盆踊りが得意）なら出来る。
　そんな話をしつつ地獄にいくために列の先頭を目指して歩く一同。そして思ったより早くに先頭についたが閻魔はいない。代わりに閻魔代理と書いた札を立てている鬼が裁きをしているようだ。
「そこの閻魔代理ー、俺らこっちの扉から地獄行ってくるわー」
『なぬ！それはどういうことだ！！』
「いやぁ閻魔さん探してるんだけどここに居ないみたいだから地獄探そうと思って」
『そういうことか・・・閻魔様なら今地獄の奥にある家、［閻魔亭］で休んでおられるだろう。・・・あのサボり魔が・・・』
　ずいぶん物分りのいい鬼である。
　イライラしているようだしストレスで正常な判断が出来ていないのだろうか。なにか最後につぶやいたようだが、ひとまず霊能たちの目的地は決まった。
　地獄の奥にある閻魔亭、そこを当面の目的地にする。そこで閻魔に現世へ帰れる方法を聞くことにしよう。
「じゃ，行ってくるー」
『ああ、ついでに閻魔様に仕事するように言ってくれー。・・・あと適当にボコしてくれ』
　また何かつぶやいたようだが霊能たちには聞こえていない。はたして霊能たちはこれから地獄で何を経験するのか、閻魔に会うことは出来るのか。
　新たな仲間、小次郎とともに地獄への道を進む一同であった。

第十一話　霊能太郎と地獄巡り

「・・・ごめん蘇我、俺地獄舐めてたわ」
『・・・僕もだよ。早く逃げよう。吐きそうだ』
『拙者・・・お先に離脱するでござるよ！！』
「小次郎が逃げやがった！！」
『待って小次郎！！僕も連れてってぇぇぇぇ！！！！！』

まずは、地獄と言う場所の説明をさせていただいこう。
地獄は広い。その広い地獄は場所ごとにゾーンが決められている。
具体的には針山地獄ゾーンとか血の池地獄ゾーンとか。
そして今彼らがいるゾーンは・・・
濃厚な薔薇が咲き誇る。
一部の男たちにはむしろ天国とさえ呼ばれる場所・・・

――――男色地獄ゾーンである。

第十一話　霊能太郎と地獄巡り

「し・・死ぬかと思った・・・」
『ああ、・・・アレを見続けるなら死んだほうがましだ・・・』
『いや地獄にいる時点で拙者たちみんな死んでるでござるよ・・・』
全力で走って男色地獄を抜けてきた三人、とりあえずは情報収集できる場所を探しているのだが・・・さすがにホモたちに話を聞く勇気は無かった。

だが、逃げている途中で［居酒屋、この先右折］の看板を見つけたのでそっちに走ってきたのである。
そんな彼らは、看板に書いてあった通り、居酒屋を見つけた。
「居酒屋鎌足か・・・」
『拙者のどが渇いたでござる・・・』
『とりあえず入ろうか』
カランカラーン

『はいいらっしゃい』
店内に入ると、見覚えのある爺さんが働いていた。
「あれ・・・」
『・・・!!?鎌足様!!鎌足様ー!!』
人名を叫びながら店の奥に入っていく翁。
『鎌足って・・・まさか・・・』
『・・・嘘でござろう・・・そんなことが・・・』
「いや小次郎、お前は知らんだろうが」
しばらくすると奥から一人の男が出てきた。
そう前に悪魔に魂を売り渡し、狂ったあげくに蘇我に魂ごと殺されたはずの中臣鎌足である。
『やぁ、久しぶり・・・って所かな、蘇我』
『・・・なんでだ?なんで居るんだ?お前の魂は・・・』
『いやそれがね、僕の契約していた悪魔覚えてるかい?』
「・・・たしか・・・明日もデブですだっけか?」
『いやアスモデウスね、まぁ今日がデブだったらそりゃ明日もデブのままだよ。ああ・・・ワードシフトしてしまった。で、その悪魔に気に入られたらしくてね、魂が壊れる前の状態に戻してくれたんだよ』
『奇跡・・だな。鎌足ぃ・・・良かったなぁ・・・』
『それでやることも無いから居酒屋を経営しているでござるか』
『うん、居酒屋経営を裏で牛耳るのがアスモデウスの夢だったらし

くて手伝ってるんだ。一応店長は僕だよ』
『微妙な夢だな・・・。人外を殺すって意気込んでたのはもういいのか？』
『うん、冷静に考えたらそこまで殺したかった訳じゃないしね。その場のノリで契約したら後に引けなくなっただけで』
「えぇぇ・・・・・」
『ところで蘇我たちはどうしたんだい？みんなして地獄に来て・・・』
『ああそれなんだがな、かくかくしかじかってな訳で閻魔亭の場所知らないか？』
『それなら簡単だよ。ほら、地図あげる』
そういって地図をポケットからだして渡す鎌足、こいつ普通にいいやつじゃねぇか・・・
霊能たちは、地図を手に入れた！
「よし、目指すは閻魔亭だな！行こうぜ！！」
『行くでござる』
『おう、じゃまたな、鎌足！機会があったらまた会おう！！』
『うん、じゃあねぇ～』
そんなこんなで閻魔亭目指して歩く三人。地図も手に入れたし鎌足と会えたしでご機嫌である。
さて、閻魔亭に向かうにはさまざまな道があるが・・・どうしてもいくつかのゾーンを通らなくてはいけない。今も、彼らは一つのゾーンを抜けた所である。
『針山地獄ゾーンが・・・』
「反省はしてるが後悔はしていない」
『見事なほど禿山地獄になったでござるなぁ・・』
そう、針の山がつっるつるになってしまったのである。
原因はもちろん霊能、針が霜柱みたいで踏むといい感触がする！と片っ端からへし折ったのである。しかもそれにつられて小次郎もその針を片っ端から斬っていた。さらに蘇我が折れた針をどんどん

山の下に放り投げていくというよく分からない作業をしていたのである。
本人たち曰く、楽しかったらしい。
・・・・これが後に地獄に伝わる、針山の悲劇である。
「まぁ過ぎたものはしかたない！次は血の池だな！！」
こうして悲劇は広がっていく――――

一方こちらはさっちんたち・・・・
ケロベロスのケロちゃんに乗って地獄まできたようです。
しかしケロちゃん、地獄に来るのは簡単でもそうほいほいと地獄からは出れないようで・・・前に出てきたのは、地獄を揺るがす大事件が起きた時の騒動にまぎれてどうにか現世に出たそうだ。
『霊能はんと蘇我はんはどこにいるんどすかぁ？』
『見つけた後どうやって地獄から出るかも考えないとねぇ・・・』
「ま、なんとかなるっです！！」
『グルルル・・・！！』
ついさっき彼女らは地獄についたのだが・・・一番最初についたゾーンは針山地獄だった。
『ガウッ！！??』
『・・・つるんつるんどすぇ・・・』
『へし折られてるわね・・・』
「霊能さんたちがここを通ったに違いないっですね・・・」
『まぁ・・・否定できないどすぇ・・』
『っていうか確定よね。こういう壊れたゾーンをたどってったら会えるんじゃないかしら？」
「名案っですねそれは！！行きましょう！！」
血の池地獄についた彼女たち・・・

『グガッ！！？』
『酷いどすなぁ・・・』
『色が緑色ね・・・』
「しかもいい香りがするっです・・・」
『間違いなく入浴剤ね。バスロマンだわ』
そこには適温になった池と、のんびり入っている他の幽霊たちがいた・・・彼女たちはそこの幽霊に霊能たちの事を聞き、前へ進む・・・

極寒地獄についた彼女たち・・・

『ガァ・・』
「氷像があちらこちらにあるっですね・・・」
『あ、これネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲じゃないどすか完成度高けーなオイ』
『さだこちゃん！！？どうしたの！！？』
「寒さでさっちんさんが壊れたっですぅぅぅ！！」

釜茹で地獄についた彼女たち・・・

『シチュー・・・ですね』
「おいしそうにぐつぐつ煮込まれてるっです」
『ケロちゃん、食べるどすぇ』
『ガウ！！？・・・ペロ・・・ガウッ！！ガガウッ！！』
「どうしたんっですか！！！？」
『うまガウ・・・』
『今少ししゃべらなかった！！？』
『そっかーおいしいどすかー』
「良かったっですねぇー」

『スルー！！？二人ともスルーなの！！？』

灼熱地獄についた彼女たち・・・

『あっついどす・・・けど・・・』

『道にサンバの衣装が落ちてるわね・・』

「腰みのまで・・・いったい何をしてたんっですか・・・」

『あ、そこの岩に目玉焼きを作った跡が残ってるどすぇ・・』

『地獄でも楽しんでるようで何よりだわ・・・』

そんなこんなで歩いていると、霊能たちのような影を遠くからだが見つけることが出来た。

なにやら三人いるようだがそれはまぁいいだろう。

『霊能はーん！蘇我はーん！！』

さっちんが大声で呼びかける。

だがその瞬間

『あの二人になにか用事でござるか？』

と、真後ろから声をかけられた。

いつのまに背後を取られていたのかは分からない。もしこれが敵だったら殺されていた。

『・・・どちらさまどすか？』

『拙者でござるか？・・・拙者は小次郎でござる。でもまずは・・・この鎌をどけて欲しいでござるよ』

そう、さっちんの背後を取った小次郎の首には鎌が添えられていた。もちろん、その鎌の持ち主はマスクをつけた女。

『さだこちゃんから離れなさい。不信な動きをしたら殺すわ』

くっちーである。

『危害を加える気はまったく無いでござる！！ほんのいたずらだったでござるよ』

「心臓に悪いいたずらはやめるっですよ」

「あれ？みんなも地獄に来てたのか、何？みんな死んだの？」

『馬鹿、霊能を迎えに来たんだよ。僕が咲きに来て後からみんなが来る予定だったんだよ』
『霊能はん、蘇我はん、無事でよかったどすぇ』
『で、この男は誰かしら？』
「そいつは小次郎、俺の友達だ！」
『そうでござる、誰かが拙者たちの後ろをついて来ていたからいたずらがしたくなっただけでござるよ』
『そう・・・霊能君が言うなら信用はできそうね』
『いや本当にすまないでござるよ』
『許しますどすぇー』
「簡単に許すんっですねぇ。ま、いいっですけども」
ひと段落ついたところで、地図を見ながら蘇我が言う。
『閻魔亭にいるであろう閻魔に会って、みんなで現世に帰るぞ！』

「「『『『おおー！！（バウッ！）』』』』」」

実はもう閻魔亭のすぐそばまで来ている。
あとは、閻魔に会って現世に帰れるようにオハナシするだけである。
だが果たしてそううまくいくのか？それはあってみないことには分からない。
おそらく・・・・閻魔は一筋縄ではいかないだろう。

第十二話　霊能太郎と小次郎の活躍

前回のあらすじ！！

赤青さんと佐悟さんは回転寿司のレーンに戸惑いつつもお好み焼きをソースをかけずに食べきった！！
だが暗黒超大魔王は満腹で動けないところを卑劣にも狙い、フランスパンをアンダースローで投げてきた！！
しかし二人は得意の反復横とびで避けることに成功したのだ！
はたしてふたりは暗黒超大魔王を倒すことができるのか！！？

まぁ嘘だが。

そんなこんなで霊能一行は閻魔大王がいる場所、閻魔亭の前までたどりついた。
「ようやくここまで来たなぁ・・・さて、閻魔さんに会って現世に早く帰るか」
『そうだな、閻鍋が異臭を漂わせてないか心配だもんな』
『近所の人が異臭に気づいて通報したら大変どすなぁ』
『大丈夫でござる。地獄と現世の時間の流れは違うから生き返っても死んだときからたいして時間がたっていないはずでござる』

「そうなんっですか？知らなかったっですねぇ」
『ところでみんな・・・、さっきから門番の人がこっちをずっと睨んでいるのだけど・・・』

第十二話　霊能太郎と小次郎の活躍

閻魔亭は閻魔の住む場所だ。
ゆえに警備は万全だ。
門番が二人、門の左右に立っている。顔が似ている所から双子のように見える。
『オイ貴様ら』『ここに何の用か』
「閻魔さんに会いたいんだが通してくれるか？」
『様をつけんか』『馬鹿者どもが！！』
『そうだぞ霊能、閻様魔さんに失礼だろうが』
『つける所違わないそれ！？言いづらいわよ！？』
『馬鹿にしとるのか！！』『貴様ら！！』
「閻魔様に用があるんっです、会わせてください」
『アポは取ったのか？』『無ければ入れることは出来ん』
『困ったどすなぁ・・・今からアポを取ったらいつはいれるんどすか？』
『２００年から』『３００年後だな』
『それは困ったでござるな・・・どうしても駄目でござるか？』
『駄目だ』『駄目だ』
「なら、無理やりでも入れてもらうしかないか・・・」
霊能が指をバキバキと鳴らす。
そして門向かい歩き出したその時、どこからか二メートルはある大男が現れた。
『我が閻魔亭に腕っ節だけで乗り込む気か？』

『閻魔様！！』『閻魔様！？』
「あんたが閻魔さんか・・・頼みがあるんだが」
『断る。貴様らの頼みなど聞く気は無い。・・・と普段なら言う所だが・・・』
『言う所だが？？』
『貴様らは腕に自信があるようだ。どうだ？一つゲームをしようじゃないか』
「・・・どんなゲームっですか？」
閻魔と呼ばれる大男はニヤッと笑いながら言葉を続ける。
『なぁに簡単だ、我を楽しませろ。暇だからな。ルールは簡単だ、貴様らと我の部下、どちらが強いのかを競う・・・どうだ？ゲームに勝てば頼みとやらを聞いてやろうではないか』
『・・・人数が違いすぎでは無いでござるか？』
『ふん、そうだな・・・五試合だ。五試合での一対一真剣勝負・・・当然乗るだろう？』
『待ってくれ、そこの少女二人・・・さっちんとツキミだが・・・その二人は戦いのメンバーからは除外してくれないか？』
『蘇我はんっ！？』
「蘇我さんっ！？」
『断る。この場に居るのだ。試合には出てもらう・・・だが特例だ。その二人とそこの犬を合わせて［一人］としようじゃないか、文句はあるか？』
「こ、こちらが負けた場合はどうなるっですか！？」
『そうだな・・・未遂とはいえ閻魔亭に不法侵入しようとしたんだ・・・無事で済むと思わんことだな』
『霊能君・・・』
「乗るしかないよくっちー、・・・ＯＫ！その勝負乗った！！！」
『そうか・・・ならば閻魔亭に入れ。・・・我を退屈させるなよ？』

こうしてとりあえずは閻魔亭に入ることができた霊能一行、だが閻魔に生き返らせてもらうには勝負に勝たなくてはいけなくなった。
一行は緊張しながらも閻魔亭の廊下を歩く・・・。
『あ、高級そうな壺だ』
『蘇我はん・・・壊したら相当な弁償金額どすぇ・・・気をつけるどすぅ』
『あ、引き出しにやたらビー玉が入ってる』
『何勝手に空けてるのよ・・・』
「蘇我ー、こっちには高そうな手鏡があるぞー」
『霊能君も便乗しない！！』
「緊張感がもう無いっですねぇ」
『まぁ緊張してたら勝てる戦いも勝てないでござるよ』
「そういうもんっですか・・・」

ここで戦うのであろう部屋についた一行、言うならば小さな体育館くらいの部屋である。障害物はほとんどない。
『さて・・・ルール説明をする。妨害無しの真剣勝負、死ぬか気絶、もしくは降参した瞬間に勝敗がつくものとする。』
「ああ、分かった」
『さらに、戦闘場所はくじでどんな場所にするかを決めるぞ。腕のいい部下がいるのでな』
『この部屋じゃないんどすか？』
『まぁ見ていれば分かる。では我が部下の一番手はムラサメだ。負けるなよ？』
その言葉にあわせたように閻魔の後ろから男が現れる。
腰にやけに長い刀を差した男・・・ムラサメ。
『御意、閻魔様』
その姿を見て霊能チームからも一人の男が前へ出る。
『相手も刀のようだし拙者が行くでござるよ』

同じく腰に刀を差した着物の男・・・小次郎である。
『ではステージ選びのくじを・・・そこの小娘、貴様に引くことを許そう』
「あ、あたしっですか！？・・・わかりましたっです・・・」
差し出された箱に手を突っ込み紙を一枚引く。そしてその紙を開くと・・・［砂浜］と書かれている。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！

大きな音とともに部屋の地形が変わる。
『な！何よこれ！！？』
『喚くな。我が部下の魔法に過ぎん。厳正なくじの結果だ、この場所で戦ってもらおう』
そういうと闇魔は部屋から出て行く。
霊能たちもその後ろをついていき、隣の部屋へと移動した。
隣の部屋はさっきまで居た勝負部屋の中がモニターで見れるようになっており、窓からも覗けるようだ。
そして小次郎の戦い、負けられない第一回戦が始まる――――

『よろしく頼むでござるよ』
『・・・』
『無口でござるなぁ・・・』
場所は砂浜でござるか・・・足場が悪いでござる。これでは踏み込みにあまり力が入らないでござるよ・・・
だがそこは相手殿も同じ、同じ侍としてこの勝負負けられないでござるなぁ。と、いうか拙者そもそも霊能殿たちと会ってからまだ誰とも戦ってないでござる。・・・これはいい所を見せるためにも負けられんでござるな。
カチャリ、ムラサメは鞘から脇差サイズの刀を取り出して胸の前

に構え、小次郎を見ている。
そして、一気に間合いを詰めてくる――――！！！
キィン！！
『間一髪でござるな』
危ないところでござる・・・想像以上に速かったでござるよ。
こんな砂浜の足場の悪いところでこの速さ・・・
簡単には勝てそうにないでござるな・・・ッ！
現在の距離はお互いの間合いギリギリ、一瞬の動きが全てを決める。
と、今度は小次郎が攻める。
『早々に決めるでござるよ・・・ッ！』
軽く一歩前へ出て刀を振る、キィン！とそれを弾かれる。
それもそのはず、ムラサメが使う脇差サイズの刀、小太刀（こだち）と呼ばれるそれは攻めよりも防御に向いた小回りの聞く刀なのである。
それを胸の前で構え、いつでも防御できる姿勢で居る。
続けて足を狙い刀を振る、キィン！これも弾かれる。
ならばと右胴を狙うフリをし、右足を狙うも一瞬反応に遅れたようだが弾かれる。
小太刀は小回りが効く分、一瞬反応に遅れたくらいのことならば取り返せるのだ。
『これならどうでござるか！！』
そう言って一歩間合いの外に出ると――――
『幻影流、神速！！』
キィン！！！

今までよりも一際大きく甲高い音が鳴る。どうやらガードされたようだ。
『やるでござるな・・・』
まさか弾かれるとは思わなかったでござる・・・！！
[幻影流、神速] は拙者の技の中でも最速の剣技、しかしこの足場では踏み込みが甘かったでござるか・・・しかもこのような足場では体力も多く奪われる・・・
正直、キツイでござるなぁ・・・
『ぬるいな、反吐が出る』
ムラサメが言う。
そしてムラサメはまた一気に間合いを詰めて来た――――！！

キィン！！

『そのくらいなら守りきれるでござ』ブシュッ！！
『だからぬるいと言ったのだ』
小次郎の腹に小太刀が突き刺さる。
『ぐっは・・・何でござるか・・・ッ！？』
小次郎は攻撃を弾ききったはずだ。それは音からも間違いないことである。
だがしかし腹を刺された。それは何故か・・・
その答えは単純だった。

『そうそういい忘れていた・・・私は二刀流なのだよ』

そう言ってニヤリと笑うムラサメ。二つの小太刀、片方にはべっとりと小次郎の血がついている。思えば確かに不自然だった。
何故・・・わざわざ小太刀一本で戦うのか。
何故・・・ずっと小太刀を見せ付けるように胸の前で構えていたのか。

何故―――鞘が不自然に長かったのか。
『・・・小太刀二刀流でござる・・か。油断したでござる』
『戦場では一瞬の油断が死を招く。どうする？今なら降参を認めるぞ？』
『・・・悪いが、拙者も負けられないのでござるよ』
そう言った直後に前に出て刀を振る。キィン！さっきよりも痛みで剣速が落ちた上に、敵の小太刀は倍に増えた。弾かれるのも当然である。
だが小次郎は諦めない。
キィン、キィン、キィンキィン！！
攻める、攻める、刀を振る。愚直にも小次郎は刀を振り続ける。
だが足場も悪く、腹から出血した状態でそんなことをしていたらどうなるか・・・もちろん、体力が無くなる。事実、小次郎の体力は目に見えて減少している。
『諦めろ、貴様では勝てん』
『・・・それは、やってみなくては分からんでござるよ！！』
キィン！！！！！
大きく音を鳴らし、いったん距離をとる。
小次郎は大きく肩を揺らし、誰が見ても疲れていると分かる。
『長引かせても拙者には勝ち目が無いゆえ・・・これで決めさせてもらうでござるよ』
『いいだろう、死んで後悔するなよ？』
にらみ合う両者、静寂が降りる部屋。
一瞬の動きが、勝敗を左右する。
ダッ！！と小次郎が間合いを詰めた。
『本当に反吐が出るな。馬鹿の一つ覚えか』
だがそれを読んでいたムラサメは小次郎の心臓に狙いを定める・・・その読みは見事に当たり、小次郎の心臓を小太刀が貫いた・・・ッ！！

『なっ！？』

・・・はずだった。

ムラサメの小太刀は正確に小次郎の心臓を貫いた・・・いや、正しくは小次郎の心臓があるはずの空間を貫いたというべきか。

困惑したムラサメの耳元に、声が響く。

――――そうそう拙者もいい忘れていたでござる

実は拙者、ぬらりひょんなのでござるよ――――

『幻影流奥義、籠目籠目（かごめかごめ）』

ザンッ！！

前から来たはずの小次郎が、気づいたら後ろにいて切られる。

正面から、気づけば後ろの正面へ。認識をごまかすことがぬらりひょんの得意技。

『グハッ・・・油断・・・した・・・』ズシャァ！！

『戦場での油断は、負けにつながるのでござるよ。覚えておくといいでござる』

何時だったかのムラサメのように、だがしかし邪気の無い顔でニヤリと笑う。

第一回戦勝者、小次郎

そして試合が終わり、小次郎が霊能たちのいる部屋へ向かう。

その時、誰に聞かせるでもなくぼそりと、小次郎は呟いた。

『今回……ふざける余裕が無かったでござるな…笑いが足りんでござるよ。真剣にやるのも考えものでござる』

第十三話　霊能太郎とクリスタルガイザー

『小次郎！！ナイスだ良く勝った！！』
「お前なら勝てると思ってたぜ！！」
『拙者のいい所を見せられたようでなによりでござるよ』
「でも・・・大丈夫っですか？」
『お腹をざっくりいってるわね・・・早く手当てしないと』
『私に任せるどすぇ、呪いが専門どすけど・・・回復の呪いもあるんどす』
『・・・かたじけないでござるよ』
「さっちんそんなことが出来たのか・・・頼むぞ」
『任せるどすぇ、ただ・・・回復といっても血を止めるのが精一杯どすけど・・・』
『十分でござるよ、次はさっちん殿たちの番でござろう？血さえ止まればどうにでもなるでござる』

第十三話　霊能太郎とクリスタルガイザー

第一回戦が終わり、控え室で小次郎の勝利を祝いつつも傷の心配をする霊能たち。幸いさっちんが呪いの要領で血を止めることができたものの、二回戦の出場者はさっちん、ツキミ、ケロちゃんだ。ある程度小次郎の傷の手当てをしたところで、第二回戦開幕直前となった。

『ふん・・・なかなかやるではないか、それなりに楽しめたぞ？』
「悪趣味っですね、二回戦も絶対勝ってやるっですよ！！」
『意気込むのは自由だ・・・二回戦、出場者は？』
「あたしっです！！！」
『私もどすぇ、あとケロちゃんもどす』
『ガルルルル！！！』
一歩前に出る二人と一匹。それを見て闇魔は口を開く。
『貴様らはその集まりで［一人］だったな、いいだろう・・・ではこちらは』
『はいはいはいはーい！！俺っす！俺とロックが出るっすよ闇魔様！！敵も実質多いし女じゃねぇっすか！！俺とロックで余裕っすよ！』
出てきたのはやたら自己主張の強いひょろりとした男と、その隣の大男、こちらはやたら貫禄のある体格をしている。
「な！！何で二人なんっですか！！一対一なはずっですよ！！」
『へへ～ん！こちとら仲良し二人組みぃ！俺たちだって二人で［一人］扱いなんだよ！！』
『せこいどすな・・・ありなんどすか？』
『アリもアリ、超アリよ！！お前らなんてなぁ！このマウンテン龍様にかかればちょちょいのちょいーだ！！』
『落ち着け、山田』
『ちょ！！ロック！！山田じゃないって！マウンテン龍だって！！出てくる前に何度も言ったじゃん！！？』
『俺は岩男だ』
『ロック！！？普段寡黙なのになんでこんなときだけ自己主張強いの！！？打ち合わせしたんだからもうチョイ合わせて！！？』
どうやらひょろりとしてやたらテンションの高いこの男、マウンテン龍。
本名は山田と言うらしい。
『付け加えるなら本名は山田　竜（たつ）だ』

『ちょちょちょロック！！！？突然俺の本名ばらさないで！！？イメージ崩れちゃうから！！』
『もともとイメージが無いから大丈夫だ』
『ちくしょう！！』
そしてとなりの大男、ロックと呼ばれているが本名は岩男（いわお）と言うらしい。とても貫禄のある低い声で淡々と合いの手を入れている。
「まぁいいっですよ！！絶対負けないっですからね！！」
『そうどすな、負けれないどす！・・・ケロちゃんもいるんどすから負けないどすぇ』
『ガルルルル！』
ちなみにケロちゃん、今はチワワサイズのままだ。霊能のしつけの賜物によりチワワサイズと真の姿を自由に変えられるようになったらしい。
『プ！！！そんなちび犬が吼えたって怖くねぇよ～だ！俺様が五秒でかたづけてやるぜぃ！！』
『・・・閻魔はん、場所選びのくじはどうするんどすぇ？』
『・・・・そうだな。そこのマスクの女、貴様が引け』
『私！？・・・わかりました・・・［岩場］ですって』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！
勝負部屋の地面が変わっていく。ものの数秒で岩場に変わってしまった。
岩場と言っても、地面自体は砂利だ。ただし至る所に大小さまざまな岩があり、隠れたり武器にすることが出来る。

そして第二回戦が始まる――――

『へいへいへいへい！！びびってんのかい！？ま、当然だから落ち込まなくていいんだぜ？だってお前らの相手はこの・・・マウンテ

ン龍様なんだからな！！』
「さっちん、どうするっですか？」
『ケロちゃんを前衛に置いて私たちは後衛に回るしかないとおもうどすぇ』
『オイオイ！俺様を倒す相談かい！？そいつは無駄だぜ！なんてったって俺は世界最強の奥義、クリスタルガイザーの体現者だからな！！』
「さっちん、あのなんとかガイザーって知ってますっですか？」
『知らないどすぇ・・・でもきっとあそこまで言うほどどすから・・・』
「強い・・・んっですよねきっと」
『ガルルルル！』
『ああ当然だ。お前らは見たか？闇魔様の裁きを待っている幽霊どもの列から見える大きな岩が粉砕していたのを・・・アレをやったのは俺だ』
「な！本当っですか！？」
『このクリスタルガイザーで一発で終わらせちまってもいいんだぜ？ホレ？撃っちまうぜクリスタルガイザー？』
「守りきれるっですか・・・［四重結界］！！」
『おお！すごいどすぇ！！』
『いいガードじゃねぇか・・・だがそんなガードで大丈夫か？・・・いくぜ・・・クリスタル・・・』
そういうとマウンテン龍は構え、拳を高く上げ・・・
『ガイザァァァァァァ！！！！』
力強く地面に叩きつけた！！！
「？」
『？』

・・・が何も起こらない。
『ふ・・・ＭＰ切れか、命拾いしたな』
『山田、そのＭＰいつになったら溜まるのだ？』
『ロック！！マウンテン龍と！そう呼んでくれよ！！・・・ＭＰか？・・・それはな・・・・俺たちの知らない・・・いつか・・さ』
『もう何年もそう言っているよな』
『ロック！！　ＭＰ溜まったら凄い強いんだって！！マジだって！！』
「・・・わざわざ結界を作ったのがあほらしく思えるっです・・・」
『おっと？なめてもらっちゃ困るぜ？クリスタルガイザーが撃てなくても・・・お前らみたいなガキと子犬に負けはしねぇよ！！』
『あ、ケロちゃん。元の姿に戻っていいどすぇ』
そういうとケロちゃんがケロベロスとしての元の姿に戻っていく・・・！！
『いいいい犬がちちちちょっと大きくなななったくらいで』
『山田、動揺しすぎだ』
『グァァァウ！！！！！！！！』
『いやいやいや別に別別に怖くなないし？むしろよよ余裕？アアアレくらいの犬ばあちゃんも飼ってたし？』
『山田、俺の後ろに回るな』
『ロック？別にこれは怖いとかそそんなんじゃなくて・・・そう、戦略だよ戦略、戦略的に距離をとるべきだと判断したまでさ！』
明らかに膝が大爆笑しているマウンテン龍。ちなみに拳法家のように見える服は良く見たらジャージを少し細工しただけのものだ。
『大丈夫だ山田。・・・俺がやる』
『ヘイ！流石は俺の相棒！親友！半身！！ならロックに犬は任せて俺様はあっちのガキどもを始末するぜ！！』
『・・・くるどすぇ！！』
『了解っです！！』
思わず構える二人、ツキミは陰陽師用のお札を取り出す。

『グゥゥッァアウ！！！』

『む！！』

ッガシィン！！！！

取っ組み合う形になった岩男とケロちゃん。

力は均衡しているように見えて・・・ケロちゃんが少し押されている。

『ふははは！このマウンテン龍様を忘れてもらっちゃ困るぜぇ！！』

「あたしがケロちゃんを支援するからそっちはよろしくっです！！」

『了解っどすぇ！！！』

『ヘイヘイお前みたいな小さい子に何が出来るんだいっ？一撃で眠らしてやるぜ！』

『私の得意技は・・・呪い、・・・一応これでもそこそこの威力は出せるんどすぇ？』

『ちょ待てよ待てよ！？呪いってお前さすがにそれは無しじゃね？？男なら肉弾戦で語り合うべきじゃね！！？』

『残念私は女の子どすぇ！！［呪殺式　激痛］！！！』

さっちんがなにやら唱える。

『だから待てったたたたあqすぇｄｒｆｔｇｙふ！！！・・・いいいっいいやいたくねーし！べべべつにいたくねーし！！でもちょっと忘れ物したから戦略的撤退だし！！』

どうやらダメージがいったようだ。戦略的に一時撤退していくマウンテン龍。とりあえずの強敵はケロちゃんと戦っている岩男のようだ。さっちんとツキミはマウンテン龍を後回しにした。

「ケロちゃん！もうちょっと待ってね！！くらえ！［陰陽術　火の玉］！！」

岩男のもとに数個の火の玉が向かっていく。

だが・・・

『むん！！』

岩男はケロちゃんと取っ組み合ったままそれを耐え切る。

しかも全然効いていないようだ。その間もケロちゃんは押されている。

「効いてない！？・・・さっちん！でっかいの準備するから時間稼いで欲しいっです！！」

『［呪殺式　麻痺］！！ツキミはん！了解どす！頼みますどすぇ！！』

『っむ！？・・・むぅ！！』

岩男の体が少し動かしづらくなったようだ。ケロちゃんが善戦している。

『グアガァァァ！！！』

『ナイスどすぇケロちゃん！！［呪殺式　針］！！』

『・・・ッ！！？む！！』

岩男が若干ひるんだ。［呪殺式　針］の効果は体中を針に刺された感覚がするというえげつないもの。さすがの岩男もこれには効いたようだ。

『ロック！？っち！これは使いたくなかったが・・・使うぜ！！クリスタルガイザーを超える秘奥義！』

『む！山田やめろ、それはまだ未完成だろう』

『でもよぅ！今やらなきゃいつやるってんだよ！ヘイ行くぜくらえ！！？』

そうして拳を高く掲げて構えるマウンテン龍。

『・・・っく！まずいどすぇ！！』

『グァルルルル！！！！』

『もう遅ぇ！！微塵に砕けろ！！・・・アルティメット・・・ッ！！・・・ガイザァァァァァァァァァァ！！！！！！！』

そして腕を思いっきり振り下ろすマウンテン龍！！

『間に合わな・・・！！』
『グガァァァ・・・！！』

・・・シーン。

何も・・・起こらない。
『やっぱ未完成じゃだめか。多分アレだ。ＭＰ足りないんだきっと』
『ビビッて損したどすぇ！！！［呪殺式　衝撃］！！』
『っちょまぐへぇ！！！』
さっちんの呪いでダメージをくらうマウンテン龍。実に情けない。
『いや本当だったら撃ててたし！！ただちょっと・・・あの・・・
その・・曜日が悪かっただけだし！！』
はたして技を出すのに曜日は関係あるのだろうか。
「出来た！さっちんさん！！いつでも撃てるっです！！」
『分かったどす！！ケロちゃん！離れるどすぇ！！』
『ガルルルルゥ！！』
『む・・・！！させぬ！』
岩男は危険を察知し、それを止めるべく行動に出る。
『［陰陽術　奥義　焔の神龍］！！』
『むぅぅぅ！！！［大　地　震］！！！！』

ズドンッ！！！！！！！

すぐさま岩男が地面を大きく揺らしツキミを止めようとするも遅く、すでにツキミの技は発動していた。それはまるで炎の化身、メラメラと燃え盛りながらも威厳のある龍が岩男に突進する。

『むむむぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！』

・・・衝突の瞬間、岩男は全身に力を入れ・・・龍をその身で受けきった。
・・・だが、龍の炎は到底耐え切れるようなものではなく、全身を焦がしつくす。
・・・だが・・・龍が消えた後、身体中を黒く焦がしながらも彼は立っていた。
「なっ！これでも倒れないっですかっ！？」
『……いや、ツキミはん。良く見るどすぇ』
そう言われてツキミが目を凝らすと・・・気づいた。
岩男が立ったまま気絶している事に・・・
そう、彼は・・・最後まで地に膝をつける事なく戦い抜いたのである。
「か・・・勝った・・・っです・・・」
『グルル！』
『倒した・・・どすぇ』
二人と一匹は、壮絶な戦いに息を切らしていた。だが、そこに不運は起こった。
さっちんの所にだけ・・黒い影。それは見上げると・・・大きな岩のかけらのようだった。
そう、先ほどの岩男の技で吹き飛んだ岩のかけらが・・・落ちてきたのだ。
『え？』
勝利を確信していたゆえの油断か、それとも壮絶な戦いの後の疲れか・・・
さっちんの体は、突然の事態に・・・動かなかった。
だが、もうだめだとさっちんが思うその時、確かに音を聞いた。
それは、パリンと言うたわいの無い音。
・・・窓の割れる音。
『ふぬおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！さっちーーーん！！！！』

さっちんが気づいたときには、落ちてきた岩は自分の隣にあり、自分は・・・・蘇我に助けられていた。
『大丈夫かさっちん！！怪我は無いか！！？』
『・・大丈夫・・・どすぇ。ありがとう・・・どす』
「さっちん！！大丈夫っですか！！？」
『ガルルルル！！！』
『良かった・・・さっちんが大怪我をするところだった・・・！！』
「まぁでも・・・勝ったんっですし、良かったじゃないっですか！！」
『そうどすな、勝てたんどすぇ・・・』
『何を言う、貴様らの負けだ』
勝ちムードになっていたところに、闇魔が現れる。
「なんでっですか！！」
『確かに勝ったどすぇ！！』
『貴様らは片方しか倒してないではないか・・・』
『ヘイ！！まだまだこのマウンテン龍様が残ってるんだぜ！？まぁ俺様に勝つなんて無理だがなぁ！！』
「・・・なら！今から倒せばっ！！」
『もう遅い。貴様らは一対一のルールを破った。負けを認めろ』
『あ・・・僕が手を出したから』
「く！！・・しかたないっですね・・」
『悔しいどすぇ・・・ッ！！』
勝ちから一転して負けになってしまった二回戦目。
そのくやしさは計り知れない。
『大丈夫だ。さっちん、ツキミ、ケロちゃん。・・・三回戦は僕が出る。絶対勝つよ』
『・・・約束・・・どすぇ？』
『ああ、約束だ。紳士は約束を破らないからね』
「がんばってくださいっですよ」

『グルルルル』
いったん勝てたかのように見えた二回戦。
その実はまさかの負け。
闇魔暇つぶし五戦勝負、現在一対一の同点である。
次の試合は蘇我入鹿、・・・はたして紳士は勝つことが出来るのか。

第十四話　霊能太郎と紳士の戦い

『さて、僕の相手はどんなやつかな？』

第三試合目、蘇我がさっちんと絶対勝つと約束をした試合である。

『ふん・・・我の直属の部下だ。せいぜい足掻くが良い』

閻魔の自信満々な台詞。

そして現れた蘇我の対戦相手は・・・

『・・・まさかまた会うとは思わなんだ』

どこかで見たような気がする鬼。具体的には三途の川のあたりで。

『帝鬼のおっさんか！？なんでこんな所に！？』

『阿呆、それはワシの台詞じゃ。・・・棄権はせんか？』

『まさか。紳士は約束を破らないんだよ』

第十四話　霊能太郎と紳士の戦い

対戦場所はさっちんがくじを引き、場所は林に決まった。

木々が生い茂っている。

そこに、二人の男が立っている。

『さて、やるならばワシは手加減せんぞ？』

『ちょっとまって！少し考えさせて！！』

・・・ＯＫ　ＯＫ、一度冷静になろう。
さっちんがピンチなのを助けて、テンションが上がってかっこつけてたら帝鬼さん（鬼、めっちゃ強そう）と戦うことになっていた。
・・・何言ってるか分からないかもしれないが超スピードとか催眠術とかそんなチャチなもんでは断じてない・・・もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・。
とか言ってる場合じゃねぇぇぇぇ！！！
ヤバイヤバイヤバイよ僕！！調子に乗りすぎた！！かっこつけすぎたやべぇ！！冷静になれ僕！！氷のようにＣＯＯＬに、こんにゃくのように冷たく！！
・・・こんにゃくってなんだよぉぉぉぉ！！！
駄目だこんなこと考えてたら昔こんにゃく神とか名乗ってた不思議ちゃんを思い出す・・・あの人は今なにをしてるんだろうなぁ・・・まだ自分をこんにゃくの神だとか言ってるんだろうか。

『もういいか？』

よくないですぅぅぅぅ！！！
現実逃避してる場合じゃない！現実を見なければ！！

状況
蘇我ＶＳ帝鬼

見た目
普通の幽霊ＶＳ筋肉がたくましい鬼

強さ
普通よりは多分強い？ＶＳあきらかに強そう。閻魔直属の部下らしい。

スピード
そこそこ。一般よりは速い？ＶＳ絶対速い。あの筋肉は速い。
防御力
あんまない。所詮は幽霊ＶＳ鬼だし筋肉の塊だし急所以外は硬そう。
結論
勝ち目ほぼゼロ。

ぎゃぁぁぁぁぁ！！！
ピンチピンチ！！ＳＯＳＳＯＳ！！！
こんな時霊能なら余裕なんだろうなぁ・・・こう・・・ベシッと。
まぁ無いものねだりは良くないな。
絶対負けるであろう試合だが・・・負けられない理由がある。
僕が負けたら地獄から出れない可能性がある。かっこつけて約束もしてしまった。
それに・・・

「蘇我ー！頑張れよー！！」
『蘇我君！勝ちなさいよー！』
「絶対勝つっですよ！！」
『蘇我殿、応援しているでござるよ』
『蘇我はーん！！！頑張れどすぇぇぇぇ！！！』

・・・この声援には、答えたいからね。

『そろそろいいか？早く終わらせたいんだが・・・』
『ああ、覚悟はできた。作戦も決めた』
向かい合う両者、今にも戦闘が起きそうな瞬間。蘇我が口を開い

た。
『ああ、確認しておきたいんだけど、この試合で壁とかこの館の物が壊れても・・・僕弁償しなくていいよね？』
『・・・閻魔様主催の試合だからな。大丈夫だろう』
『良かった・・・。じゃ、帝鬼さん、・・・・覚悟してくれよ？』
『若造が・・・なかなか吼えるのぉ・・・』
ピリピリとした空気。
無音の空間。
勝ち目の薄い勝負の火蓋が・・・切って落とされた。
『作戦はただ一つ・・・・』
『来い、若造！！』
蘇我が構える！！
・・・・帝鬼に背中を向けて。
『三十六計逃げるっきゃねぇぇぇぇ！！！！！』
全力で走り出した蘇我。もちろん後ろに。
対してあっけに取られた顔の帝鬼。まさか逃げるとは思っていなかったのだろう。
『勝てるかボケェェェ！！作戦名！逃げるが勝ち！！』
『なッ！！待てぃ若造！！』
少し遅れて追いかける帝鬼。
だがフィールドは林。直線的には走れず、なかなか蘇我には追いつけない。
『待たん！！絶対に待たん！！だって待ったら絶対負けるから！！！』
そして帝鬼は蘇我を見失った。なんといっても周りは林だ。見通

しが悪い。
『たしかにいい戦略かもしれんが・・・それではワシには勝てんぞい・・・』
そうなのだ。今の蘇我は逃げているだけ。このままでは試合は動かない。
と、言うことは勝つためにはいつか出てきて攻撃を仕掛けなければならないのだ。
だから帝鬼は待つことにした。不意の一撃をもらってもいい。あの程度の若造の一撃では鬼である自分は倒れない。
そういう確信があるが故の行動。
奇襲をあえてくらい、そこを仕留める。そのためにも・・・帝鬼はそこで待っていた。

十分後。

まだ来ない。
おそらく帝鬼が警戒を解いたときを見計らって襲うつもりなのだろう。
しかし帝鬼は警戒を緩めない。

二十分後。

なかなか来ない。
じらし作戦か・・・なかなかいい手だ。だがワシの忍耐力をなめるなよ・・・？

四十五分後。

あっれ～・・・？
なんで来ないの？焦らすって言っても限度が無い？？やっぱりワ

シから探しに行くべきか？
だがここまで待ったんだ。忍耐ではワシは負けん。

一時間後。

やりおる・・・。
なかなかの忍耐力だ。ただの若造とばかり思っていたが・・・認識を改めるべきだな。
だがしかしその程度でワシを越えれると思うなよ？

三時間後。

『若造ぉぉぉぉぉぉ！！！！！』
そこには元気いっぱいで蘇我を探す帝鬼の姿が！
『どこだぁぁぁぁ！！！勝負をしろぉぉぉ！！！！！』
どうやら忍耐勝負では負けを認めた様子。林の中を探しまわる帝鬼。
だが蘇我は見つからない。
『ぬ？あれは・・・』
そんな時、帝鬼は遠くに何かを見つけた。
その［何か］は木と木の間にぶら下がっており、時よりゆれている。

・・・ハンモックだ。

『若造ぉぉぉぉぉ！！！！！』
これは切れてもしょうがないと思う。そしてハンモックから身を起こして蘇我は帝鬼を見る。
『あ、帝鬼さん。おはようございます』
『ゴラァァァァァァァ！！！！！！』

怒り狂った帝鬼。全力で蘇我の方へと走る。
だが帝鬼がトップスピードになり、蘇我まであと少しと言う所で、帝鬼の体は首を支点に足は地から浮いた。
『ブッッグハァ！！』
首が飛ぶかと思うほどに糸がめり込む。
そう、木と木の間に・・・糸が張られていたのだ。
『よっしゃ作戦成功！！では離脱！！』
流石の鬼も、これにはダメージをおったようで、すぐには立ち上がらない。
だが気絶はしてないようだ。
試合はまだ続く。
帝鬼が倒れている間に蘇我はまた身を隠す。帝鬼は倒れながらも、一度罠にかかったおかげか冷静になった。もう罠にはかからない。
そう意気込んで蘇我を探す。
今度ははやく見つかった。蘇我の後姿だ。どうやらこちらには気づいていないらしい。
罠に気をつけつつ、近づいていく・・・。
そしてかなり近いところで声をかける。

『若造、かくれんぼはおしまいか？』

バッ！と驚いたように振り向く蘇我。
だが逃げようとするにはあまりにももう遅い。帝鬼の拳が・・・蘇我の腹を撃つ。
『ウグッ！！』
その一撃で、蘇我の体は飛び地面に強打される。
『ッはぁ・・はぁ・・・後ろから・・か・・・』
『若造、いい作戦だったぞ？そこは褒めてやろう』
『・・・惜しかったなぁ・・・流石鬼。一撃が重いね』
『ふん、これでも手加減はしているんだがのぅ・・・』

『それでも重い。持久走のあとの体くらい重い。持久走なんて無くなればいいのに』
『この状況でよく軽口が叩けるな・・・逆に感心するぞ』
ぐっと体に力を入れ、立ち上がる蘇我。
『僕は負けられない。仲間が応援してくれているし・・・何より、紳士は約束を破らないんだよ』
『だがもう若造、お前の勝ち目は無いんじゃないか？』
『勝ち目はあるよ・・・。準備はできた。でも、みんなにはこれは秘密にしておきたかったな』
『ほう・・・どうする気だ？』
『僕はハーフでね。半分は人間だけど・・・もう半分は悪魔なんだ。伯爵級のね。・・・普段は抑えてるこの悪魔の力を・・・開放するだけさ』
するとさっきまでの蘇我とは目つきが変わり、目に見えて［何かが起きる］と思わせるような雰囲気になっていく。帝鬼も多少はうろたえたが、構える。
『ハァァァァァァァ！！！！』
力を解放するようなしぐさをする蘇我。
だが特に見た目は変わらない。不思議に思った帝鬼が疑問に思っていると・・・
『うっ！！』
帝鬼の目に光が飛び込んできた。まぶしさに目を閉じ、ひるむ帝鬼。
そのまぶしさの原因は・・・
・・・蘇我の後ろに浮いている手鏡。
ひるんだ帝鬼をすかさずドンッと押す蘇我。
するとあとずさった帝鬼の後ろの足が地面を貫く・・・。
落とし穴だ。
そこまで深くは無いようだがそれでもこけそうにはなる。
『なぁ！！？』

片足をとられた帝鬼がバランスを取ろうともう片方の足を踏み込む。
『のわぁ！！』
だがその場所にはビー玉が置いてあり、若干の痛みとともに背中を強打するようなかたちで倒れる。
『うぐっ！！』
そして倒れた背中の、ちょうど背骨のあたりには拳ほどの石が置いてある。これは痛い。
『うぐ・・・な！ちょっと待て若造！！それは・・・』
最後に、帝鬼が見上げた先には・・・蘇我が立っていた。
・・・高級そうな壷をかかげて。
『帝鬼さん・・・ごめんハーフとか悪魔の力とか・・・アレ嘘。ハッタリ』
にやぁ、と笑う蘇我。
この顔を見ると半分悪魔だとしても信じてしまいそうだ。
『必殺！！！不可能の無い一撃（ナポレオンハンマー）！！！！！』

そしてかかげていた壷を全力で・・・帝鬼の頭に叩きつける！！！
『グガァ！！！』パリーン
壷が割れるほどの一撃を頭にくらい、動かなくなる帝鬼。
・・・気絶しているようだ。
『よっしゃぁぁぁ！！！勝った！！！紳士に不可能はねぇ！！！！！』
まさかの勝利。
なにはともあれこれで勝ち星二つ目。現在、霊能一行が優勢である。
はたして・・・次の試合はどうなるのだろうか・・・。

第十五話　霊能太郎と決着と

前回のあらすじ

暗黒超大魔王が水筒にハーブティーを入れてきていることを知ってしまった佐悟さんは漂うミントの香りになすすべもなかった！さらにふと冷静になった赤青さんは俺は何をしているんだろう…との言葉を残して帰ってしまった！
果たして超暗黒大魔王の目的は果たされてしまうのか！佐悟さんは紳士の夢を守れるのか！

まぁ嘘だけど。

『と、言うわけで勝ちました』
「信じてたぜ！」
『流石どすぇ』
『やるでござるな』
「良かったっですけど・・・」
『ん？ツキミ、何か変なことでもあったか？』
『蘇我君、アレどの辺が紳士的なの？』

第十五話　霊能太郎と決着と

ここはすでに控え室。先ほどの蘇我の戦いが勝利で終わり、わいわいムードになっている。
『甘いなくっちー、昔から言うだろう？』
『・・・なにをよ？』
『勝てばジェントル負ければ賊軍、と』
『言わないわよ！！』
今現在二対一で霊能チームが優勢である。次の試合を勝てばその時点で霊能たちの勝ちだ。
『次は誰が戦うんどすぇ？』
『そうでござるなぁ・・・次で勝てばそこで勝ちは決まるのでござるからして、霊能殿が出るのがいいのではないでござるか？』
もっともな提案だ。たしかに霊能が戦えばよっぽどのことが無ければ負けないだろう。
だが、この案には納得できない人物が一人いた。
『ちょちょちょちょちょっと待って！！私の出番は！！？』
くっちーである。
そう、次に霊能が出てしまうと必然的にくっちーの出番はなくなってしまうのだ。
『次私が出る！！霊能君は観戦してて！！』
（そして私を応援してて！私だって霊能君にいい所見せたい！！）
「えー。それじゃ俺の出番が無くなるじゃん」
『私だって出番が欲しいわよ！』
（そして霊能君に「流石くっちーかわいいぞ愛してる！」って言われたい！）
『まぁまぁ待つでござるよ。ここは平等にじゃんけんで勝負でござ

る』
「そのあたりが妥当っですよね、いいっですか？」
『分かったわ！！やるわよ霊能君！！』
「お・・おお・・・。ぶっちゃけ俺は別にどっちでもいいんだけどね」
片方はじゃんけんにやる気満々。もう片方は別に負けてもかまわないという状況でのじゃんけん。あきらかにくっちーが空回りしている気がしないでもない。

『「じゃーんけーん・・・ポン」！！！！！！！』

くっちーはパーを出す気で手を出し、ふとそこで霊能の手を見た。
その時、くっちーの目は確かに捕らえたのだ。
霊能の手がチョキへと移行しようとしているのを！！
だが・・・くっちーの指はすでに全ての指を開く動作に入ってしまっている・・・！！！
その時、くっちーの執念が・・・奇跡を起こした。

ベキベッキボキバギャバギャン！！！

本来ならありえない速さで、指を全てむりやり折りたたむ！！指がおかしな音を鳴らしているがもう気にしない！！想いはただ一つ・・・霊能にいい所を見せたい！！！

霊能、チョキ
くっちー、グー

・・・奇跡の勝利である。
こうして、くっちーは名誉の負傷（右手の指全部骨折）をしつつも、次の試合に出ることが決まった。

・・・果たして本当にこれで勝てるのだろうか・・・？

『え・・・えと・・・、僕！僕がいきます！』
そういって出てきた次の対戦相手だと思われる人物は、やけにおどおどしながら現れた。
見たところまだ若い・・・さっちんと同年代かどうかと言う男の子だ。
『えと・・坊や？私と戦えるの？』
『はい！大丈夫です！！』
元気に返事をする男の子。
それに対しくっちーは困惑している。
『流石に私・・・こんな小さな子に鎌を向けたくないんだけど・・・』
その言葉に闇魔が口を開く。
『ふん、見くびるなよ女。その妖怪、力小僧は幼いながらも我の部下だぞ？』
『そーです！僕だってやればできます！』
『・・・はぁ、分かったわ』
くっちーも妥協したところでステージ選びのくじが引かれる。
くじを引くのは・・・
「じゃんけん負けたし俺やりたい」
霊能だ。
『構わん、我が引くことを許そう』
「マジで？よっし・・・これだ！！［ボーナスステージ］！！」
霊能が引いたくじは・・・なんとボーナスステージ。
果たしてどんなものなのか。
『・・・ふん、ボーナスステージを引いたか。運のいいやつめ』
『え？ボーナスステージ？？何それ？どんなものなのよ』
『ふん、騒ぐな。見ていれば分かる』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

そして部屋の真ん中にイスとテーブルが出てくる。
『いや、見ても分からないのだけど』
『ふん、上を見てから口を開くんだな、女よ』
そういわれてふと、くっちーがイスとテーブルの上を見ると・・・
「闇魔亭！ドキドキ！！アームレスリング会場！！」
と書いてある旗が、これ見よがしに立っていた。
『えええ！！？ちょっと！！なんなのよこれ！！』
『ふん、無論・・・ボーナスステージだ』
『えええ・・・ああ、でもこれなら対戦相手の男の子を怪我させないで試合を終わらせられるわね・・・』
『文句があるのか？』
『いや、無いわ』
『わーい、うでずもうですー！』
『ま、流石にこんなに小さな子には負けないでしょ』
二人はイスに座る。
ルールは簡単。腕相撲だ。相手の手の甲をテーブルにつければそれで勝ち。そうしてくっちーが右手を構えようとして・・・気づく。

（私の指ボッキボキじゃないのぉぉぉ！！！）

そう、先ほどの名誉の負傷。奇跡の勝利の代償である。
（何がドキドキ！アームレスリング大会よ！！ボキボキの間違いでしょ！！？）
（不味い、不味いわ。この右手じゃ私の霊能君フラグもボッキボキ、私の幻想もブレイクしてしまうわ！！）
（どうする私・・・まだ左手のほうが見込みがあるの・・？）
『あ、僕実は左利きなんですよ～、でも今回はルールなので右手で

やりますね～』
（あああああ！！右でやるしかないいいいぃ！！！大丈夫、自分を信じなくてもいい、霊能君を信じるのよ。私を信じてくれる霊能君を信じるのよ！！）
「くっちー！無理しなくていいぞー！」
（霊能君！！？私のやる気を削がないでぇぇぇ！！！）
［それでは右手を構えてください］

（アナウンスが・・・、仕方ない。右手で・・・）

ガシッ！！
メキッ！！

『痛たたたた！！　！！やっぱり出来ないわよぉぉぉぉ！！！』

――――くっちー。第四試合、敗退。

『うううぅ・・・ごめんなさい・・・』
『気にしないでいいどすぇ・・・』
『ああ、気にすんな。ボーナスステージじゃなければ勝ってたよ。運が悪かっただけだって』
「そうっですよ！別にくっちーさんが負けても次は・・・」
『霊能殿でござるからな。心配ないでござるよ。・・・それともくっちー殿は霊能殿を信じられないと？』
『そんな訳ないじゃない！！世界で一番信じてるわよ！！』
『なら大丈夫でござるよ。安心して次の試合を観戦するでござるよ』

「やっと俺の番か」
『ふん、なかなか貴様らもやるではないか。久々に上質な娯楽であった。・・・だがそれももう終わりだ』
「よし、俺の相手は誰だ??」
『ふん、部下には任せられないのでな・・・我が直々に相手をしてやろう・・・・光栄に思うが良いッ!!!』

第五回戦、最終試合　霊能ＶＳ闇魔

「場所は?」
『なに、最後の試合なのだ。何一つ邪魔の無いほうが良かろう。この部屋のままだ』
「分かった!じゃ、やるか。確認だが・・・これで俺が勝ったら頼みを聞いてくれるんだったよな?」
『ふん、その通りだ。いくつでも聞いてやろう。だが我に勝てるなど夢を見るのはいささか無理があるぞ』
「無理か?意外と勝てそうだけど」
『無理だ。我は力だけでこの地位にまで上り詰めた男。我を倒す・・・それすなわち地獄を倒すも同義!!ただの人間なんぞに地獄が負けるわけが無かろうッ!!!』
「あいにく、俺も負けられないんだよ。なんたって友達が俺のために地獄までついてきてくれたんだからな!!」
『ふん、だからなんだ。その程度の事が我に勝てるという事につながるとでも?』
「何言ってんだお前?友達が!俺のために!!来てくれたんだぞ!?分かるか!?俺の!!俺の友達が!!俺のために来てくれたんだ!!・・・負けれるわけ無いだろうがっ!!」
『・・・そんなに友達とやらがお前を追ってきたのがうれしいのか?』

「うんめっちゃうれしい。幸せ」
『・・・ふん・・そうか。では・・・始めるか・・・』
場に緊張が走る―――
いつ戦いが始まってもおかしくない緊張感の中・・・
『むむむ・・・これを捨てるどすぇ』
『甘いなさっちん!!ここで僕が・・・八切り!!そして・・・革命だ!!!』
「あ、一転してあたしがピンチになってしまったっです!!」
『だが残念、革命返しでござるよ』
観客席ではトランプをしていた。
『ってなんでよ!!!あなたたち!!試合を見なさいよ!!』
『えー・・・どうせ霊能が勝つし・・・』
『そうどすぇ。これは信頼の証なんどすぇ。あ、パスどす』
『信頼の証って・・・あんたらねぇ・・・せめて応援くらいしなさい。霊能君すねちゃうから』
『霊能ぉー頑張れよー。七渡しで・・・これな』
「霊能さん!がんばるっですよ!!!・・・うぇ、四なんかいらないっですよ・・・」
『霊能殿!!信じてるでござるよ!!よっ、これで縛りでござる』
『霊能はーん!!!まっけるなーどすぇー!!・・・あ、パスどす』
『あんたらせめてトランプは止めなさいよ!!!』

一方こちらは霊能と闇魔。
向かい合う二人。
闇魔は自分の前に立つ男に・・・同情的な視線を送っていた。
『・・・友達とやらはあれでいいのか?』
「来てくれているだけで満足だ」
『そうか・・・ならばもう何も言わんよ・・・』
改めて構え、相手の出方を伺う二人・・・
先に動いたのは―――

――――閻魔だった。
『ふんっ！！』
まずは小手調べとばかりに霊能の腹を蹴る。
「俺の腹筋をなめるなぁ！！」
だがどうやらまったく効いていないようだ。そしてすぐさま閻魔は霊能の背中に回り、殴る。
「俺の腹筋をなめるなぁ！！」
だがどうやらまったく効いていないようだ。閻魔は霊能の首に手刀を当てる。
「俺の腹筋をなめるなぁ！！」
だがどうやらまったく効いていないようだ。
『貴様本当に人間か！！？』
「俺の腹筋をなめるなぁ！！」
『っく！何者だ貴様は！！』
「俺か？俺は霊能太郎。一般人だ」
『長いこと地獄に引きこもっていたから知らなかったが・・・今の一般人はここまでやりおるのか・・・ッ』
盛大な勘違いです。
『謝罪しよう、我は貴様を甘く見ておった。・・・贖罪として、全力で挑もうではないか』
「おう、・・・かかってこいや」
中指を立て、指をクイクイと動かす霊能。
『ハァァ！！』
「っぐ！！」
閻魔の全力での拳。それを霊能は腕でガードする。
『セイッ！！セイセイセイセイッセイ！！！』
「わっ！！ったたったたた！！」
閻魔の怒涛のラッシュは止まらない。だがそれをすべて腕で守りきる霊能。
そしていったんラッシュが止まる・・・。

「っく～・・・ジンジンするぜ・・・・・」
『ッ貴様、・・・地獄で就職せぬか？』
「あいにくだけど止めとくよ。まだ高校生だからな！」
『ふん、そうか・・・まぁよいわ、いくぞ！！』
「いや、俺から行くぜ！おりゃ！」
霊能が闇魔の横腹を殴る。
『ッグ！！あ、甘いわぁ！！』
それを耐え切る闇魔、そこからカウンター気味に攻撃をしかける！！
「がッ！！・・・っち！絶対たんこぶできた！！」
『たんこぶで済む貴様が異常なのだよ！』
「それにしても・・・手加減したとはいえ俺の攻撃けっこう深く入ったと思ったんだけどなぁ・・・」
『我はこれでも闇魔だ。それしきのことでは倒れられんわッ！！・・・手加減など我を侮辱する気か！！』
「そっか、ごめんな闇魔。・・・次の一撃、本気の全力全開でやるから・・・死ぬなよ？」
『ふん・・・我を誰だと思っておる・・・我こそは闇魔！地獄の頂点であるぞ！！！！』
いったんすばやく霊能が距離をとる。
そして一瞬。
本当に目にも止まらない速さ・・・いや、目にも映らない速さで一気に距離を詰めるっ！！
そして跳躍し――――拳を闇魔の額の前へと出す。

「奥義［全力全壊デコピン］！！」

ッッッッダン！！！！！！！！

およそデコピンとは思えない音が、その場所に響いた。
そしてその場所に立っているのはただ一人・・・霊能だけだった。

「この勝負・・・俺たちの勝ちだな！！」

この場所この時この瞬間に・・・地獄での戦いは全て終わった――――

二日後。

霊能たちはなかなか目をさまさない閻魔が起きるのを待つため、閻魔亭に泊まっていた。

今日、ようやく閻魔が起きたとの事で、一同閻魔の部屋に集まっているのだ。

『さて、我に頼みとはなんなのだ？』

「いくつでもいいんだったよな？」

『ふん、我に二言は無い』

「そっか、・・・じゃあ、俺と友達になってくれ！！」

『・・・正気か？』

『ああー・・・、閻魔さん。霊能は正気ですよ。そういうやつです』

「ああ、本気だ！」

『まぁいいだろう。貴様・・・いや、霊能。他には無いのか？』

「ああ、あとは俺たちを現世に帰してくれ」

『ふん・・・仕方が無い、友の頼みだ・・・断れぬな。ついてこい』

そうして霊能一行は閻魔につれられて、閻魔亭の奥にある扉の中へと入っていった。

それは黄泉の扉と呼ばれるもので、現世と地獄をつないでいるそうだ。

「じゃあな！閻魔！！また会おうぜ！！」

『いろいろあったけど楽しかったどすぇー』

『ああ、閻魔さん！じゃーねー』

『ではさらばでござるよ』

「またきた時はよろしくっです！」

『ではごきげんよう、閻魔君』

『ふん・・・・・・・・さらばだ』
こうして無事に現世に復活を果たした霊能たち。たしかにいろいろあったが、それ以上にたくさんの出会いがあった。地獄に行ったことは、霊能たちにとってきっと損にはならないであろう。とりあえず今は・・・闇鍋を片付けなくてはいけない。
『あぁぁー!!鍋の液体が固体になってるどすぇぇ!!』
『な!地獄と現世の時間の流れは違うでござるゆえに、まだ現世では全然時間がたっていないはずでござるのに・・・!!』
「あ、でも蘇我さんなら食べれるんじゃないっですか?」
『何無茶振りしてんの!!?』

『・・・平和ねぇ』

第十六話　霊能太郎と潜入捜査

「よし・・・みんな集まったな」

あの地獄での戦いからすでに三日たった。

『ああ・・・準備は万端だ・・・』

『場所も時刻も完璧どすぇ・・・』

「誰にも見破られる心配もないっですよ・・・」

彼らはとある建物の近くにいた。

正確には・・・［目的の建物］の近くに潜んでいると言ったほうがいいのかもしれない。

「今回のバスターズの任務は・・・潜入捜査だ」

第十六話　霊能太郎と潜入捜査

一方こちらはくっちー視点。

『いらっしゃいませー・・・』

私は今コンビニのレジの内側に立ち、客に対していらしゃいませと言いながらもレジの会計をしているわ。

そう、私のバイト先よ。

生活費とか携帯代とかその他いろいろのためにもコンビニでバイトをしているの。

『相変わらず目が死んでるわね。もういっそ死になさい』
『・・・店長も相変わらず酷いですよね』
今私に声をかけたのはここのコンビニの店長。
店長がどんな人なのかを説明すると・・・そうね、私が妖怪だと知っても雇ってくれて、さりげなく気遣いなんかもしてくれるけど・・・言動は氷のように冷たく、口は凄まじく悪いわ。しかもその言動はツンデレとかじゃなくて、素で言っているから初対面の人ではなかなか慣れることができないんじゃないかしら・・・。
以前、私が『なんでそんなに冷たいんですか？』って聞いたら当たり前のように、『雪女だからよ』って返してきたわ。正直納得。
『何その目、仕事をしなさい仕事を。使えないわね』
『冷たすぎますよ店長ぉ・・・』
雪女という種族は、昔話にもあるように人と添い遂げることもある種族だ。つまり、人と混ざっていればまず雪女だとはばれないのである。そんな店長だから堂々とコンビニの店長をやってられるのだろう。

ウィーン

あ、客が来た。
『いらっしゃいませー』
ふぅ、とりあえず棚の整理とかはすでに終わったから、今の私の仕事はレジ打ち。誰かレジに来るまで意外と暇なので、よく客を見て暇を潰している。
ああ・・・今日も何事も無く一日のバイトが終わりそうで良かった・・・。

ウィーン
あ、また客が来た。
『いらっしゃ！！？いませぇー・・・』

金髪カチューシャにグラサン、そんな格好の女の子が入店・・・
ってあなた絶対ツキミちゃんでしょぉぉぉ！！！え！？何？？私のバイト先話したっけ？ていうかその格好は何？？

「ふふふ・・・ばれてないっです・・・」クイックイッ

ばれてるわよぉぉぉ！！それ変装にはなってないから！！グラサンかけただけで誤魔化せることなんてまず無いから！！あとグラサンクイクイさせ過ぎぃぃぃぃぃぃ！！！

あ、店の食品のコーナーへ行った・・・何買うんだろう・・・？

「あ、あったっです」クイックイッ

・・・あ、来た。

・・・・ちくわ持って。

『・・・ツキミちゃん？何やってるの？』

「はわわっ！！？違いまっす！！あたしはツキミって子じゃないっです！！ただゴン兄へのお土産を買おうとしただけで！！！」クイックイックイックイ

慌ててるわねぇ・・・グラサンクイクイさせ過ぎよ・・・・

『いや・・・誤魔化せないからね？どうしたの？』

「ああ・・・ばれてしまっては仕方が無いっです・・・ではさらばっです！！」

あ、走って逃げてった・・・。

バンッ！！

あ、自動ドアにぶつかった・・・、涙目ね。

なんだったのかしら・・・？まぁ・・・いいか。また今度聞いてみるとして、とりあえず今は仕事よ仕事。

ウィーン

あ、客だ。

『いらっしゃいブフゥ！！！』

『・・・！！』ビクッ！！！

もうね、見た目が派手。

真っ赤。

そんな真っ赤なゴスロリ服を着た髪が長い少女が入店・・・いつもの着物はどうしたのかしら・・・

『・・・意外とばれないもんなんどすねぇ・・・佐悟はんの言ったとおりどすぇ・・・』

いやばれてるからぁぁぁぁぁ！！！さっちんちゃん！！絶対さっちんちゃんでしょ！！

ていうかそれは変装のつもりだったの！？イメチェンかと思ったわよ！！

・・・さっちんちゃんがお菓子売り場に・・・駄菓子をいっぱいかごにいれたわね。

あ、レジに来た。

『・・・３００円です』

『ぴったりどすぇ～』

『・・・さっちんちゃんその格好何？』

『どすぇ！！？え・・・いや・・・私はさっちんなんて知らないどす・・・です・・・人違いど・・です！』

必死に語尾隠してるぅーーー！！あたふたしてるわねぇ・・・

『・・・どうしたのさっちんちゃん？罰ゲーム？』

『そ・・そんなにこの格好は変どすか！？・・・うう・・・佐悟はんにだまされたどすぇーーー！！！』

あ、走って逃げてった。なんなのかしら？二人して変装まがいのことをして・・・私のバイト先を見学しにきたの？なんかこの流れで他の人も来そうね・・・

『口裂け、仕事しないなら死になさい』

『店長！！？・・・すいません。あ、あと口裂けって呼ぶのは勘弁してほしいなぁって・・・』

『うるさいわねメス豚』

『はぁ・・・もう口裂けでいいです・・・』

はぁ・・・仕事しよう。

ウィーン

あ、今度はどんな客が・・・

『いら・・・っしゃい・・ませぇ・・・・』

ダンボール、入店。

『こちら蘇我、無事目的の建物に潜入した』

蘇我君ーーーーっ！！何やってるの！？ひとりでにダンボールがずりずりと動いてるなんで奇妙以外の何事でもないわよ！！？

『ふ・・・これはかの潜入のプロが好んで使っていた迷彩兵器、ばれる事なんてまずないよ・・・』

モロバレよ！！！なめとんのかぁぁぁ！！！せめて動くな！！大佐！！応答願います！！アホが潜入してきました！！大佐ぁぁぁ！！！

『ダンボールごと潰しなさい』

店長ぉぉぉ！！！たしかにアホだけど！！イライラする理由は分かりますけど！！

あ、すばやく商品をもってこっちに来た・・・
・・・せめてレジのときくらいダンボール取ろうよ・・・。
『蘇我君・・・何してるの・・・？』

『・・・』

ここで沈黙を貫くなぁぁぁぁ！！！もうばれてるから！！手遅れだから！！
『えっと・・蘇我く』『邪魔』メキャ！！
店長ぉぉぉぉぉぉ！！！蘇我君が踏まれたぁぁぁぁ！！！
大丈夫なの！？ダンボールつぶれてるけど大丈夫なの！！？
あ、ずりずりとひきずりながら出て行った・・・
・・・・忘れよう。
ふぅ・・・なんかもう今日は疲れたわぁ・・・もうバイト終えて帰りたい・・・

ウィーン

あ・・・客か・・・
『いらっしゃいませ・・？』
直後に起きる強烈な風。
ふとドアを見るが誰も居ない。誰も居ないはずなのに・・・店内には凄まじい風が起こっていた。
・・・なんなのかしら？
良く見ると・・・［ものすごく速い何か］が店内にいるのが分かるわね・・・
あ、店長が足を出した。
ガッ！！ドンガラガッシャン！！！

それと同時に［何か］が棚に突っ込む。
「いててて・・・・」
・・・霊能君。・・・・・・何やってるの？
『駄客、何をしているのかしら？』
「いやぁ・・・つまづいちゃって・・・」
ああ、あのすばやい何かは霊能君だったのね。で、走ってたら店長の足にひっかかった、と・・・。何がしたかったのかしら？
「あぁぁー・・・、くっちーにばれた・・・・」
『霊能君、何がしたかったの？』
『潜入捜査どすぇ！』
「みんなばれてしまいましたっですけどね・・・」
『僕の工学迷彩がばれるとはね・・・』
あ、みんな出てきた。
「目に見えない速さなら文字通り見えないんだからばれないと思ったんだけどなぁ・・・」
・・・話を聞いてみると、つまり霊能君たちは・・・いかに私にばれないように買い物を成功させるかを競い合っていた訳だ・・・。
・・・全員モロバレだったけど・・・。
『あなたたちねぇ・・・』
「ごめんなくっちー、でも楽しかったぜ！」
『あんな服もう着ないどすぇ・・・』
『ま、みんなばれてたからこの勝負優勝者は無しだね』
「くやしいっですねぇ・・・じゃ、あたしたちは帰るっです。くっちーさん、またね！」
『ったくぅ・・・もう私の仕事の邪魔をしにきちゃだめよ？』
・・・でも・・・まぁ、退屈なバイトの時間が・・・少し楽しい時間になったから・・・こんな日があってもいいかもね。
『じゃ、またね。みんな』『待ちなさいゴミカスども。死をもって償いなさい』

「『『『「へ？」』』』」
――――このとき、私は後ろを振り向いたことを後悔した。
雪女の殺気は・・・絶対零度なんてものじゃなかった――――
『店長・・？一応お客様なんだし帰らせても・・・』
『じゃあ口裂け一人でこの惨状をかたづけるの？それでもいいわよ？』
忘れていた。霊能君が突っ込んだおかげで棚はぐっちゃぐちゃになっていた。それどころか無駄に速く霊能君が走ったせいで起きた風により、店内は酷い有様だった。
『・・・みんな、帰れるとは思わないでね』
「・・・お・・おぉ・・・」
その後、店内の片付けやついでにと命令された店内の模様替えなどが終わった頃にはすでに夜中になっていた。
『とりあえずの償いはこれでいいわゴミども。さぁとっとと帰りなさい』
そしてさらに店長はこれを好機と見たのか、たまに店を無償で手伝うことを条件にみんなを家に帰すことにした。・・・霊能君といっしょに働けるチャンスができたのは店長が私に気を利かせてくれたのかもしれない。まぁ全くそんなことを微塵も考えてないかもしれないが。
だいたいそんな感じで今日のバイトは終わった。
・・・あ、でもそういえば・・・
『ねぇみんな、今回のこの騒ぎに小次郎君は参加してないの？』
『拙者でござるか？』
『うわ！！小次郎いたのか！！？』
『気づかなかったどすぇ・・・』
『拙者はずっとここで立ち読みをしていたでござるよ』
「気づかなかったっです・・・・」
「ああ、・・・優勝はお前だよ・・・」

『何か分からんでござるが・・・？優勝はありがたく頂戴するでござるよ』

第十七話　霊能太郎と止まらないしゃっくり

『大変だぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』
霊能家に大きな蘇我の喚き声が響く。
『大変大変大変大変大変！！！』
パニックになり部屋を走り回っている。
『たいへんたいへんたいへんたいへんたい！！』
そして座っている霊能の前まで来て・・・
『変態なんだ！！！』
「変態はお前だ」

第十七話　霊能太郎と止まらないしゃっくり

「・・・で、どうしたんだ？慌てて」
『聞いてくれ霊能！さっちんが死んでしまう！！』
「落ち着け、何で死にそうなんだ？教えてくれ、さっちん」
『それについては私がヒック、説明するどすヒック』
『さっちんのしゃっくりが止まらないんだよ！！』
『説明したかったどすぇ・・・ヒック』
「・・・しゃっくりで死ぬことなんてあるのか？」
『知らないのか霊能、しゃっくりを百回すると死んじゃうんだぞ！！』
『蘇我はん・・・ヒック、心配してくれるのはうれしいんどすけど・・・ヒック、普通死なないどすぇ・・・』
『普通じゃなかったらどうするんだ！！』

「蘇我お前心配しすぎじゃないか・・・？」
心配しすぎと言うか・・・空回りしすぎている気も否めない。
『心配しすぎて困る事なんて無いのさ！・・・で、なんとかしゃっくりを止めてあげたいんだがどうしよう？』
「・・・そこは丸投げなんだな」
『私もできるならヒック止めたいどすぇ・・・』
「そうだな・・・さっちん、俺の目を見てくれ」
『へ？・・・ヒックいいどすけど・・・』
そういって顔を突き出す霊能。さっちんも言うことを聞いて霊能の目をじっと見る。
だがその直後・・・

「わっ！！！！」

『どすどすどすぇ！！！！？？？・・・ヒック』
「驚かしても止まらないか・・・」
『そうなんだよ。僕もさっき驚かしてみたんだけどね・・・』
『蘇我はんのは心臓に悪いどすぇ！！ヒックあんなのはもう二度としないって約束してヒック欲しいどすぇ！！！』
「蘇我、何したんだ？」
さっちんがここまで嫌がるのだ。そうとうのことをしたのだろう。
『いや・・・ただちょっと首から下だけ霊体化しただけなんだけどね・・・』
つまりは生首が浮いている状態にしたということだ。
それは驚くのも無理は無い気がする。と、言うか普通に怖い。
「そんなことできるんだな」
『まぁね、でももう二度としないよ？紳士の約束だからね』
『ヒック、ともかくなんとか止めて欲しいんどすぇ・・・ひっく』
「任せろ、・・・くっちーならなにか知ってるだろう」
『あ、そこは丸投げなんだね・・・』

『で、私のところに来たのね？・・・まだバイト中なんだけど』
そう、ここはくっちーのバイトしているコンビニである。
『事態は刻一刻を争うんだよ、さっちんがしゃっくりのし過ぎで死んじゃったらどうするんだ！？』
『そんなので死なないと思うわ』
『ああ・・・かわいそうなさっちん。きっと死ぬ直前に・・・くっちーはんは私よりバイトをとったんどすぇ・・・蘇我はん大好きどす・・・と言いながら死んでしまうんだ』
『絶対言わないから心配しなくていいと思うわ』
かなり都合のいい妄想である。
「バイトを邪魔するのは悪いと思うが・・・なにか治す方法をしらないか？」
『そうどすぇ・・・ヒック、何か治す方法はないどすか？・・・ヒック』
それを聞きう～んと軽く悩むくっちー。霊能の頼みでもあるしさっちんのためでもあるのでできれば答えてあげたいのである。
『水を飲むといいって聞いたことがあるわよ？飲んでみたら？』
『よしさっちん、このミネラルウォーター、通称クリスタルガイ』
蘇我君？まだそれ会計済ませてないよね？』すいませんでした』
「・・・慌てすぎだろ蘇我・・・ん、くっちーこれで足りるか？」
『大丈夫よ。はい、おつり。じゃあさっちんちゃん、どうぞ～』
『ゴクゴクゴクゴク・・・・・・・・あ、治ったどヒックぇ・・・』
『駄目か・・・』
どうやらこれでも治らないようだ。
『う～ん・・・どうしようかしらねぇ・・・』
と、そこにいつものように冷たい声がかかる。
『アラ何をしているの？駄客ども』

このコンビニの店長で、種族は雪女である。
非常に毒舌だが、別に馬鹿にしている訳ではない。ただ素で言っているだけなのだ。
『しゃっくりが止まらないんヒックどすぅ・・・』
『しゃっくりが？・・・そうね、一生息を止めてごらんなさいな』
『一生は無理どすけど・・・息を止めるのはいいかもヒックしれないどすぅ・・・』
そう言って息を止めるさっちん。
だが声には出ないがしゃっくりはしているようだ。
・・・二十秒ほどで我慢の限界が来て、息を止めるのをやめる。
ついでに、何故か一緒に息を止めていた蘇我も息を吸い始める。
『ぷはぁ！・・・ヒック、治らないどすぅ・・・』
『駄目ね、気合が足りないわ。治す気があるの？』
「まぁまぁさっちんも頑張ったんだし・・・、でもこれでも治らないか・・・」
『まぁ待って霊能君・・・いい事を思いついたわ』
「おっ？何かいい方法があるのか？」
『ツキミちゃんなら何とかなるかもしれないわ』
『・・・そこは丸投げなのね。使えない子』

「・・・で、どうしたんっですか？」
ここはツキミの家・・・というか寺。
今ツキミはここの寺にゴンザレスともども世話になっているのである。
・・・ゴンザレスとツキミは二人暮らしだったのだが、ゴンザレスが出家したときにツキミが一人になってしまうのでここの和尚が「可愛い子なら大歓迎やで！」とここに住むことに許可したのである。

『しゃっくりを止める方法を教えて欲しいんどすぇ・・・ヒック』
「しゃっくりかー・・・さっちんさん、豆腐の原料は何か分かるっですか？」
唐突に関連性があるかどうか分からないような質問をするツキミ。
『どすぇ？・・・えと・・・大豆どすぇ』
「どう？治っ『ヒック』・・・てないよねやっぱり」
『ツキミ、今の質問に何か意味があったの？』
「いやぁ・・・この質問をするとしゃっくりが止まるって聞いたことがあったんっですよ。・・・無意味でしたが」
「まぁそんなので治ったら今までの苦労はなんだったんだって話だよな」
まったくもってその通りである。
『うぅぅ・・・ヒック、なかなか治らないどすぇ・・・』
「そうだ、ゴンザレスはいないのか？」
「ゴン兄っですか？・・・今この寺にはあたししかいないっですよ」
「そうか・・・あいつなら治せそうな気がしたんだけどな」
だがいないものはしかたがない。気を取り直して何か他の方法を探そうとする霊能。
そんな時、目の前でやたらとツキミが慌てだした。
「あ！！もうこんな時間っです！！！まずいっですよ！！」
『なんだ？どうしたんだ？』
「ああ～・・・もしかして・・・」
「そう！もう始まっちゃうんっですよ急がないと！！」
『・・・ヒック、あ！もうそんな時間どすか！？』
『・・・さっぱり分からないんだが霊能分かるのか？』
「アニメだよアニメ。昔っからツキミが大好きなアニメがあってだな・・・」
「さっちんさんも見ていくっですか！？一緒に見ましょうっです！！」
『ヒック、見るどすぇ！！』

そう言って慌てて走っていく二人。おそらくテレビのある部屋に行くのだろう。霊能と蘇我はとりあえず二人についていくことにした。

[魔法少女タミフルたみ子！始まるよ！！]
「始まったっですよ！！」
『間に合ったどすぇ！！ヒック』

[タミフル～♪タミフル～たみ子タミフル～♪]
『たみふる～ヒックたみふる～』
「タミフルタミフルタ～ミフル♪」

[狂え～♪二階の窓から飛っび降り～ろ～♪]
「『イエー！』」

『・・・何これ？』
「・・・オープニングで困惑してたら本編なんて見れないぜ？」

[フハハハハ！今日こそ世界中をなんかこう・・・こうしてやるのだ！！]
[出たな！怪人いんぶるぁぁぁあえんざ！！たみ子があなたを・・・なんか・・・てやっ！てやってやるわ！！]

『なんか怪人出てきたね・・・でも言ってることが要領を得ないんだけど』
「ツキミ曰くそのもやっとした感じが人気の秘訣らしいぞ」

[タミフルパワー！メーイクアーップ！！]
[説明しよう！たみ子はタミフル入りのカプセルを食後に飲むと魔

法少女タミフルたみ子に変身できる確立が上がればいいなぁ！」

『説明できてない！？』

「・・・ただの願望だったな」

［グワァァァァァァ！！！ガッ！ってきた！！なんかガッてきたぁぁぁ！！」

［どう？たみ子の超絶デストロイこむら返りの味は！！」

『技名かっこ・・・良くないな。なんだよこむら返りって』

「ん、そろそろ敵を倒す直前の決め台詞だぞ」

［おのれたみ子・・・またしても我らのふくらはぎを・・・！！」

［・・・病気の熱は下げれても・・・たみ子の情熱は下げられない！！・・・・たみ子です」

［ちくしょう！お、覚えていてくれたらうれしかったりなんかしてーっ！！！」

『・・・何？たみ子毎回敵のふくらはぎ狙ってんの？集中的に？』

「決め台詞はともかく、それの後の名乗りがなんか笑点の大喜利の前の自己紹介みたいだな」

『敵は逃げるときも要領を得ない捨て台詞を残すんだね・・・』

［次回！鋼鉄のふくらはぎを持つ男！・・・見ないと脳みそ狂わしちゃうゾ♪」

「ああ・・・今回のたみ子もかっこよかったっです・・・」

『面白かったどすぇ～・・・』

『次回予告がなんか怖いんだけど』

「・・・次回の敵倒せるのかな？」

『あ、霊能もそっち側なんだ』
「いやそういう訳ではないんだけどな」
「やっぱり最高っですよたみ子さんは～、てい！超絶デストロイこむら返り～」
『ちょ！やめるどすぇ～こしょぐったいどすぇ～！』
「・・・あれ？さっちんしゃっくり治ってるんじゃない？」
『どすぇ？』
・・・そう、いつのまにやらさっちんのしゃっくりが止まっているのだ。３０分真剣にアニメを見ていたおかげだろうか？
『おお！うれしいどヒックえぇ・・・・』
「・・・ぶり返したっですね」
「残念だな、さて結局しゃっくりどうしようかねぇ」
『そうだね・・・ここは・・・もうアレしかないかな』
『何か方法があるんどすぇ？ヒック』
『・・・あの人なら何とかできるかもしれない』
「あ、そこは丸投げなんっですね」

第十八話　霊能太郎と紳士同盟

前回のあらすじ！！

タミフル～♪

あらすじ終わり！

霊能たちは蘇我の案内で見覚えのある森に来ていた。

蘇我曰く

『あの人なら・・・しゃっくりの治療方法を知ってるかもしれない』

だそうだ。

そんな感じで森の奥へと入っていく・・・すると前に来たことのある沼が見えた。

「・・・なんかもう誰が出てくるか読めたわ」

第十八話　霊能太郎と紳士同盟

『あ、ばれた？じゃぁ呼ぶよ。・・・ｍｙブラザー！！』

すると目の前の沼から・・・

・・・・誰も出てこない。

『ヒック、・・・留守どすぇ？』

『話は聞かせて貰ったよ！！！』シュタ！

『どすぇ！！？ヒック！』
と、思ったら上から降ってきた。さっちんはかなり驚いたようだ。
「うお・・なんで上から？」
『ふむ・・・驚かせればしゃっくりが止まるかと思ったのだがな・・・失敗だったか。なに、ただ君たちが来るまで木の上でスタンバイしていただけのことさ』
「待っている佐悟さんの姿を想像すると悲しくなるな」
『・・・なんで私がしゃっくりを相談しようとしていたことをヒック知っていたんどすぇ？』
『紳士だからね』
『納得の理由だね』
『いやいやいやいや納得できないどすぇ！！ヒック』
流石紳士である。
紳士に不可能は無いのかもしれない。
『さて、しゃっくりを止める方法か・・・無いこともないが・・・』
『どすぇ？ヒック教えてほしいどすぇ』
『ｍｙブラザー、僕からもお願いするよ』
『何、簡単だ。きゅうりを食べるといい』
「きゅうり？そんな方法もあるんだな」
するとどこからかきゅうりを取り出す佐悟。なかなか高級そうなきゅうりだ。流石カッパである。
『いただきますどすぇ・・・ヒック』
『さっちん君、噛まずに食べないと効果が無いのだよ』
『噛まずにどすぇ・・？』
そう言われてさっちんがきゅうりを噛まずに口に入れようとした瞬間・・・
『ちょいやさぁぁぁ！！！』
きゅうりが空を舞った。
原因は簡単、蘇我がはたいたのだ。
『ｍｙブラザー、どうかしたのかね！？』

『・・・駄目だよｍｙブラザー・・・それはいけないよ・・・』シュコォォォ
蘇我の呼吸が荒い。いつだったかを思い出すような光景だ。
「おいおい・・・どうしたんだ蘇我・・・」
『いったいどうしたというのかね？』
『ふふふ・・・しらばっくれてはいけないよｍｙブラザー・・・きゅうりを噛まずにだぁ？・・・そんな卑猥な行い！この紳士蘇我が許さないよ！！　ｍｙブラザー！！』
『な・・流石だよｍｙブラザー・・・見抜かれるとは思っていなかったよ・・・』
『ど・・・どういう事どすぇ？ヒック』
『まさか紳士同盟を組んだ貴方がさっちんに手を出すなんて・・・信じていたのにね・・・』
『・・・出来心だったんだ・・・私はただ！さっちん君がきゅうりを噛まずにほおばっている所が見たかっただけなんだぁぁぁ！！！』
『紳士としてさっちんに辱めを受けさせようとした行い！罰を与えねば気がすまない！！！！』
『・・・ッ！済まなかった・・・本当に済まなかった・・・ッ！！』
「アレ？でも蘇我も闇鍋の時さっちんに変なもの食わせようとしてたよな？」
『前言撤回！やっぱり無罪だよｍｙブラザー！！』
『蘇我はん・・・なんでそんな変わり身早いんどすぇ・・ヒック』
紳士に不可能は無いのである。
「で、実際なにかシャックリを止める方法はないのか？」
『ふむ・・・私に出来ることは無いな・・・だが心当たりはある。ついてきてくれ』
『・・・どこに行くんどすぇ？』
『・・・何、わがままなご近所さんのところさ』

佐悟について来てさらに森の奥へと入っていく。するとそこにはとてもキレイな池が広がっていた。
「で、どうするんだ？」
『まずはこの池に住んでいるご近所さんを呼び出さなくてはいけないのだが・・・ふむ、どうするかな』
『呼べばいいんじゃないのかｍｙブラザー？』
『普通に呼んでも出てきてはくれないのだよ。わがままだからね。・・・何か物を投げ入れると出てきてくれるんだが・・・何か持って無いかい？』
「あ、俺鉄の斧ならもってるぜ」
『霊能・・・、なんで持ってるんだよそんなもの・・・そしてどこから取り出したんだお前は・・・』
「最悪これでさっちんの顔の前すん止めすればショックでしゃっくりも止まるかな・・・と」
『ひぃ！！ヒック！禁止！禁止どすぇ！！速やかに捨てるどすぇ！！！』
『ちょうどいい、ならばそれでいいだろう。霊能君、それを池に投げ入れてくれないか？』
「え？あ、うん。いいけど」
ぼちゃん。
霊能が投げた無骨な斧が池に沈んでいく。すると女が一人、池から浮かび上がるように出てきた。そして、霊能たちに問う。
『お前が落としたのはこの金の斧か？それとも銀の斧か？』
「おう！鉄の斧だ！！」
『正直でよろしい。・・・鉄の斧が私に刺さっていなければね』
めっちゃ怒っていらっしゃるようです。肩に刺さった斧の位置からだくだくと血が流れ出ている。
「おう！その鉄の斧だ！友達になってくれ！」

『正直すぎるのもどうかと思うわよ？・・・佐悟、あなたの差し金ね？』
『差し金などという無粋なものでは無いよ。そうだな・・インターホンのようなものではないか』
『どこの世界に人を呼び出すのに斧を突き刺すやつがいるのよ』
『無論、ここに』
『正直過ぎて殺したいわ』
どうやらそれなりに面識はあるらしい。ご近所付き合いをしているのも嘘ではない様だ。
『えぇと・・・ヒック、私はさだこどすぇ～』
「俺は霊能太郎だ！」
『僕は蘇我入鹿だよ。いや・・・ｔｈｅ・紳士と言ったほうが・・？』
『わたくしはこの池の女神よ。で、・・・何の用事かしら？』
『ヒック、私のしゃっくりを治す方法を知らないか聞きにきたんどすぇヒック』
『・・・嘘ではないようね。わたくしは嘘を見抜くことができます。ゆえに嘘吐きと佐悟は嫌いです』
『おやおや、私も随分と嫌われたようだね。理由を聞かせてもらっても？』
『出会いがしらに紳士パワーとやらで下着の色を当てられたからかしら』
『紳士に不可能は無いのだよ、覚えておきたまえ』
『ぐぬぬ・・・』
「えぇと・・・仲良くしてるところ悪いけどさっちんのしゃっくりは治せないのか？女神パワーで」
『・・・できるわよ？一応これでも女神だからね。朝飯前よ』
『じゃぁお願いするどヒックぇ』
『でもわたくしが手を貸すのは正直者だけ・・・あなたが正直者かどうか確かめてあげるわ』

『・・・どうやってヒックどすぇ？』
『わたくしの質問に答えるだけよ。では聞きます』
女神の審判が始まる。
この質問にうまく答えなければしゃっくりを治してもらうことはできない。なので、質問には誠心誠意答えなくてはならない。
『問います。目の前で少女が泣いています、あなたはどうしますか？』
『紳士的に泣き止ませる』
「友達になる」
『ふむ、私なら落ち着かせるだろうね』
『とりあえず話しかけるどすぇ』
『・・・二人嘘を言っていますね。［おっ持ち帰り～］との声が聞こえてきました』

『『・・・』』

『では問います。財布が道に落ちていました、あなたはどうしますか？』
『一割抜いて元あった場所にもどす』
「落とし主を探して友達になる」
『警察に届けるかもしれんね』
『・・・いったん持って帰ってみんなに相談するどすぇ』

『・・・一人嘘を言っていますね。二割抜く気です』

『え！？ちょ！やらないよ！そんな目で僕を見ないでよ！！』

『では最後の問いです。・・・今あなたは幸せですか？』
『当然どすぇ』

『治ったどすぇーーー！！』
「よかったな！さっちん！！」
『女神さんありがとうどすぇ！！』
『ふふ、どういたしまして』
『僕からも礼を言わせてくれ、ありがとうございました！』
『構わないわ、正直な子は好きだから』
『ふむ、今回は感謝だな。今度また斧をプレゼントするよ』
『あらありがとう、お返しにその斧で頭を真っ二つにカチ割ってあげますわ』
『手厳しいな、ならば二本ならどうだ？』
『貴方の頭が四つに分かれるわね』
『二人とも！本当に助かったどすぇ！また会うときまでバイバイどすぇ！！』
『『ああ、バイバイ（よ）』』
無事さっちんのしゃっくりも止まって一安心の霊能たち。
今やっと家についたところだ。家に入ると、蘇我がなにやら新聞のチラシを見てこう言った。
『霊能・・・これ、出てみないか？』
そう言って見せるチラシの内容は・・・

町内トライアスロン大会～ポロリもあるよ～

「トライアスロンかぁ・・・いいかもな」
『ポロリってなんどすぇ？』
『霊能なら一位が取れるよな？むしろ取れよ？』
「・・・なんだ？そんなに一位はいい商品なのか？」
『驚くなよ・・？なんと温泉旅行のチケットだ！ぜひ取ってこれは行くしかないだろう！！』
「・・・温泉かぁ・・・いいな。よし、そのトライアスロン大会・・

・出るか！」
『二人とも応援するどすぇ～』
『聞くところによるとこの町内トライアスロン大会は全国から猛者が集まってくるらしいぞ・・・』
『でもどう考えても霊能はんがぶっちぎりで一位なんじゃないどすぇ？』
『ならばツキミ殿の兄上に頼んで一時的に身体能力を下げてもらえばいいでござるよ』
「まぁ・・いい勝負がしたいしな！蘇我！勝負だ！！」
『いいだろう！身体能力低下中の霊能になら勝てる可能性もあるかもしれないような気がしないでもない！！』
『私はいろいろその大会についてしらべとくどすぇ～』
「・・・小次郎、お前自然に会話に入りすぎだろ」

第十九話　霊能太郎とトライアスロン前編

「すっげー人がたくさんいるなぁー」
『全国から猛者が集まってきているってのも嘘じゃなさそうだね』
今彼らが居る場所、それは町内トライアスロン大会スタート地点付近である。彼らはこの大会に出場するため、ここでスタートの合図を待っているのである。
『霊能、絶対優勝するよ？』
「当然っ！」

第十九話　霊能太郎とトライアスロン前編

「はい、霊能さん。これゴン兄から渡された腕輪っです」
そう言って渡された腕輪を身につける霊能。
その直後に、ずしりとくる感覚。
「うお・・・、なんか体が重く感じるぜ・・・」
そう、今ツキミから渡された腕輪はゴンザレス特製の腕輪であり、霊能のぶっ飛んだ身体能力を一時的に下げる効能を持っている。まぁ霊能が外そうと思えば外れるのだが。この腕輪のおかげで霊能の身体能力はまだ常識の範囲内にギリギリ入るレベルになり、この大会でいい勝負ができるのである。
「トライアスロン大会にここまで多くの人が参加するとはな・・・」
『さすが別名鉄人レースと呼ばれるほどのことはあるね。いろんな人がいるよ・・・』
蘇我が周りを見回す。

見渡す限り人、人、人である。
ふと耳を傾けると、さまざまな人の声が聞こえてくる。
たとえば・・・

「カーチャン、俺頑張るよ・・」
『余裕余裕！俺たち二人にかかればこの程度楽勝だぜっ！』
「戦死者は補修ーー！！！」
「見よ！この鍛えに鍛えた筋肉を！！」

などなど、耳を少し傾けるだけでさまざまな声が聞き取れるのである。
この全てがライバル。なかなか厳しい戦いになりそうだ。
『・・・ねぇ霊能、今居てはいけない鉄人がいた気が・・・』
「気のせいだろう。忘れておけ・・・」
「そういえばトライアスロンってどんなルールなんっですか？」
『ふふふどすぇ！私がこのトライアスロン大会についていろいろ調べてきたんどすぇ！！感謝するどすぇ～！』
そう言ってさっちんがここぞとばかりに自慢げな顔をする。バスターズ情報係として得意分野で活躍できたことがうれしいのだろう。
『まず、トライアスロンのルールを説明するどすぇ、基本として三種類の競技・・・水泳、自転車、マラソンを連続して行うのがトライアスロンどすぇ。競技中に他者の手を借りることは原則的に禁止どすが・・・この大会では選手どうしの助け合いはセーフとなっているんどすぇ』
「ほうほう・・だいたい分かったな。さっちんの情報はそれだけか？」
『ふふふどすぇ・・・さらに！私はいろいろ調べてきたんどすぇ！！なんとここの町内会トライアスロン大会は全国から猛者がたくさん集まってくる・・・言わばある意味全国大会みたいなものなんどすぇ！・・・その中でも有名な選手をリストアップしてきたんどす

ぇ』
『有名な選手？・・・燃えてくるね！絶対勝つよ！！」
『例えばそこの小太りの選手・・・彼は実は痩せてるのに体中に意味も無くダイナマイトを巻きつけていることで有名なダイナマイト吉松どすぇ』
『燃えちゃ駄目だった！！なんだその危険な選手！！』
「意味無いんっですか・・・」
「個人的にはあそこの筋肉ムキムキな人が気になるんだが・・・さっちん、分かるか？」
そう霊能が指差す方向・・・そこには凄まじい上腕二頭筋を持つ男が立っている。
そのムキムキっぷりたるや体重の三分の一を占めていそうである。
『彼は腕しか鍛えないことで有名な豪腕の中松どすぇ』
『バランス悪っ！！』
「しかも腕って・・・トライアスロンにあんまり関係してないんじゃ・・・」
「じゃ、じゃああそこのタバコ吸ってるハードボイルドっぽい人は！？」
今度の霊能が指を差す方向には・・・タバコを吸う渋い男の人が立っている。
なかなかのハードボイルドっぷりである。
『彼は一度にタバコを七本くわえることで有名なヘビースモーカー黒松どすぇ』
『体に悪ーいっ！！』
「見事なほど走るのに適してないっですねぇ」
「・・・つーか○松多くね？みんな名前○松じゃね？流行ってんの？」
その時、どこからか霊能を呼ぶ声が聞こえた。
なんとなく聞いたことがあるような無いような覚えの無い声だった。

『見つけたぞ霊能太郎！！今日こそ我ら四天王がお前に勝つ！！リベンジだ！！』
そこには四天王を名乗る五人組の姿が！
「・・・誰？蘇我ーお前知ってる人？」
『いや知らん。わりとリアルに』
『リアルに忘れたの！？酷くない！！？・・・まぁいいならば教えてやろう！我らは中臣鎌足様に仕えていた四天王の一人・・・自転車のタナカ！！』
『チャリンコのスズキ！！』
『水泳のサトウ！！』
『二輪車のカトウ！！』
『そしてクロールのナカムラ！！我ら！五人そろって・・・』

『『『『〇松四天王！！』』』』』

「お前ら一人も名前に松ついて無ぇだろうがァァァァ！！」
『つーか一人くらい走れよ。泳ぎと自転車しかいないじゃないか・・・』
『フハハハハ！ではレースで会おうではないか！！』
『「出来れば会いたくない」』
そしてそのままどこかへと歩いていく五人。うっとうしいやつらである。
四天王と分かれた後しばらくすると、会場全体にアナウンスがかかった。おそらくレースの説明とスタートをするのだろう。
[そろそろ始まるわ。定位置につかないのなら死になさい]
「もう始まるのか、じゃなさっちんとツキミ、応援よろしくな」
『さっちんたちが応援してくれたら紳士に負けはないよ』
『二人とも頑張るどすぇ～』

「霊能さん、その腕輪外したら反則で失格っですからね。外れたらすみやかに棄権するようにっですよ」
「おう、分かった。じゃあな！」
『頑張ってくるよ～』
「『行ってらっしゃい（どすぇ）（っです）』」
そうして定位置につく霊能たち二人。
スタート場所はほとんど最後尾に近い場所のようだ。

［ではそろそろ始めるぞぉ、おらぁこの大会の主催者兼実況・・・左ヶ西高校の校長だぁ］

「うわ！アレ俺の高校の校長じゃん！！」
『へぇ・・・どんな人なの？』
「そうだな・・・えらくファンキーな人だ。前に朝礼を七秒で終わらせた伝説をもつ人だ・・・」
『七秒！？』
［私は解説を務めるコンビニの店長よ、こんな大会に出てる暇があるならコンビニに行きなさい］
「店長っ！？」
『さらりと大会を全否定したな・・・』
［では・・・よーいぃスタートォ！！］

わーわーわー！

とてもにぎやかになりながら大勢の人が走って海へと入っていく。そのなかには当然霊能たちの姿もある。順調に霊能たちは泳ぎ、かなり前のほうまでたどり着いた。
『意外となんとかなるもんだな・・・』
「うう・・・いつもに比べて体が重いぜ・・・」
しゃべりながら泳ぐ二人。思いのほか余裕を見せている。

と、そこにでかい塊が水面を通っていった。
『・・・アレなんだ？』
「・・・まて、塊の下になにかある・・・顔？・・・あいつダイナマイト吉松だ！！」
『ああ・・・濡らさないために・・・』
「凄い執念だな・・・いやもうダイナマイト捨てろよ」
そんなこんなで泳ぎは続く・・・
しばらく泳いでいると、蘇我が何かに気づいた。青い背びれのようなものが目の前の水面から出ているのだ。
『なぁ霊能・・・あの背びれっぽいのってさ・・・』
「・・・まさか、こんなところにいないだろうきっと」
だがその楽観的思考は裏切られることになる。
彼らの目の前で跳ねたのだ。サメが。
『ほんぎゃぁぁぁ！！！ヤバイ！どうする僕！！』
「ああなんだサメか」
『なんだじゃないよ！！霊能落ち着きすぎ！何だと思ったんだよ！！』
「フルムプペシンかと・・・」
『フルムプペシン！！？何それ！？』
「さぁ？分からん」
『適当かっ！！』
そんな会話を繰り広げている間にもサメはどんどん近づいてくる・・・！！そして全然逃げようとしない霊能の近くまでたどり着いた・・・。
『ところで霊能・・・お前、腕輪つけてること忘れてないよな？』
「あ゛」
『「・・・」』

『「逃げるぞぉぉぉ！！！」』
全力で逃げる二人。
だが無常にもサメは追ってくる。
「蘇我、作戦Ｂだ！」
『具体的には！？』

「？蘇我がサメに食われる
？俺は逃げる
？みんなしあわせ」

『僕だけ超不幸せだよ！！』
サメが二人をいつでも食べれるポジションまで追いつかれる・・・！
もう駄目だ。
そう誰しもが思ったとき、サメが―――爆発した。
『「へっ？」』
爆発の理由は簡単・・・ダイナマイトだ。
ダイナマイトといえば・・・

「ったくコース内にサメなんて放してんじゃねぇよ。君たち、無事かい？」
「え・・あ・・・はい。大丈夫です」
「気をつけろよ？じゃ、俺はもう行くぜ。・・・負けねぇぞ？じゃあな！！」
そんな言葉を残して先へと泳いでいくダイナマイト吉松。
残された二人は呆然としていた。
「・・・俺吉松のこと馬鹿にしてた自分が恥ずかしいわ」
『そう・・だな。かっこいいね吉松・・・』
「俺将来ああいう風に普段からダイナマイト持ち歩く大人になるわ」
『普通に通報されるけどな』

そんなことがありながらも二人は泳ぎ進めていく。そうしてついに見えて来た水泳ゴール地点。もうすぐ自転車にチェンジ。そんな場所でふと、二人は気づいた。
「そういや実況とか聞こえてこないな」
『・・・そうだね、どうしたんだろう』

[あー、ゴホンッ！実況の校長だぁ、すまんがトイレに行っていたぁ。ここからは頑張ろうと思う]
[解説の店長よ。ご飯を食べに行ってたわ。文句があるなら鏡にでも叫んでいなさい]

『・・・安心の店長クオリティ』
「校長もなかなかやるな・・・」
水泳が終わった霊能たち二人。
次の競技は自転車。
ここからどうレースは動いていくのか！
『よし！水泳終了！！』
「行くぞ！！ごぼう抜きにしてやんよ！！」

第二十話　霊能太郎とトライアスロン中編

「『行ってらっしゃい（どすぇ）（っです）』」
霊能と蘇我を見送ったさっちんとツキミ。ゴール地点では待っていようとは思うが、まだまだゴールまで時間がある。
ようするに、暇なのだ。
「これからどうするっですか？」
『そうどすねぇ・・・お腹もすいたし昼ごはんにするどすぇ』

第二十話　霊能太郎とトライアスロン中編

とりあえず昼ごはんにするとは言ったものの、特に当ても無く道をふらつく二人。しばらく歩いていると向かい側から見知った顔が歩いてくるのに気がついた。
『あ、店長はんどすぇ～』
「店長さんじゃないっですか！・・・あれ？解説は？？」
『あら？根暗にデス娘じゃない。お久しぶりね』
『・・・根暗じゃないどすぇ・・・前髪が長いからって見た目で決めないで欲しいどすぇ・・・』
「デス娘じゃないっですよ・・・デス娘って・・・ＤＥＡＴＨ娘って・・・」
落ち込む二人。彼女らには店長の何気ない言葉が胸に突き刺さるようだ。ちなみにくっちーはもう慣れたという。
『腹が空いては解説はできないのよ。その程度理解しなさい』
『じゃ、じゃあ一緒にご飯食べるどすぇ！』

「そうっですよ、一緒に食べましょうっです！」
『・・・まぁ構わないわ。そこのファミレスでいいわね？』
こうしてふと目にはいったファミレスに入っていく三人。すんなりＯＫを出す店長はなんだかんだでやさしいところもあるのだ。店内に入り、禁煙席に移動する。
『注文は決まった？』
『むむむ・・・迷うどすぇ・・・・！』
「ハンバーグ定食っですか・・・それともエビフライ・・・」
「ご注文はお決まりになりましたでしょうか？」
『海鮮丼を一つ、お子様ランチを二つお願いするわ』
「かしこまりました」
『どどどどすぇ！？勝手に決めないで欲しいどすぇ！！？』
「ちょちょちょ！？あたしもお子様ランチっですか！！？」
『あんたたちにはそれで十分よ、旗でも集めてなさい』
『・・・まぁ私はお子様ランチでもいいどすぇ』
「あたしはあんまりよくないっですよ！？これでも高校生っです！！」
『そのうるさい所がお子様なのよ』
「酷いっです！？」
注文も決まり、席で談笑する三人。女三人よれば姦しいとはよく言ったもので、話はとても盛り上がった。
「へいへい姉ちゃんたちよぉ？俺たちとちょっとお茶しない？」
だがその盛り上がりを邪魔するチンピラが現れた。誰にそんな口を聞いているのか本人たちは分かっていないのだろう。今すぐに逃げるべきなのに、チンピラたちはさらに声をかける。
「いいじゃねぇか一緒にイイコトしようぜぇ？ムフフフ」
『は、離して欲しいどすぇ！やめるどすぇ！！』
しかもよりにもよって地雷を踏み抜いてしまったチンピラ。さっちんに手を出すのはまさに自殺と言っても過言ではない。
『ふむ、お客様？ご注文の品をお持ちしました』

と、そこへ店のウェイターらしき人物が料理を持って現れる。どこかで聞いたことのある紳士的な声だ。
「アァ！？うっせぇな黙ってろ！！」
『ではこちら、紳士のアツアツグラタンでございますッ！！！』
グシャ！！
グラタンが飛び散る音が響く。
ウェイターの持っていた熱いグラタンがチンピラの顔にジャストミート。グァァァァとかなんとか悲鳴をあげて転げまわるチンピラ。
『あら？なかなかやるじゃない。ウェイターとしては合格点ね』
『ありがとうございます。ではお客様・・・店の裏側へご案内しましょう』
そのままズルズルと引きづられて行くチンピラたち。
彼らの失敗は何処だったのだろう。
さっちんに声をかけたのが間違いだったのか？
さっちんに声をかけたがゆえに、不可能を可能にする男を召還してしまった。
ならばツキミに声をかけるべきだったのか？
ツキミに声をかけたが最後、出家した兄が俗世に戻ってくる可能性があるので、どのみちチンピラに未来は無かっただろう。
では店長に声をかけるべき？
馬鹿なことを言ってはいけない。それこそなごやかなファミレスに特大の氷像ができることは間違いないだろう。
ようするにチンピラは彼女らに声をかけた時点で・・・人生を捨ててしまったのである。
まぁ自業自得なのでしかたがない。

『『「ごちそうさま（どすぇ）（っです）（よ）」』』
『じゃあ私は解説に戻るわね、また会いましょう』
『バイバイどすぇ～』

「また会いましょうっです！」
こうして店長は去っていった。
さりげなく二人の分も勘定をしてくれたあたり大人である。残された二人はこれからどうするかを考え、暇なのでとりあえずアクセサリーショップへ向かうことにした・・・。

◇

「趣味の悪いアクセサリーだな・・・」
トライアスロンの一つ目の競技である水泳を終えた二人は、二つ目の競技である自転車に乗り込んだ。この競技で使用される自転車は個人のものではなく、大会で支給されるので改造自転車に乗るなどの反則は出来ないようになっているのである。
だが霊能は支給された自転車に不満があるようだ。
「なんで自転車に宝石がやたらついてんだよ！！ブルジョワアピールか！！」
そう、霊能に支給された自転車には大量の宝石がついているのである。ぶっちゃけかなり悪趣味だ。
『宝石ならまだいいだろ・・・』
こちらでは蘇我も落ち込んでいる。
彼の自転車にはぱっと見たところ変なものはついていない。
一体どうしたというのだろうか？
『この歳で・・・補助輪はキツイ・・・ッ！』
訂正、変なものついてた。なかなか微妙な嫌がらせである。
「まぁこの際見た目はどうでもいいや！急ぐぞ蘇我！！」
『・・・そうだな、行こうか！！』
見た目や補助輪のことを忘れる意味もこめてスピードを上げどんどん抜いていく二人。
と、そこへアナウンスが入った。

［えー・・・よく聞きなさい、ルール変更よ。実況の校長が暴走したわ。ついさっき走っていったから校長に抜かれた人はその場で失格よ。・・・せいぜいがんばりなさい］

「抜かれたら失格か・・・」

『大丈夫でしょ、スタートの時間が違いすぎるし絶対追いつかれないよ』

「蘇我・・世の中ではそれをフラグと言うんだ・・・」

［今やたら腕が太い人が失格になったわ］

「『豪腕の中松ぅぅぅ！！！』」

［・・・水面をムーンウォークで進むなんてふざけてるのかしら？］

「ムーンウォークで！！？」

『校長・・・これはまずいね・・・』

「おう、急ごう・・・！」

『ヘイヘイヘイヘイ！！お前ら遅いんじゃねぇーの！？失格になっちまうぜぇ！？』

その時、隣から声がかけられた。

どこかで・・・そう、地獄で聞いたことのある声だ。

「お・・お前は・・・」

『まさか・・・』

『そう！！そのまさかだぜ！！』

「『山田　竜！！』」

『本名で呼ばないでぇぇぇぇ！！！マウンテン！マウンテン龍と！そう呼んでくれよ！！』

『落ち着け山田よ』

『ロックゥゥゥゥ！！マウンテンね？身内の裏切りは俺の心に大ダメージだよ！？』

『っく・・・霊能、悔しいけどこいつらなかなか速いよ・・・ッ』

「そうだな・・・でもなんかせこくないか？」
『ああ、確かにせこい』
何がせこいのかって？そう！マウンテン龍とロックは二人乗りをしているのだ！！
ロックが漕いで、マウンテンが荷台に乗っている。
「楽しやがって・・・」
『うるせぇうるせぇ！！勝てばいいんだよ勝てば！！俺たち二人は最強だぜ！！』
そんな話をしていると、アナウンスが入った。

[今校長が海を抜けたわ、失格者多すぎよ。失格するくらいなら初めから出なければいいのに]

「『『速えぇぇぇぇ！！！』』」
『む、やるな・・・』
『不味いぞ霊能！！このペースじゃ抜かれる！！』『不味いぜロック！！このペースじゃ抜かれる！！』
『『ん？』』
『・・・オイ山田、二人乗りはせこいんじゃねーの？』
『あ？うっせーな幽霊、てめぇが帝鬼さんに勝ったなんて認めねーぞ』
『幽霊じゃない蘇我だ、確かに帝鬼さんにはアレで勝った気にはならないけど・・・』
『山田じゃねぇマウンテン龍だ、なんだ認めてんじゃねぇか負けをよぉ？この雑魚』
『マウンテンには言われたくないね、雑ー魚』
『ハッ！俺は最強だっての雑ーー魚』
『何がお腹痛い～だ雑魚、少なくともお前には負ける気がしないよ雑ーーー魚』
『言ってくれるじゃねぇか蘇我ぁ！俺だってお前には負けねぇよ雑

ーーーー魚』
『雑ーーーー魚！』
『雑ーーーーーー魚！！』
「『お前らうるさい』」
『『すいませんでしたっ！！』』
似たもの同士である。
少々盛り上がってきた所、またもやアナウンスがかかる。
[現時点でほとんどの参加者が失格になったわ。校長も暴走しすぎた事に気がついて自重し始めたみたいよ。残った人たちは幸運ね]
『僕らの後ろはほとんど失格かな・・・？』
「そうだな、一応俺たちかなり先頭に近い場所にいるからな・・・」
『なんにせよ自重してくれるならありがたいぜ！！ロック！今のうちに先頭を抜くぜ！』
[自重してくれたのはいいけど・・・すでに残った参加者は一一人よ。校長死なないかしら。]
『一一人！！？・・・僕らはかなり幸運だったのかもしれないね・・・』
「まぁ俺たちが先頭になれば関係ないさ！行くぞ蘇我！！」
『おう！！霊能！！』
『ロック！！俺たちも負けてられないぜ！！行くぜぇ！！』
『む！！』
こうしてレースは続いていく、かなりの距離をすでに自転車で走ったのでもうマラソンも遠くは無いだろう。まだまだトライアスロンは続く。

第二十一話　霊能太郎とトライアスロン後編

「あ、そうだ。ロック、友達になってくれ」
『む！！？』
『はっはっは！しっかたねぇなぁ！この俺様が・・・そうだな、条件次第では考えてやってもいいぜ！！？』
「いや、マウンテンはいいや」
『なん・・・だと・・・？』

第二十一話　霊能太郎とトライアスロン後編

『ちょ待て待て待て！！この俺様が！！考えてやってもいいって言ってるんだぞ！！？そうそうこんなチャンス無いぞ！！？』
「なぁロック、頼むぜ」
『むぅ・・・』
『シカッティング！！？ちくしょう！蘇我！お前もなんとか言ってやってくれよ！！』
『いや、マウンテンはいいや』
『てめぇぶっ殺すぞぉぉぉぉ！！！！？』
霊能たちはまだ自転車を漕いでいる。もうすぐ自転車ゾーンも終わり、マラソンへと変わるはずである。ちょっとした会話をしながら進む霊能たちに後ろからなんか必死な声が聞こえてきた。
『追いついたぞ！霊能太郎！！』
『我ら四天王に追いつかれたからにはもう貴様に勝ちは無い！！』
『安心して負けるが良い！！』

そう、いつぞやの四天王（五人）である。
「ああ・・・そういやいたねお前ら」
『今大会！我らは貴様に勝つことを目的としてきた！』
『そこで我々は考え！最高の策を思いついたのだ！！』
『そう！！直接貴様を潰せばいいのだぁぁぁ！！』
『・・・お前ら霊能に勝つ気か？無理だろ・・・』
『うるさいぞメガネ！それくらい理解している！』
『おいメガネって呼ぶな』
元気な人たちである。どうやら前に霊能に瞬殺されたのが悔しかったのだろう。今回は霊能に勝つことだけを考えてきたようだ。
『力ではかなわない・・・』
『ならば！道具を使えばいいのだ！！』
『さぁナカムラ！！あれを取り出せ！！』
『・・・やばいぞロック、俺たち空気になってきてる』
『むぅ・・・』
『ふふふ・・・これを見よ！！！』
そういって四天王の一人、ナカムラが取り出したのは・・・人形。円筒のような形で、ドーム型の顔がついており、棒のような手が生えている。
『通販で仕入れた・・・超強力爆弾！ジャス○ウェイさんだ！！』
『オイィィィィ！！！なんて物仕入れてんだァァァァ！！！』
超強力である。
いろんな意味で。
『これで貴様も木っ端微塵！！吹き飛ばしてくれるわ！！』
『不味いぞ霊能！著作権的にも爆弾的にも！！』
「分かってる！！どうしよう！！」
『さぁくらえ・・・ピッチャーナカムラ、勢いよく振りかぶって・・・』
『オイ馬鹿！！自転車の上に立つな！！』
『投げ・・・う、うわっ！！』

その時、風が吹いたのと同時に、自転車の上に立って振りかぶり爆弾を投げようとしたナカムラが倒れる・・・

・・・マウンテンのところに。

チュドォォォォン！！！！！！！！！！

『『『『ナカムラァァァァァ！！！』』』』

「おいロックとマウンテンも巻き込まれたぞ」

『なんというか・・・ご愁傷様だよね』

『大丈夫かナカムラ！！』

『っくそ！覚えてやがれ！！』

『俺たちを退けても！きっと第二、第三の四天王が・・・！！』

「いや来ないでください」

『覚えてろぉぉぉ！！！』

こうして霊能と蘇我は、みんなを置いて先へと進んでいった・・・。

・・・その後のマウンテンとロックはというと・・・

『山田、黒焦げだが大丈夫か？』

『痛たたたただ大丈夫だし！こんな痛！このくら痛いした事ねぇし！でも自転車壊れたから棄権するし』

『・・・そうか』

マウンテン龍、ロック。

トライアスロン第二の競技・・・自転車にて棄権。

◇

『ふふっふ～いい物買えたどすぇ～』

「タミフルたみ子ストラップトライアスロン限定バージョン・・・

嬉しすぎて爆発してしまいそうっですよ！』
『爆発は流石に困るどすねぇ・・・』
さっちんとツキミの二人はアクセサリーショップでかなりの時間を使い、さまざまな物を物色していた。
だがまだ霊能たちのトライアスロンは終わる頃ではないので、まだ時間を潰す必要があるのである。そんな事情でぶらぶらと町を歩いていると、向かい側にマスクをした女性が見えた。
「あ、あれくっちーさんじゃないっですか！？」
『くっちーはんどすなぁ、お～いどすぇ～』
だが女性はこちらに気づかず、銀行へと入っていった。それを見たさっちんたちは同じ銀行へと入る。
「くっちーさーん！」
『あら？さだこちゃんにツキミちゃんじゃない？どうしたの？』
『いや見かけたからついてきただけどすぇ～』
「暇なんっですよー」
『暇って・・・でも私も今月の生活費を下ろすだけなんだから面白いこと無いわよ？』
『目的が皆無のまま歩きまわるよりはマシどすぇ』
『ならいいけどね、じゃ・・・下ろしてくるからそこらへんで座って待っててくれる？』
そう言ってくっちーは列の一番後ろ・・・髪が長い人の後ろに並ぶ。
『暇どすなぁ・・・』
「暇っですねぇ・・・」
『暇でござるなぁ・・・あ、カステラ食べるでござるか？』
『いただくどすぇ～』
「ありがとうっです！もぐもぐ・・・なかなかいけるっですね」
『そうでござろう？親切な女性に奢ってもらったのでござるよ』
『いい人もいるもんどすなぁ・・・』
「って小次郎さん！！？いつからそこに！！？」

『っですのあたりからでござるよ』
『どのあたりかさっぱりどすぇ～』
「おい！！！動くな！！！このバックに金を詰めな！！」
と、そのなごやかな空間をぶち殺す！的な台詞が聞こえてきた。
もはやこの台詞だけで声の主が何をしようとしているのか分かるというもんである。
『銀行強盗どすぇ？』
「おおー、リアルにあるんっですね！凄いっです！！」
「お客様！？どうか考え直しなさってください！！」
「うるせぇ！！さっさと金を用意しやがれ！！仕事なんてもうしねぇ！！一生この金で生きるんだ！！」
『待つでござるよ、落ち着くでござる。急いては事を仕損じるというでござろう？仕事も忍耐強く続けるべきでござるよ』
「あぁん！？うっせぇな！！あんな仕事続けてられるか！！分かるか俺の仕事！？円筒形でドーム型の顔！棒のような手がついてる人形を延々と作り続けるだけだぞ！！？ざけんな！！」
『・・・それは・・・なんというか大変でござるな・・・』
「オラ！早く金を出しやがれ！！さもねぇとこのガソリンをぶちまけるぞ！！！」
男はどこからかガソリンのポリタンクを取り出す。
もしもこれをぶちまけられたら大変である。ぶちまけたガソリンに火がついたら・・・そう、大惨事である。
「遅せぇ！！オラよ！！」
そういってぶちまけようとする男だが・・・
ガァン！！
その音とともにガソリンの入ったタンクは窓を突き破り外へと飛んでいく。
・・・そう、蹴り飛ばしたのだ。
髪の長い人が。
「てめぇ何しやがる！！」

その言葉に髪の長い人が答える。
『ふむ、流石にガソリンを撒かれては困るのでね』
そう言いながらカツラを外す、とそこにはお皿がのっている。
「な！ヅラッ！！？変装だと！！？」
『ヅラじゃない、紳士だ』
『佐悟はん！！？そのままやっつけるどすぇー！』
「っく！ガソリンが無くてもこいつがある！」
男がその言葉とともに取り出したもの・・・それは拳銃。銀行強盗の必需品とも言える。
それを構えようとする男だが・・・
『遅いわね。というか貴方のせいでお金下ろせないんだけど？』
構えたときにはすでに手に拳銃は無かった。
口裂け女のスピードを舐めてはいけない。気がつけば男の首には大きな鎌が添えられている。
『自主する？』
「・・・ちくしょう・・・」
こうして銀行強盗事件は幕を閉じた。
そしてくっちーは銃刀法違反の疑いで連れて行かれた。

◇

『やっとマラソンゾーンか・・・』
「遠かったな・・・、だがここからが勝負だぜ」
『うん、そうだね』
「そういや今頃さっちんたち何やってんのかなぁ・・・」
『アクセサリーショップにいるらしいよ』
「ん？なんで分かるんだ？」
『ｍｙブラザーが変装して護衛してるからね！』
「・・・人はそれをストーカーと呼ぶ。つーか連絡手段はどうやってんだよ、蘇我がトライアスロン中に携帯使ってるところ見てない

ぞ？』
『え？何言ってるの？紳パシーに決まってるじゃん？どうしたの？』
「さも当たり前のように言ってんじゃねぇ」
霊能たちはトライアスロンの自転車ゾーンが終わり、マラソンに移行していた。
しばらく走っていると前のほうに二人の男が走っていた。
それに追いつくように走っていく。
追いついて見てみると見覚えのある二人だ。
そう、ダイナマイトを体に無駄に巻いているせいで小太りに見える男・・・ダイナマイト吉松。そしてタバコを七本同時にくわえている男・・・ハードボイルド黒松。走りながらタバコを吸うのはかなり体に悪そうな気がする。
「おっさんたち！追いついたぜ！！」
「・・・お、君たち・・・なかなかやるじゃないか。サメの時よりいい顔をしているね」
『あの時はどうも！・・・負けませんよ！！』
「こちらこそ、手加減はしないよ？」
相変わらずのいい人である。そんな会話を聞いて黒松が会話に参加する。
「・・・なかなか威勢のいいボウズたちじゃねぇかゴホゴッホ！！！・・・最近なんかやたら咳き込むんだけど何でだろうな？」
『原因確定的に明らかじゃねぇか！！禁煙しろ！！！』
「つーかなんで七本も一気に吸ってんだよ・・・」
「ふ・・・ボウズには分かんねぇかもしれねぇが・・・他人から見れば無駄に見えるこだわり・・・。しかしそこに男の全てがある」
「おい何ちょっとかっこ良さげに言ってごまかしてんだよ、禁煙しろ禁煙」
「安心しろ、俺は禁煙の達人だ。今までに何回禁煙してきたか分かんねぇくらいだぜ」
『一度も成功してねぇじゃねぇかぁぁぁぁ！！』

なかなかの自由人である。そんな会話をしながらも彼らは走っていく、ゴール目指して。
しばらく走っていると後ろの方から声が聞こえてくる。
その声はどんどん近づいてきて・・・
ついには並ばれることになった。
『追いついたぞ！！！追いついたぞ霊能太郎！！！！！』
『遠かった・・・！だがここで貴様も終わりだ！！！！』
『今こそ貴様に勝つ！！』
『ナカムラの治療も終わった！！あとは貴様を倒すだけだ！！』
『フランスパァァァァン！！！！』
「おい今何か変なのいたぞ」
そう、四天王の五人である。一人おかしい気がするが。
『変とはなんだ！！四天王が五人いて悪いか！！』
「そんな今更なことはどうでもいいわぁぁぁ！！」
『明らかに一人別人だよね？それナカムラじゃないよね？』
そう、そこにはいつだったかのナカムラはおらず、代わりに凄まじいインパクトの男がいた。
マッスルな肉体、イカしてるグラサン、イエローなビキニパンツのイイ男。
在りし日のナカムラの面影はそこには無い。
『いやナカムラだ！だがちょっと爆発の怪我が酷かったから病院で治療しただけだ。正確にはナカムラ改めナカティンと呼んでくれ』
『どんな改造手術だよォォォ！！劇的ビフォーアフター過ぎるわァァァ！！』
「これが・・・匠の仕事か・・・」
『霊能も信じてんじゃねェェェェェ！！！』
『イチジカーン、イチマーンエーン。ニジカーン、ニマーンエーン。ソノアイダワターシ、ナカティーン！　ＯＫ　？』
『ＮＯォォォ！！！オイ四天王！！間違いなく別人じゃねぇか！！雇ってんじゃねぇかァァァ！！！！』

『蘇我入鹿、諦めてこれはナカティンだと認めろ！』
『そうだそうだ！ナカティンと言う存在そのものを否定する気かー！』
『ナカティンは認めてもそれがナカムラと同一とは認めねぇよ！！』
「蘇我、匠はな、凄いんだぞ？」
『お願い霊能、現実に目を向けて？』
蘇我に味方はいない。
と、話が盛り上がっているところ、サトウが真剣な表情になり宣言する。
『さて、今度は爆弾も持ってないし、正々堂々マラソンで勝たせてもらう！！』
「いいだろう、相手になってやる！」
こうして霊能たちは走る。ただひたすらにゴールを目指して。
そしてついに・・・ゴール目前、ラストスパートの位置まで来たのだ。

［もうすぐゴールだなぁ！よぉくがんばった！！］
［あら校長、生きてたの？そうね、この大会ももう終わりね］
［てめぇらぁ、頑張れよぉ？世の中は気合でなんとかなるもんだぁ。気合が全てだぁ］
［いやその理屈はおかしいわ］

『霊能！いくら霊能でもここは負けられないよ？』
「蘇我！俺だって負ける気はさらさら無いぜ！！」
「俺を忘れてもらっちゃ困るね、このダイナマイトにかけて・・・負けない！！」
「ゴホゴホッゴホゴッホゴホ！！・・・この大会が終わったら・・・バーでマスターとカミュを飲むのさ・・・」
『霊能太郎ぅぅぅ！！貴様に勝つぞぉぉぉ！！』
『うぉぉぉ！！！』

『負けんぞぉぉぉぉ！！！』
『ふぬぉぉぉぉ！！！』
『Ｆｒａｎｃｅ　Ｐａａａａａｎｎ！！！！』
全力で・・・最後の力を振り絞る彼ら。
誰が果たして一位を取るのか、それはもうすぐ決まる。
一位と言う栄光・・・この中のチャンピオンは誰なのか・・・
全員がゴール目指し走っているところに、影が差す。
『ん？』
その影はをつくる物は空を飛んでいる。その物は霊能たちの所へと振ってくる。
見た目はタンク！中身は液体！その名も・・・

ガソリン。

バシャァン！！
彼らに降りかかるタンクの中に入っていた液体。
そのガソリンはかかってはいけない人にまで容赦なくかかる。

「あ」

その言葉は誰のものだったのだろうか。
そう、ガソリンは可燃性・・・それが当然のごとく七本のタバコにより着火。着火したガソリンにより吉松にも火が回る。そして吉松といえば・・・ダイナマイト。

ズドォォォォォォォオオオオオン！！！！！！

町内トライアスロン大会

優勝者・・・なし。
参加者・・・全滅。
奇跡的に死者は出なかったと言う・・・。

第二十二話　霊能太郎と商店街の福引

ここは霊能の自宅。
霊能と蘇我はソファに座ってぼーっとしている。
「優勝・・・出来なかったな・・・」
『優勝者どころか全滅だもんね・・・』
「爆発の原因・・・吉松さん全く落ち込んでなかったな・・・」
『今までに何度か同じようなことがあったらしいね・・・』
「『もうダイナマイト捨てろよ・・・』」

第二十二話　霊能太郎と商店街の福引

『二人とも元気出すどすぇ～』
『優勝したかったなぁ・・・』
「そうだな・・・優勝商品は・・・たしか温泉旅行だったっけ！」
『うん、行けないのが残念でならないよ・・・』
『落ち込んでるどすなぁ・・・参加賞は貰ったんどすぇ？』
「ああ、参加賞として商店街の福引券貰ったけど・・・」
『なんかもう行くのすらめんどくさいよね・・・』
『福引のチラシが入ってるどすぇ、・・・特賞は温泉旅行どすぇ』
『霊能！いつまで落ち込んでいるんだ！！早く行こう！！』
「・・・オイついさっき行くのすらめんどくさいって言ったやつ誰だ」

やたらやる気に満ちている蘇我につれられ、商店街へと進む霊能たち。
商店街で行われる福引は、トライアスロン参加者も多くかなり賑わっているようだ。
『ぬぁぁぁ！！ちっくしょう！！連続ティッシュ！！』
『仕方ないさ、山田』
『うう・・すまねぇ、ロックの分の券まで使ったって言うのに・・・』
途中で棄権した彼らも参加賞は貰っていたようだ。彼らは霊能たちが話しかける前にとぼとぼと帰って行った。
「ティッシュか・・・出来れば一等を取りたいもんだな」
『霊能、一等じゃない・・・特賞を狙うんだ！』
「じゃあそうするかな・・・とりあえず列に並ぶ・・・おっ」
「あ、霊能さんじゃないっですか！」
「ツキミか、お前も福引に？」
「そうっです！！あたしの狙いはただ一つ！！四等・・・タミフルたみ子抱き枕っです！！」
『四等・・・欲しいどすぇ・・・』
『一人で来たの？』
「いえ、ゴン兄と来たんっですが・・・あ、ゴン兄は人を助けたらお礼に福引券貰ったらしいっですよ！」
「ゴンザレスが来てるのか？」
「そうなんっですけど・・・はぐれちゃいました・・・」
『ゴンザレスかー・・・霊能の友達だし会ってみたかったんだけどなぁ』
「まぁまた機会はあるさ、とりあえず並ぼうぜ」
こうしてツキミと合流した霊能たちは福引の列に並んだ。と、いっても所詮は福引の列・・・そう長いこと並ぶわけでもないが・・・。
「さっちん、そういや一等ってなんなんだ？特賞しか聞いてないけ

ど・・・」
『ちょっと待つどすぇー・・・チラシによると、一等はなんとＨＤ-ＤＶＤらしいどすぇ』
「超在庫整理じゃねーか、ブルーレイ持って来いよ」
『え？ブルー霊？』
「どんな霊っですか、常に落ち込んでるんっですか、自殺したがりっですか」
『コタツの電源を切ったかどうかやたら気になる霊』
「いてたまりますかそんな霊！！」
「さっちーん、二等はー？」
『えぇと・・・あ、もう順番が来たどすぇ』
『誰からやる？』
『私からやるどすぇ』
そうさっちんが名乗り出る。
さっちんはトライアスロンに出ていないため、参加賞としての福引券は持っていないがアクセサリーショップに行ったときに貰ったのだ。
『お願いするどすぇ』
「はいよ、一回ね」
券を渡してレバーを握る。
福引はガラガラと回して玉を出して、その玉の色で何等かを見るタイプのやつだ。
『むむむ・・・どすぇ・・・』
（温泉も行きたいどすけど抱き枕も欲しいどすぇ・・・）
（どうやって引き当てるか・・・確かはずれの玉は軽いからゆっくり回すとはずれがさきに動いて、あたりが出にくいと聞いたことがあるどすぇ・・・）
（でも・・・所詮は福引・・・最終的には運どすぇ）
『では・・やるどすぇ！』
（当たりが出やすいように勢いよく！！）

ガラガラガラガラッ！！
コロン
『どうどすぇ！！』
［赤］
『・・・赤い玉？・・・なんかよさそうな色どすなぁ・・・』
「おお！これは・・・おお～あた～り～！」
「マジか！やったなさっちん！」
「すごいっです！おめでとうっです！！」
『流石さっちん！おめでとう！！』
『えへへ・・・で、何等なんどすぇ？』
「はい、二等の・・・」
『おお！二等どすか！！』
「こけしだよ、おめでとう！」

『『「「・・・・・・」」』』

空気が、凍った。
『・・・さっちん、なんというか・・・、うん』
「ああ・・・二等・・・えと・・・あと・・・おめでとう・・・」
「う、うわー・・・す、すごいなー、うらやましいっですー・・・」
『・・・慰めは・・・いらないどすぇ・・・』
さっちん、福引により意気消沈。
「よ・・・よし！次は俺がやるぜ！！」
『頑張れよ霊能！』
「ファイトっです！」
そうして霊能が福引のレバーを持つ。
（狙うは特賞の温泉旅行・・・）
（友達と！友達と温泉旅行！！）
（・・・家族でとかじゃなくて！友達と！！）
（ああ・・・思い出すははるか昔・・・親父とお袋と温泉旅行にい

ったっけなぁ・・・）
（親父との卓球は絶対勝てなかったなぁ・・・卓球のサーブで零式ドロップは反則だと思うぜ・・・しかもしっかり一回バウンドしてから発動って・・・）
（思考が飛んだな、そう！狙うは特賞！それを引き当てるにはどうするか！）
（福引は運、ならば運を掴み取るためには・・・）
（・・・筋トレだ！）
「よし、やるぜ！まずは腹筋！そして腹筋！さらに最後に腹筋だぁぁぁ！！」
『霊能が壊れたっ！？』
「霊能さん！？どうしたんっですか！？」
「ハッ！？ああ・・・ごめん、取り乱した。よし・・・やるぜ・・・！」
ガラガラガラガラ！！！！
コロン
「よし！どうだ！！」
［金］
「きたぁぁぁぁ！！！これは特賞だろ！」
『おお！ナイスだ霊能！！僕は霊能を信じてた！！』
「おお～！流石霊能さんっです！！」
「どうだおっちゃん！」
「いや、はずれだよ。はいこれティッシュね」

「「『・・・・・・』」」

空気がパーフェクトフリーズ。
『霊能・・・まぁ・・・あれだ。たしか今ティッシュ切らしてたよな、良かったじゃないか』
「霊能さん、・・・これ鼻セレブっですよ、高いやつっですよ」

「・・・それフォローになってねぇ・・・」
霊能太郎、福引により心に傷を負う。
「よよよよっし！つぎはあたしが挑むっですよ！」
『おう！頑張れよツキミ！！』
「たのもーっです！」
そんな感じでツキミもレバーを握る。
（二人あたしの後ろで意気消沈しているっですけど・・・）
（二人の犠牲の上に！あたしは抱き枕を手に入れるっですよ！！）
（大切なのは思いの強さ！！あたしのタミフルたみ子への思いは誰にも負けないっです！！）
（前の二人は勢いよく回して失敗した・・・いや、さっちんさんは二等っですけど・・・）
（あたしはその経験を生かして！！ゆっくり回してやるっですよ！！）
「いざ！尋常に！！勝負！！！」
カラカラカラ・・・
コロッ
「どうっですか！！？」
［緑］
「おお！なんか四等っぽい色っです！」
『戦隊モノでも緑は四番目っぽい！これは来たんじゃないか！！？』
「さぁおじさん！あたしは何等っですか！！？」
「これは・・・おお！！・・・ぅ四等だな」
「キターー！！あたしの時代がキターーーっです！！！蘇我さん！聞きました！？四等きましたよ！！？」
『いやいまいち聞き取れなかったけど・・・』
「おじさん！はやく商品を！！」
「まぁそう慌てなさんな・・・はい、どうぞ」
と、言って渡されるもの。それを見て固まるツキミ。
「・・・これ・・・なんっですか・・・？」

「何って・・・四十四等の商品だよ。単二電池三本だ」

「『・・・・・・』」

困惑した空気・・・

「ちくしょぉぉぉおおお！！！なんっですか！！なんなんっですか四十四等って！！しかも単二電池三本って！！・・・使い道ほとんどないっですよ！！あっても間違いなく一本あまりますよ！！」

『まぁ・・・うん、ティッシュよりはマシじゃない？』

「まだティッシュなら鼻をかめますようわぁぁぁああん！！！」

ツキミ、福引により錯乱・・・のち絶望。

『僕が最後だ！！いざゆかん！！』

そして最後になったがレバーを握る蘇我。

（温泉旅行・・・！！僕は絶対温泉旅行へ行くんだ・・・！！）

（温泉といえばロマン！！一つ壁の向こうには男のロマンが詰まっている！！）

（紳士的にこのロマンは追い求めなくてはいけないものだ！！）

（大丈夫、幸い前の三人がはずれの可能性を少しでも潰してくれた・・・）

「蘇我ぁ・・・はずせぇ・・・」

『蘇我はんもいっしょにぃ・・・』

「絶望を体感するっですよぉ・・・」

（後ろからゾンビの声が聞こえてくるけど気にしない！！気にしたら負けだ！！）

（大丈夫、運なんて自分で掴み取るもの・・・！！そう、ｍｙブラザーも言っていた・・・）

（紳士に不可能は・・・無い！！！！）

『行くよぉぉぉ！！！』

ガラガラガラガラ！！

コロン！

『どうだ！！』
［白］
『っく・・・！っでも・・・金がティッシュなんだ・・・！まだ可能性がある・・・！！』
「ああ～これははず・・何！？・・・おめでとう、見てみろ・・・ここに［特］と書いてあるだろう？」
そう、蘇我の引き当てた白い玉には・・・字が書いてあった。
その文字は・・・［特］
『やった・・・僕はやったんだ・・・！紳士に不可能は無かったんだ！！』
「はいおめでとう、これ特別残念賞のうまい棒ね。めんたいこ味だよ」
『・・・・・』
空気は凍らない。
ただそこには・・・呆然と立ち尽くす幽霊と・・・
「「『蘇我（さん）』」」
三人の笑うゾンビがいた。
『・・・なんだい？』

「「『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　Ｕｎｄｅｒｇｒｏｕｎｄ』」」
『ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！』
蘇我、福引により男泣き。
後ろの三人は少し生気を取り戻していたという・・・。

とぼとぼと歩く帰り道。
そこには落ち込んだ四人がいた。全員テンションが低い。
「はぁ・・・結局たいしたものは当てれなかったな・・・」
『そうどすなぁ・・せっかく二等あてたのに・・・』

『こけしが二等って・・・さっちん・・・ついてないね』
「はぁ・・・単二電池って・・・あ、ゴン兄っです・・・おーいゴン兄ぃ～！」
遠くに兄を見つけて呼ぶツキミ。
そういえばツキミは兄と来ていたのだ。福引のショックですっかり忘れていた。
「おっすゴンザレス！久しぶり！」
「おお！太郎ではないか、おぬし・・・なかなか個性的な仲間たちに囲まれておるなぁ」
『あ、どうも。蘇我入鹿です』
『山村貞子どすぇ～』
「某はゴンザレスと申す。そこにいるツキミの兄だ。・・・よろしく頼む」
「・・・？個性的ってどういうことだ？」
「入鹿と貞子は幽霊と妖怪であろう？まぁ仲良く出来ているならばこれほど良いことはない。二人とも、太郎を頼む」
『ははは・・・大丈夫、霊能はいいやつだよ』
『そうどすぇ、頼まれたって嫌わないどすぇ』
「確かに個性的といえば個性的っですね・・・くっちーさんや小次郎さんも人外ですし・・・馴染みすぎて違和感がなかったっですよ・・・」
「・・・そうだ、おぬしらこれを受け取ってはくれぬか？先ほど福引をしたら当たってのぉ・・・某は仕事の都合により行くことができぬのだ」
そう言ってゴンザレス（初登場）が取り出したのは・・・
紛れも無く、先ほどの福引の特賞・・・温泉旅行のチケットである。
「え・・？貰っていいのか？」
「ああ、構わん。某が無駄に持つよりは幾分もましであろうよ」
『ありがとぉぉぉぉ！！！ゴンザレスさん！本っ当にありがとうご

ざいます！！』
『ありがとうどすぇ！！ゴンザレスはんはいい人どすぇ！！』
「霊能さん！それ何人まで行けるっですか！？」
「えぇと・・・このチケットで四人までだな」
「あたしも！！あたしも行っていいっですか！！？」
「ああ！もちろん！！」
「ゴン兄大好きー！！」
「こら、抱きつくなはしたない。・・・では当日、某の分も楽しんでくるとよい。ツキミ、帰るぞ」
「ゴンザレス、ありがとうな！」
「・・・構わん。ではな」
『バイバイどすぇ～』
『ではまた！！』
「よし！蘇我、さっちん！今度は・・・温泉旅行へ行くぞ！！」
『『おぉー！！』』
　こうして予想もしないルートから温泉旅行を手に入れた霊能たち。さっきまでの落ち込みようはどこへ行ったのかと言いたくなるほどのハイテンションで家へと向かうのであった。
『あ！・・・ゴンザレスはんにお礼としてこけしをあげればよかったどすぇ』
『さっちん、それは普通に嫌がらせに近いから止めといたほうがいいね』

第二十三話　霊能太郎と温泉旅行～出発～

『ぬるい！！ぬるいぞたみ子！！その程度では俺のふくらはぎは負けん！！』
「っく・・・なんて硬いふくらはぎ・・・流石怪人、アイアン☆ふっくらハギ男・・・」
『今度こそ我が盟主、暗黒超大魔王様の野望であった気がする世界制服とかなんやらを完遂させるときのような気がする！！』
「まずいわ・・・私の超絶デストロイこむら返りが歯が立たない・・・でも・・・負けられない！！」
『諦めるんだなタミフルたみ子ぉ！！貴様のような軟弱者が我が盟主様に逆らったことを後悔して死んだり死ななかったりすればいいわぁ！！』
「どうする・・・落ち着きなさいたみ子・・・そう、落ち着くのよ・・・落ち着くためにはどうするの・・？そうよ！タミフルを飲めば・・・！！」
『何ぃ？すでに変身した状態でさらにタミフルを飲むだとぉ・・・貴様！親にもらった健康な体がどうなってもいいのか！！？』
「ヤッフゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！落っち着ぅぅぅいたぁぁぁぁぁ！！！！！」

第二十三話　霊能太郎と温泉旅行～出発～

「落ち着いてたみ子ちゃん！！現実を見て！！」
「あれ・・・？きの子ちゃん！？どうしてこんな所に・・・」

「きの子だって戦えるんだよ？もう置いてけぼりは・・・私の知らないところでたみ子ちゃんが傷ついてるなんて嫌なの！！」
「え・・・だってきの子ちゃん・・・もう変身したくないって・・・戦いたくないって言ってたじゃない！！」
「確かにきの子は変身するたび幻覚を見たりする自分が嫌いだけど・・・たみ子ちゃんが戦ってるのに見てみぬふりをする自分のほうがもっと嫌いなの！！」
「きの子ちゃん・・・」
「いくよ！！マジックパワー！メイクアーップ！！」
［説明しよう！きの子は自家栽培のマジックマッシュルームを食べることでマジックきの子に変身できたはず・・・え、？違う？？ちょそんなハズは・・・ほ、ほらあってるって！！変身できるはずだって！！］
『ふははは！雑魚が二人に増えたか・・・二対一は不公平だと思うぞぉ！！』
「たみ子ちゃん、合体技よ！！」
「うん、きの子ちゃん！！」
「「超絶・・・・たみ子釘バット！！」」
［解説しよう！！超絶たみ子釘バットとは、たみ子が釘バットでがむしゃらに敵を殴りつける技である！！多分］

グシャ！グチャ！！グシャァ！！！

『ぐわぁぁぁざ痛ぁぁぁ例え俺が敗れようとぐへぇ！痛！いつかかな痛！ブフゥ！！必ず盟主様はせかブッペナァ痛！！・・・最後くらい普通に話さして？』
「ひひゃはははは！！！！！楽しい！！楽しいなぁぁぁあああああ！！！！！」
「頑張れたみ子ちゃーん！！」
「ふひひ・・・ヒヒヒヒひひひはははぁぁぁあああああ！！

！！！」
『もういい・・・ぐは痛ぁ！！あああぁ・・・さらばだ・・・』
「もう終わったよたみ子ちゃん！敵はやっつけたよ！！」
「ふひひ・・・あはっはっはははははっは！！！！！」
「落ち着いて！！落ち着いてよたみ子ちゃん！！！！・・・・落ち着けやボケェ！！！！！」
「あっべらっぱぁ！！！」ズザァァァァ！！！！
「ったくも～、たみ子ちゃんはすぐにテンションが上がっちゃうんだからぁ・・・やっぱり私がいないとだめだね♪」

「お～い」
「・・・」
「おーいツキミー」
「今いい所だから静かにして欲しいっです！！」
「もう出発だぞ・・・」
「もうちょっと！！もうちょっとお願いしますっです！！」
『早く行こうよ・・・ほらさっちんも・・・』
『もうちょっとなんどすぇ！』
「お前らなぁ・・・置いてくぞ？」
「『せめて次回予告まで待って欲しい（っです）（どすぇ）！！！』」
『まぁ・・・まだギリギリ電車は間に合うからさ・・・』
「そうだが・・・仕方ねぇなぁ・・・」
今日は待ちに待った温泉旅行の日。霊能たちは温泉宿へと行かなくてはならないのだが・・・
ツキミとさっちんがアニメを見ているせいでなかなか出発できないでいるのである。
「ふぅ～・・・やっぱりたみ子は最高っです！！」

『きの子もなかなかどすぇ～』
「終わったか？んじゃ急ぐぞ！電車は待っちゃくれねぇんだからな」
『了解どすぇ～』

◇

「ついたー」
『速くない！？いいの！？もっとこう・・・新幹線の中での会話とか駅でのハプニングとかは描写しなくていいの！！？』
「大丈夫だ、問題ない」
「まだ出発したばかりのような気がするっですよ・・・」
『軽い時差ぼけどすぇ～』
こうしてたいした描写も無く霊能たちは旅館についた。
別に近くに旅館があったわけではなく、きちんと新幹線に乗ってここまで来ている。ただ時間が飛んだだけである。
とまぁこの話はとりあえず置いといて・・・今現在霊能たちは旅館の目の前に居るのである。
「なかなかいい感じの旅館だなー」
『そうどすなぁ・・・純和風な感じがするどすぇ』
「最高っですよ！くぅ～きてよかったっです！！」
『さぁみんな温泉！温泉だよ！！！さぁ入ろうすぐ入ろうテキパキ入ろう！！』
「・・・蘇我、なんでそんなに必死なんだ？」
『ひひひひ必死！！？そそそんなわけ無いじゃないか！はやく温泉につかってゆっくりしたいだけだよ僕は多分！！』
「・・・多分ってなんっですか怪しいですねぇ・・・」
『とりあえずは旅館に入るどすぇ！』
「そうっですよ！チェックインするっです！！」

旅館に入った霊能たちは、二部屋に分かれた。
当然部屋分けは霊能&蘇我、さっちん&ツキミである。そこで荷物などを置き、もう一度合流した。
「いやぁ～いい部屋っですよ～」
『で、これからどうするんどすぇ？』
『それはもちろん温泉に入ろうよ！！』
「う～ん・・・温泉は夜にしないか？昼間はなにかこう・・・体を動かすスポーツとか・・・」
『温泉と言えば卓球どすぇ』
「卓球はやっぱり温泉のあとっですよ、他の何かはないっですかねぇ」
『温泉は夜か・・・まぁ確かに暗闇のほうが・・・』
「ここの旅館のすぐ近くに何かレジャー施設でもあればいいんだが・・・」
『それならばすぐそこにボウリング場があるでござるよ』
『小次郎はんの登場に最近は驚かなくなってきたどすぇ』
「でもボウリングっですか・・・いいっですね！やりましょう！！」
「ボウリングかぁ・・・俺やったこと無いんだが・・・」
『大丈夫だよ、僕も生前何回かやったことがある程度だし』
『よしならば行くでござるよ！』
と、言うことで彼らは近くのボウリング場、「グラウンドボール」に入っていった。
そこで三ゲーム分のお金を支払い、二百円だと思っていた貸し靴が倍の値段の四百円であったことに舌打ちし、レーンについてゲームを始めた・・・。

◇

みんな！こんにちわー！
始めまして！棒（ぼう）　燐子（りんこ）です♪
今日はおじいちゃんといっしょにボウリング場へ来ましたー！
いやぁ～ボウリングって楽しいよね！
燐子は楽しいものだと思ってたよ！

・・・今の今までね・・・・。

『霊能ー力抜いて投げろよー』
『そうでござる、強く投げれば言いと言うものではないのでござるよ』
「おう・・・いくぜ！！そぉい！！」
ズゴーン！！！
『壁に穴が空いたどすぇ・・・』
「ノーバウンドっでしたね・・・」
「なぁ・・・壁に穴空いたけどさ・・・これ、俺のせいか？」
『当然だよ！！！だから力抜いてって言ったのに！！』

燐子ですが、となりのレーンの人たちがなんか怖いです。
何ですかあれは！！どうやったらボウリングの玉で壁を貫けるんですか！！
ついでに何で一人帯刀してんですか！！銃刀法違反は！！？警察は何をしてんですかぁぁぁ！！！
おじいちゃん！！おじいちゃん助けて！隣のレーンの人たちがなんか怖いんだけど！！

「・・・血が踊るわい・・・」

おじいちゃんもなんか怖いぃぃぃぃ！！！
どうしたの！！？なに変なことを言ってるの！！？

「燐子や・・・ワシを甘く見るなよ・・・？」
別に甘く見てねぇぇぇぇ！！！
ああ・・・そういえばおじいちゃんは昔プロボウラーだったって聞いたことがあったけど・・・まさか本当だったの！？
「いや普通に営業マンじゃったよ」
ちくしょうなんか恥ずかしい！！ってか普通に心を読まないでよ！！
あれ？隣のレーンが静かになったな・・・どうしたんだろ？
「そういえば罰ゲームとかってどうするんだ？」
『ああ・・・そうだね、どうしようか』
『いいことを思いついたどすぇ～』
「お！なんっですか？？」
『ビリには私から・・・シャンプーしてるときに感じる後ろに何かがいる気がするアレがやたら強く感じる呪いをかけてあげるどすぇ～』
ピンポイントォォォォォォォォ！！！！！
罰ゲームが呪い！！？物騒すぎるよ！！
「ワシの背後にいるのはばぁさんじゃ・・・」
ボケないでおじいちゃん！！おばあちゃんまだ生きてるよ！！
「さて・・・そろそろ投げるかな・・・」
おじいちゃんが構えた・・・、なんだか・・・いつものおじいちゃんじゃない・・・なんかこう・・・達人のオーラのようなものが・・・
「いくぞよ・・・ふぬっぷ！！」
掛け声カッコ悪！！
あ、でも投げられた球はゆっくりと転がっていって・・・右側から左側へと急激に曲がった！！
そしてガーターへ！！
・・・オイ！！
鮮やかなカーブを描いてガーターじゃねぇか！！おじいちゃん！

こっちを見て「てへっ」とかしないでキモイから！！
「おい見たか隣の爺さん・・・」
『凄いね・・・なんて鮮やかなカーブだ・・・』
『あれはボウリングを極めているでござるな・・・』
極めてたらガーターなんて出さないよ！！凄い誤解してる！！
「ふ、老師と呼ぶが良い」
おじいちゃぁぁぁぁん！！！調子に乗ってんじゃねぇぇぇぇ！！！
『さて、次は僕の番だね。・・・それ！！』
あ、学生服の人が投げた。
でもあれはガーターのコースだなぁ・・・たいして回転もかかってないみたいだし・・・

ギュギュギュギュギュ！！！

ってぇぇぇぇぇ！！！？途中から超回転しはじめた！！？
そしてそのままストライク・・・どういうことなの？？
「蘇我！ポルターガイストは反則じゃね？」
『何を言う、紳士は遊びにも全力をつくすんだよ』
「でもイカサマみたいなもんっですよね・・・」
『蘇我はん・・・ずるをするのは良くないと思うどすぇ』
『二度としないよさっちん！！約束だ！！』
『さっちん殿に弱いってレベルじゃないでござるなぁ・・・』
ポルターガイスト？？って確か・・・超能力みたいなものだっけ？
凄いなぁ・・・超能力が使えるんだ・・・
「燐子よ、ワシも超能力がつかえるぞ」
「え？そうなのおじいちゃん、見せて見せて！」
「ただちょっとＭＰが足りないだけなんじゃ」
クソジジィが・・・使えねぇ・・・。
どこぞの山田君みたいなこと言いやがって・・・岩男さんをみならえ！！

はぁ・・・もう帰りたい・・・・。

◇

「楽しかったなぁー」

ボウリングの最終的なスコアは蘇我と小次郎がターキーを出し、かなりの接戦を繰り広げていた。だが最終的にはぎりぎり蘇我が勝ったようだ。

「それにしても・・・となりの爺さんは凄かったな」

『そうだね・・・途中から必殺技とか叫んでたもんね・・・』

『お孫はんの達観した表情が印象的だったどすぇ』

「あのおじいさん・・・なんだかんだでストライク連発していたっですよ・・・」

『ボウリングの達人・・・まさに老師と呼ぶべきお方でござるな』

「でもあの必殺技はいろいろまずい気がするぜ・・・」

『ああ、あの［ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロングガイザー投げ］ね・・・』

「完成度高かったっですねオイ」

『でも股間でボウリングの玉を投げるのは自殺行為だと思うでござるよ・・・』

『老師はんも悶絶していたどすぇ・・・』

「孫のねぇちゃんもゴミを見るような目で見てたな・・・」

『さ、さて！そろそろ暗くなったし温泉に入らないかい！！？』

『いいどすぇ～あったまりたいどすぇ』

「んじゃ風呂いこうか、さっさと旅館に戻ろうぜ！」

『うん！！早く行こう！！』

「楽しみっです！！」

『温泉初めてどすぇ～』

『ゆっくりするでござるよ』
「・・・小次郎は入れなくね？」
『ぬらりひょんに不可能は無いでござる』
「あ、小次郎さん！」
『どうしたでござるかツキミ殿』
「覗いたら殺すっですよ。リアルに」
『拙者はそんな不埒な真似はせぬでござるよ』
『蘇我はんもどすぇ～』
『ははははさっちん、紳士がそんな非紳士的なことをするわけが無いじゃないか。心配しなくても大丈夫だよ』
『・・・？蘇我はん、やけに素直どすねぇ・・・』
「蘇我、本当に覗かないのか！？お前らしくないな・・・まさかお前偽物かっ！！？」
『霊能が普段僕をどんな目で見ているのかはよぉく分かったよ・・・』

第二十四話　霊能太郎と男のロマン

「絶対っですよ！？絶対覗くなっですよ！！？」
「はいはい分かったからはよ風呂入れっての」
『蘇我はん・・・本当に覗かないんどすぇ？』
『大丈夫だよ、覗きはしないって』
「ならいいんっですけど・・・じゃ、行きましょうかさっちんさん」
『おう！どすぇ～』
ツキミとさっちんが女湯へと向かっていく。
そう、ボウリングで軽く運動した彼らはやっと今回の旅のメインである温泉に入る時間になったのだ。
「それにしても・・・蘇我、本当に覗かないのか？本当にお前は蘇我なのか？」
『そうでござる、あんなに温泉を楽しみにしていたのは蘇我殿であるのに・・・どうしたんでござるか？』
『霊能、小次郎・・・僕がこれからするのは覗きなんて低俗な事じゃない。・・・芸術鑑賞だよ！！』
「あ、こいつ本物の蘇我だわ」

第二十四話　霊能太郎と男のロマン

カポーン・・・
ザパァ・・・
「あ～・・・露天風呂最高だ・・・」

『そうでござるな・・・温泉もたまにはいいものでござる・・・』
『そうだね・・・でも時間はそんなに多くないよ、行動は早く起こさないと』
「いや俺らは覗きなんてしないんだが・・・」
そんな霊能の言葉を聞き、これ見よがしにため息をつく蘇我。
『霊能、僕は自分の欲望のために芸術鑑賞をする訳じゃないんだよ。そう・・・これは男たちの歴史と期待を背負っているんだ』
「歴史と期待？」
『遥か昔から行われてきた芸術鑑賞という行為・・・成功例は数少なく、失敗すれば殺されても文句は言えないだろう・・・ではそんなリスクを背負ってまでを人はなぜ芸術を追い求めるのか、ただ単に女体を見たいだけならエロ本を買えばいい、写真じゃ物足りないならアダルトなＤＶＤを見ればいい、どうしても実際に見たいならソープでもなんでもそういうお店に行けばいい！！でもね・・違うんだよ・・・、それらと女湯は同列に見てはいけない！許されない！！それは何故か！？禁止されてるから？迷惑をかけるから？お金を支払っていないから？？・・・・否だ！！断じて否だ！！！！女湯にはそれら各種エロとは全く異なった次元での魅力が存在するからだ！！そもそも何故遥か昔から行われている行為なのにもっと全力で禁止しないのか？その答えは簡単・・・これは挑戦なんだよ！！女湯から・・・漢たちへの！！ただ単に女湯を覗かせないだけならば女湯のガードを壁一枚・・・しかもよじ登れば上から見えるなどと言う簡略化されたしきりのみにはしない！！女湯を完全に男湯から切り離すべきだろう！！！？これはただの覗きなんかじゃない！いわば男の意地とロマンをかけた聖戦なんだよ！！！！！』
「・・・挑戦・・・男の意地・・・まぁ・・・確かに言われてみればその通りのような気が・・・」
『霊能殿！？』
『てめぇらずっと待ってたんだろ！？女湯の挑戦に挑む、漢としてこの試練を無事クリアする・・・そんな誰もが笑って、誰もが望む

最高なハッピーエンドってやつを。今まで待ち焦がれてたんだろ？こんな展開を・・・何のためにここまで歯を食いしばってきたんだ！？てめぇのその目でたった一つの楽園を覗いて見せるって誓ったんじゃねえのかよ？お前らだってロマンを追い求める方がいいだろ！？男湯なんかで満足してんじゃねえ、命を懸けてたった一つの女の子の園を覗きてぇんじゃないのかよ！？だったら、それは全然終わってねぇ、始まってすらいねぇ・・・ちょっとくらい長いプロローグで絶望してんじゃねぇよ！手を伸ばせば届くんだ！いい加減に始めようぜ、二人とも！！』

「蘇我・・・俺、やるよ。男として・・・いや、漢としてその挑戦、受けて立つ！！」

『霊能殿ぉ！！？どうしたでござるか！！？霊能殿ぉぉぉぉ！！？』

『霊能・・・君なら分かってくれると思っていたよ、さぁ・・・行こうか、親友』

「ああ、男の意地とロマンのためにも！」

『霊能殿ぉ・・・帰ってくるでござるよ・・・』

ザパァ・・・

その時、温泉から何かが出てきた。それが熱い演説に引かれて来たのか、ロマンを求めてきたのかは分からない。ただ分かることは、彼もまた・・・紳士・・・いや、聖戦に挑む一人の戦士と言うことだけだろう。

『ふむ、話は終わったかね？』

「佐悟さん・・・」

『ｍｙブラザー・・・』

『さぁ行こうか、この世の真実を求めて！！』

「『おお！！』」

こうして彼らは一致団結し、芸術鑑賞と言う名の男の意地とロマンをかけた戦いに身を投じることを決めたのである。

温泉には人を惑わす効果があるというのは本当なのかもしれない・・・。

彼らの戦いは、ここから始まるのである。
『ああぁ～・・・いい湯でござるなぁ・・・』
一方こちらは現実と戦うのをやめた。

◇

カポーン・・・
ザパーン・・・

「いっい湯っでっす♪アハハン♪」
『これが露天風呂なんどすねぇ・・・井戸とは大違いどすぇ・・・』
「井戸って・・・ああ、そういえばさっちんさんはずっと井戸に住んでいたんっでしたね。ど～っですかぁ～温泉気持ちぃっですかぁ～」
『・・・最高どすぇ～・・・ほわわわわ・・・』
女湯では壁の向こうで漢たちがロマンを求めて行動を起こそうとしていることは知らない。ただのほほんと露天風呂を満喫するのみである。
ツキミとさっちんが温泉につかってゆっくりしていると、ガラガラガラと引き戸の開く音がする。ここは旅館の露天風呂、他の一般客も当然入ってくるだろう。ツキミとさっちんが軽く引き戸に目を向けると、そこには見覚えのある二人がいた。
『あら？さだこちゃんにツキミちゃんじゃない？偶然ねぇ』
『・・・ああ、根暗にデス娘ね。お久しぶり、まだ生きてたのね』
くっちーと、くっちーのバイト先の店長である。
『奇遇どすぇ～』
「いやだからデス娘って・・・はぁ・・・もういいっです・・・」
『あれ？そういえばさだこちゃんとツキミちゃんがいるって事は霊

能君たちも旅館に来てるの？』
『そうどすぇ～』
「商店街の福引であたしの兄が特賞を当てたんっですよ！で、温泉旅行っです！」
『・・・そういえばくっちーはんと店長はんはどうしてここに来てはるんどすぇ？』
『ああそれはね、私が司会を務めてたとある大会の商品がここの旅行券だったんだけど・・・選手が馬鹿だから全滅しちゃって、それで私の所に券が来たからしかたなく口裂けを誘っただけのことよ』
「あれ？旅行券は四人まで同時に使用できたはずっですよね？彼氏とか誘わなかったんっですか？」
ピキッ！
そんな音が聞こえた気がした。
『アァン？』
ギロリ
そんな音が確実に聞こえた。
『ツキミちゃんちょっとこっち来て！！話があるからっ！！』
「へ？どうしたんっですかくっちーさん？」
（いい？ツキミちゃん！店長に男とか彼氏の話はしちゃだめよ！？）
ヒソヒソ
（え？何でっですか？美人さんだし彼氏の一人くらいいても・・・）
ヒソヒソ
（初めて店長を見た人はすぐに近づいてくるんだけどね、ホラ・・・店長口が悪いから相手が逃げちゃうのよ・・・）ヒソヒソ
（ああ・・・確かに逃げたくなる気持ちも分かりますっですね・・・）ヒソヒソ
（だから店長に彼氏とかは禁句ね？オーバー？）ヒソヒソ
（イエス！オーバー！）ヒソヒソ
『口裂けぇ・・・悪いけど、聞こえてるわよ。ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね』

『ひえぇぇ！私は悪くないぃ～』
『ったく・・・あ、そういえば口裂け・・・わんぱく馬鹿とは最近どうなのよ？今日なんて同じ旅館にいるみたいだしチャンスじゃないの？』
『わんぱく馬鹿・・・あ、霊能はんのことどすぇ？』
『えぇ！？いやいやいやいや霊能君とは・・別に・・・あの・・・その・・・』
「青春っですねぇ～」
『はっきりしなさいよ、好きなんでしょ？』
『すすす好きとかそそそそんなのとかは・・えと・・・うん、まぁ・・・そ、そうだ！ツキミちゃんやさだこちゃんはどうなの！？好きな人いるでしょ！！？』
『逃げたわね、弱虫が』
「逃げたっですね、モロバレなのに」
『私どすかぁ～？・・特にはいないどすぇ～』
『あらそうなの？・・・てっきり私はアホメガネに脈アリかと思っていたのだけど』
『蘇我はんは別に！す・・・好きどすけど・・・それは家族的な意味どすぇ！！べべ別に深い意味とかは・・・その・・・』
「・・・アホメガネで通じるんっですね・・・」
『ツキミはんは！？ツキミはんの話が聞きたいどすぇ！！』
「あたしー？あたしは全然無いっですよー？しいて言えばたみ子を愛してるっです」
『デス娘は相変わらずつまらないわね。自害したほうがいいんじゃないかしら？溺死とかでも許可するわ』
「酷っ！！絶対しな・・・ん？今何か壁の上に見えたような・・・」
『壁の上？ツキミちゃん、特に何も無いみたいだけど・・・』
『はぁ、自害娘は目まで悪くなったのかしら、悪いのは頭だけにしておきなさい』
「・・・せめて自害娘はかんべんして欲しいっですよ・・・」

◇

『第一の作戦、信じれば夢は見える作戦は失敗に終わったね・・・』
「まぁなんとなく失敗は読めてたけどな・・・」
『いったいどこに失敗の要素があったって言うんだ・・・完璧な作戦だったはずなのに・・・』
「いやまぁ壁をいくら睨んでも透視能力は開花しないって分かっただけでも一歩前進だぜ」
そう、彼らはつい先ほどまで一心不乱に壁を睨み続けていたのである。
三人の男が壁を睨み続ける・・・
はたから見れば頭のおかしな人たちにしか見えないが、彼らはそれでも本気だったのである。
ちなみにその頃、小次郎は一人空を見ていた。
『ふむ、時間は限られている。失敗した作戦にいつまでもすがりついていても何も始まらんよ。・・・次の作戦だ』
「第二の作戦だな。詳細を」
『第二の作戦はね・・・チェ・ホンマンを追い越して作戦だよ！』
『ふむ、つまり二段肩車という訳だね？』
「二段肩車か・・・順番はどうする？」
『無難に下から霊能、ｍｙブラザー、僕でいいんじゃないかな？』
『ふむ、まぁ身体能力的にはそれが無難かもしれんね』
「よし分かった・・・さぁ佐悟さん！乗ってくれ！！」
『ふむ、・・・さぁｍｙブラザー、私の上へ』
『ありがとう二人とも・・・僕は・・・この戦いに確実に勝利してみせるよ・・・』
作戦は要約するとこうだ。霊能が佐悟さんを肩車する。さらに佐

悟さんが蘇我を肩車する。
三段構えになったところで、下から順に立ち上がる・・・。するとギリギリで壁を越えた高さになり、聖戦の勝利をつかむことが出来るのである。
「ふぬぉぉおおお・・・」
霊能が立ち上がる。
『ふん！！・・・・ッ！！』
佐悟さんも立ち上がる。
すると蘇我の目には楽園が――――
「うわっ！！」

ズダァァァン！！

――――チラ見しかできなかった。
『痛たたた・・・ふむ、どうしたんだい霊能君、急に倒れたりなんかして・・・』
「いや・・・そういえば俺トライアスロンのときの腕輪つけっぱなしなの忘れてて・・・」
『ふむ、ゆえに力及ばず支えきれなかった、と』
「そういう事だぜ・・・第二の作戦も失敗だ・・・」
『ふむ、仕方が無い。第三の作戦に移るしかあるまい・・・ただ問題は・・・』
「・・・蘇我がしたたかに床に頭を打ち付けて風呂が真っ赤に染まったこと・・・か・・・」
そう、三段肩車の一番上から落ちたのだ。相当のダメージである。
だが心配はいらない。彼はすぐに起き上がるだろう。
なぜなら彼は紳士だから・・・。
一方その頃小次郎は温泉が赤く染まったことに相当のダメージを受けていたという。

漢たちの挑戦は続く。

第二十五話　霊能太郎とロマンの向こう側

『まだだ！まだ僕のターンは終わっちゃいないよ！！』
「やめろ！蘇我のライフはもうゼロだぞ！（頭部の出血的な意味で）」
『ＨＡ・ＮＡ・ＳＥ！ドロー！モンスターカード！！』
「モンスターカードってなんだよ！？おい！蘇我！！瞳孔開いてんぞ！！正気を保て！死ぬなぁぁぁ！！！」
『ふむ、幽霊に死ぬなとは面白い発言だね』

第二十五話　霊能太郎とロマンの向こう側

『よし、じゃあ次の作戦を始めようか』
数分後、やっと落ち着きを取り戻した蘇我。
頭の血は絶えず流れているがきっと大丈夫だろう。
「次はどうするんだ？」
『定番中の定番・・・覗き穴さ！』
『ふむ・・・しかしこのコンクリートの壁に穴なんて都合よく空いてないぞ？』
その言葉を聞き、蘇我はどこからかノミとカナヅチを取り出す。
裸のくせに本当にどこから出したんだ・・・。
「まさか蘇我・・・」
『ああ、次は・・・穴が無ければノミで空けたらいいじゃない作戦だよ！！』
『ふむ、斬新な発想だ。さっそく作業に取り掛かろう』

「あ、なんかオチが読めた気がする」
『うおおお！！！』

カン！カン！カン！カン！

音が鳴る。
その音とともにどんどん壁の破片がそこらに落ちていく。
ちなみにノミとハンマーは一人分しか無かったので頑張っているのは蘇我のみである。
『そいやぁぁぁぁぁぁ！！！』
カン！カン！カン！カン！
音が響く。大きな音に比例するかのように壁はどんどん削られてく。
『ふむ、あと少しで私たちはロマンをこの手につかむことができるのだな』
「いや、この展開は・・・なんというか・・・」
『ん？どうしたのだ霊能君。何か思うところでも？』
「いや、なんでもないぜ・・・」
カン！カン！カン！カン！
『そいやっさぁぁぁぁぁ！！！』

ボキィ！！

音が鳴った。
何かが折れるような音。
それは壁からではなく、蘇我の手元から鳴っていた。
『ノミとカナヅチが折れたぁぁぁぁぁぁ！！！』
『ふむ、これでは穴を空けることは無理だな・・・』
「あれ？絶対壁がぶっ壊れてロマンへの挑戦がばれる場面だと思ったのに・・・」

『・・・？霊能、そんな漫画みたいな展開は流石に無いよ・・・』
「風呂場でどこからかノミとカナヅチを取り出したやつには言われたくないな」
『それはそれ、これはこれ』
「うわー・・・納得いかねぇー・・・」
『ふむ、それにしてももう手が無くなったな・・・どうするｍｙブラザー』
『そうだね・・・一応まだ作戦は残ってるんだけど・・・』
「まだあるのか？どんなんなんだ？」
『潜入！蛇の任務にあこがれて作戦』
「ダンボールと温泉の相性は最悪だな」
『ふむ・・・もう私たちには何も残されてはいないのか・・・』
『いいやまだだよ！！霊能！　ｍｙブラザー！！最後の作戦だ！！』
「まだあるのか！？・・・よし最後だ！やろう！」
『ふむ、それで作戦名は？』
『・・・お願い神様大作戦！！』
「・・・内容は？」
『祈る』
『・・・ふむ、全身全霊をかけて祈ろうではないか』

「で！そこで改造超人フランス仮面がたみ子の大事なギターを人質にとって脅すんっですよ！！」
『へぇ、それでどうなるの？』
「なんと！そのギターは別に大事なものじゃなかったのでギターごと［超絶たみ子スカイアッパー］でボッコスカにするんっですよ！！」
『・・・なんとうか・・・斬新な物語なのね、たみ子ちゃんって・・・』

『さっきからうるさいわよデス娘、さっさと口を閉じて窒息しなさい』
「普通に嫌っですよ！！鼻で呼吸するっですよ！！」
女湯はさわがしい。
普段よりも温泉はテンションを上げる作用があるのだ。
『ちなみにそのあとたみ子はギターをフランス仮面に弁償させるんどすぇ～』
『激しくいらない知識ねぇ・・・さだこちゃんもたみ子ちゃんが好きなんだ？』
『もちろんどすぇ～』
「タミフルたみ子は世界的に人気なんっですよ！あたしの住んでる寺の和尚もあたしと肩を並べられるほどのたみ子好きっですよ！！」
『薬狂いのどこに需要があるのかしら・・・口裂け、うちのコンビニも薬狂いのフィギュアとか入荷すべきかしら？』
『いやぁ・・・どうでしょう・・・』
「入荷すべきっです！！売れるっですよ絶対！！」
『デス娘がうるさいから入荷はやめるわ』
「酷いっです！！」
ガッデム！！と言わんばかりのオーバーリアクションで話すツキミ。店長もそれを見て特に悪くは思っていないようだ。
なんだかんだで店長も温泉のひと時を楽しんでいるのである。
『店長はんの意思一つでお店の入荷は決めれるもんなんどすか？』
『当然よ、だって私が店長だもの。商品の入荷もレイアウトも全て私の思いどおりよ』
「ほうほう・・・そういえばなんで店長さんはくっちーさんを雇ったんっですか？美人だからっですか？」
『ああ・・・それは簡単よ』
思わぬ話の展開から自分の話になり、気恥ずかしいが気になるのでよく聞こうとするくっちー。
ごくりとつばをのむ音が聞こえる。

『・・・必死だったからよ』
「へ？。・・・それはどういう・・？」
『面接のときにね、この子だけやたら必死だったのよ。履歴書もまともに書けてなかったけどね』
『履歴書ってどういうことどすぇ？』
『妖怪に学歴なんてあるわけがないでしょ？住所も空き家に住んでるだけだしね。そんなふざけた履歴書を持ってきたのよ。普通なら履歴書の時点で不合格よ』
「ならなんで合格にしたんっですか・・・？」
『言ったでしょう？・・・必死な子は好きなのよ。それこそ好きな人のために頑張るような子はね・・・』
『店長・・・恥ずかしいからもうその話は・・・！！』
『ほえぇ～・・・そんな裏話があったんどすなぁ～・・・』
「くっちーさん空き家に住んでるんっですか？」
『いやそれが前に家が取り壊されちゃって・・・今はちゃんとアパートを借りてるわよ』
『アパートが取り壊されてたときの口裂けの慌てようは面白かったわよぉ？まぬけ顔がスーパーまぬけ顔に進化してたわ』
『あのときは仕方ないじゃないですかぁ！あ、でも今のアパートの大家さんに紹介していただいてありがとうございます・・・』
風呂につかりながらお礼を言うくっちー。
ちなみに取り壊された空き家は今すでに駐車場になっている。彼女が住んでいた形跡は跡形も無く消されていた。
「くっちーさんもいろいろ大変なんっですねぇ・・・あ、二人が今ここにいるってことはコンビニは休みっですか？」
『デス娘・・・あんた馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけどもう手遅れな馬鹿だったのね・・・この馬鹿』
「ば！馬鹿馬鹿言い過ぎっですよ！！馬鹿って言うほうが馬鹿なんっですよ！」
『じゃあアホ』

「くぅぅ・・・凄い敗北感っです・・・」
『で、今は休業中なんどすか？』
『他のバイトに任せてるわよ。正確にはバイト一人とその仲間二人ね。三人ともアホだけど』
『仲間二人・・・？どういうことどすぇ？』
『そのまんまの意味よ根暗、口裂け・・・説明しなさい』
『そこは丸投げなんですね・・・分かりました。ええぇとね・・・バイトの子が悟丈君って言って、バイトになる前からよくコンビニに来てたのよ。なぜかいつも私がレジを打ってる時にしか商品を持ってこない子だったんだけど・・・まぁそれは今は関係ないわね。で、その悟丈君の友達二人が御空君と八壊君って言うんだけど、その二人がとても悟丈君と仲が良くていつもコンビニに来るのよ。で、今回悟丈君にバイトに入ってもらったらその二人が手伝うって言ってくれたから任せてきたのよ』
『へぇ・・・そうなんどすかぁ・・・、悟丈はんってどんな人なんどすぇ？』
『そうね・・・いつも［マジで］と［パネェ］って言葉を使ってるわ。あとちょくちょく私に話しかけてくれるけど・・・』
「けど？」
『・・・私を褒めてくれてるみたいなんだけど、大半は正直何を言ってるか聞き取れないわ・・・』
「・・・なんというか・・・悲しい人っですね・・・」
『店長はんはなんでその人を採用したんどすぇ？』
『・・・その子も好きな人のために必死になれる子だからよ』
「ははぁん・・・そういう事っですか・・・」
キラーン、と目を光らせるツキミ。
人の色恋沙汰には目ざといのが女子高生という生き物なのである。
『そういう事ってどういう・・・』
カン！カン！カン！カン！
くっちーの疑問はなにやら大きな音で遮られた。音は壁のほうか

ら聞こえてくるようだ。
『なんなんどすぇ？』
『さぁ？うるさいわね、死ねばいいのに』
カン！カン！カン！カン！
「ちょっと気になるっですねぇ・・・」
『なんなのかしら・・・？』
カン！カン！カン！カン！
ボキィ！！
「何かが折れた音っですか・・・？」
『口裂け、見てきなさい』
『えぇぇ・・・いやですよぉ・・・』
折れた音がしてから数分後、事件は起こった。
女湯の全員が壁のほうを見ていると、突然

ズドォォォォン！！

岩が降って来たのである。
「・・・は？」
岩は見事に壁に当たり、女湯と男湯を直通にさせる。
壁があった場所には人が三名立っていて、こちらを見ている。

「『『『キャァァァァァ！！！』』』」

『いい度胸ねわんぱく馬鹿、アホメガネ・・・エロガッパ』
「は？え？・・・え？いや・・・」
『霊能、神様はもっとばれないように出来なかったのかな？こんな派手なのは望んでないよ・・・』
『ふむ、エロガッパとは失礼な・・・私は紳士で・・・』
『頭に皿乗っけたおっさんが何言ってんのよ、死ね！！』
「霊能さん！！なんなんっですか！！覗き！！？大胆すぎる覗きな

んっですか！！？」
『見損なったわよ霊能君！！岩をぶつけてまで壁を壊すなんて！！』
『蘇我はん・・・制裁どすぇ・・・』
「いやいやいやいや！この壁は事故！！俺たちは悪くない！」
『そう！ただ僕らはもっとばれないように覗くつもりだったんだよ！！』

シーン・・・

この擬音がもっとも似合う瞬間であろう。
蘇我の発言で、時が止まった。
「霊能さん・・・信じてたのに・・・残念っですよ・・・［陰陽術奥義　裁きの雷］！！！」
『霊能君・・・安心して、みね打ちだから・・・でも、覚悟はしてね・・・？』
『蘇我はん・・・土に還るどすぇ・・・［呪殺式　千切り］！！』
『「ギャァァァァァァァァ！！！！！」』
『あんたの相手は私よエロガッパ・・・』
『ふむ、落ち着くんだレディー・・・そんな起こった顔をしては美人が台無しだよ。君ほどの美人なら笑っていれば彼氏も引っ張りだこさ・・・』
ピキッ！！
これは店長から聞こえた音。
ピキピキッ！！
これは周りが凍っていく音。
佐悟さんの言葉を聞いた店長は、スタスタと佐悟さんのもとへ歩いていく。
いつのまにか右手には氷で出来た大きなハンマーが。
『死ね』

グシャァ！！

こうして霊能たちのロマンを求める聖戦は敗北で終わった・・・。

ちなみにそのころ小次郎はサウナで汗を流していたという・・・。

◇

『覗かないって言ったどすぇ・・・・』

『いや！違うんださっちん！！あれは覗きではなく芸術鑑賞で・・・・』

『誤魔化せないどすぇ！！』

ここは霊能たちの部屋。

あの後いったん風呂を出て、浴衣に着替えて霊能たちの部屋に集まっていた。

お互い顔を知らない人もいたので、自己紹介もした。

ちなみに霊能たちは正座している。まだ説教は続いているのだ。

「はぁ・・・まさか霊能さんが覗きなんて信じられないっですよ・・・いったいどうしたんっですか霊能さんらしくない・・・」

「いやぁ・・・なんというか・・・旅行先で友達と意味も無くはしゃぐのに憧れてて・・・ゴンザレスはそんなにはしゃぐやつじゃなかったし・・・」

「確かにゴン兄はそういうのに向いてないっですけど・・・」

「それに男のロマンと歴史からの挑戦といわれたらもうやるしかないって・・・」

『はぁ・・・私はまぁ・・・もう許すわ。もうしちゃだめよ？』

「もう満足したからな！絶対しないぜ！！」

いい笑顔で言う霊能、こいつは起こられている自覚があるのだろ

うか。
『エロガッパ、慰謝料は二百万で許すわ』
『二百万！？・・・ふむ、もうちょっとまけてもらえないだろうか・・・十万くらいに・・・』
一方こちらでは大人の生生しい話が繰り広げられていた。
『佐悟はんもどうして覗きなんかしたんどすか・・・！』
『ふむ、そこに世界の真実があったからだよさっちんくん』
「見事なほど意味が分からないっです」
「・・・そういや佐悟さんは結婚してるよな？こんなことしてて奥さんは怒らないのか？」
その質問を受けて、佐悟は少し表情を変える。
『ふむ・・・家内は・・・もう死んだよ。昔にね』
「え・・・あ、ごめん佐悟さん・・・そんなつもりじゃ・・・」
『ふむ、別に構わんよ霊能君。その程度のことで怒っていたら紳士として失格だからね』
『そういえばｍｙブラザーが紳士の道を歩み始めたきっかけってなんだったんだい？』
『あ、私もちょっと気になるどすぇ』
『・・・そうだ・・な。今夜はいい月だ・・・いいだろう、紳士道を歩み始めるきっかけとなった・・・私と家内・・・青葉の話をしようか・・・』

第二十六話　霊能太郎と佐悟という男　前編

『ふむ・・・私は昔、会社の社長をしていてね・・・まぁ社長と言っても私が立ち上げた会社なのだが・・・』
『それで少々強引な手も使ったりしながら、ただがむしゃらに会社を発展させていたんだよ』
『夢も無く、やりたい事も無く、ただ会社を大きくすることだけに私はとらわれていた・・・』
『そんな時だったかな・・・彼女と出会ったのは・・・』

第二十六話　霊能太郎と佐悟という男　前編

『社長！佐悟社長！！』
『うるさいぞ。用件があるならば落ち着いて言え、耳障りだ』
『はっ！スイマセン！！松霜電工の者が玄関にて佐悟社長との面談を求めておりますがいかがいたしましょうか！』
『くだらん、どうせ借金の取立てをしばらく待てとか言う戯言だろう、追い返せ』
『はっ！了解いたしました！』
とある建物の一室、社長と呼ばれた男が部下に指示を出す。
そう、今より若い頃の佐悟である。
彼はイスに深々と座りながら手に取った書類を見つめる。
そうして一通り眺めると書類を破り捨てた。
『使えんな・・・これなら初めからやらぬほうが良かったものを・・・』

バァン！

佐悟が一枚一枚目を通していると、無造作に社長室のドアが開けられた。

「お願いだ佐悟さん！あと一月・・・いや！一週間でもいい！！だから・・・」

『貴様！動くんじゃない！・・・ッ！失礼しました！今すぐにこの者を排除いたしますので！！』

『松霜か・・・先に契約を破ったのは君のほうだっただろう？何をいまさら・・・』

「なっ！ふざけるな！！あれだけ下請けに根回しをしておいて・・・ッ！！」

『私が根回しをしたと言う証拠はあるのかね？・・・無いのならばそれはただの名誉毀損だよ』

「しょ！証拠は無くとも動機はあるだろう！！佐悟！！お前はわが社が邪魔だったんだ！メキメキと業績を上げているわが社がなぁ！！」

『自意識過剰も大概にしたまえ、私は松霜電工を邪魔だと思ったことなど一度も無いよ。・・・ただ目障りだとは思ったがね』

「な・・・！てめぇぶっ殺すぞ！！」

『ふぅ、時間を無駄にした。おい、こいつをつまみ出せ。抵抗するなら処分しても構わん』

『はい！了解しました！！』

「おい！離せ！！クソがぁぁぁ！！！」

バタン！！

『これで松霜は再起不能だな』

人のいなくなった社長室で一人天井を見上げる。
計画を成し遂げたというのに、男の顔は暗い。
彼はふと、窓の外を見上げて昔からの口癖にもなっている言葉をつぶやいた。
『・・・私は一体何がしたいのだろうか・・・』
この言葉の答えは誰からも返ってこない。
こんな生活を、佐悟はここ何年も繰り返していた。

彼は幼い頃から天才だった。
何をやらせても超一流、勉強も運動も。

彼も幼い頃から天才だと自覚していた。
周りの河童よりも泳ぎはうまく、水術も得意。
少し時間をかければ大人たちに出来ないことでも簡単にすることが出来た。

だが・・・その才能を遺憾なく発揮していると、周りから同族はいなくなっていった。
周りの者たちは自分たちに出来ないことを難なくこなす彼に恐怖の念を抱いたのだ。

いつの時代でも異端は排除されるものである。
気がつけば彼の周りには誰も残っていなかった。
友達も、親戚も、親でさえも。

彼はあるとき自分が生まれ住んだ場所を捨て、旅に出た。
旅の目的は二つ、生きる場所と生きる意味を求めてだ。

旅の途中、友人も出来た。
真面目な男とすこし不真面目な男だが信用できる二人だった。
彼らと出会ってからの佐悟は、昔より明るくなった。

だが、相変わらず生きる意味・・・自分が何をしたいのかは分からなかった。
旅にも飽きた頃、友人二人に佐悟は真面目に相談を持ちかけた。

『私は一体何をしたいのだろうか、私の生きる意味は何なのか』

友人の一人、不真面目な方は少し考え、こう答えた。

『んじゃ会社とか立ち上げて働こうぜｗｗｗそろそろ旅ニートはつらいｗｗｗマジでｗｗｗ』
こうして佐悟は彼らとともに会社を作り、生きる目的が見つかるまでひとまずがむしゃらに働くことにしたのである。

『佐悟社長、顔色がよくないようですが休んだほうがよろしいのでは？』
『そぉーっすよｗｗｗマジでなんかひでぇ顔してるｗｗｗ』
『・・・たしかに上地の言う通りかもしれんな、休憩にするとしよう』
『ひでぇｗｗｗ俺スルーされたマジでｗｗｗ』
『下地・・・お前は黙っていてくれ、頼むから』
佐悟の部下・・・上地（かみち）と下地（しもち）は兄弟である。
兄の上地は礼儀正しく、弟の下地はチャラい。
二人は佐悟の数少ない友人であり、佐悟の信頼を厚く受けている人物でもある。

『そう・・だな、すまんが私は休息をとることにする。あとは任せたぞ』
『はい、了解しました』
『おっけーっすｗｗｗ』
こうして仕事を中断し、佐悟は少し休息をとることにした。
と、いっても特に寝不足などでは無いので休息の内容は主にメンタル面だ。
会社を大きくするのに少々強引な手も使っているので精神的に疲れが出るのである。
ゆえに佐悟は休憩室へは行かず会社の外へ出た。
『会社を出たはいいが・・・はてさてどこへ行こうか・・・』
特に行き先などを決めていたわけではなかった佐悟は普段良く自分が行く池に行くことにした。

池についた佐悟は先客がいるのに気がついた、透き通るような白い肌の女だった。
「あらこんにちわ・・・こんなひっそりとした池にも人がいるのね」
『私も驚きだ、こんな所に私以外の人が来るなんて思いもしなかった』
「あらわたくしが来てはいけなかったかしら？」
『・・・別に構わんよ、ここは誰の土地でもないのだから』
「なら良かった。・・・ところで貴方は何かに悩んでいるのかしら？顔色が優れないわよ？」
『・・・悩みなど無いよ、顔色は普段からこうだ』
「嘘ね。わたくし、嘘吐きが嫌いなの。昔から嘘ばかり言われてきたから」
『・・・どんな嘘を言われてきたのか聞いてもいいかね？』
「・・・いいわよ、まぁ・・・そんなに面白い話じゃないけどね、

それでも聞く？」
『興味がある。聞かせてくれ』
「・・・わたくしはね、小さな頃から病弱だったの。体が弱かったからいつも外には出られなかった、外で遊んでいる友達を見てるだけだった。お医者さんはわたくしを診るたびに同じ事を言ってた。
［すぐに良くなる］ってね。幼かったわたくしはそれを信じていた。すぐに病気は治るんだ、そしたら外でみんなと遊ぶんだ！って。でもなかなかわたくしの体は良くならなかった。そんなわたくしに親はいつも［もうすぐ元気になれる］って言ってた。わたくしはずっと夢を見てたの。それはなんてことない夢、ただみんなと外で元気に遊びたかった。でもね、ある日親とお医者さんが話しているのを聞いてしまった。
［あの子の病気は一生治ることは無い］
わたくしは泣いたわ。すぐに親とお医者さんに問い詰めた。すぐに治るんじゃないのか、もうすぐ元気になれるんじゃないのかって。親も医者も同じ事を言った。［大丈夫、心配することは無い。薬さえ飲めばすぐに治る］そこでわたくしは気づいてしまった、ああ・・・この人たちはわたくしを騙してたんだ、一生治らないって分かってるのに夢だけ見せ続けていたんだって」
『・・・それは親なりの心遣いではないのかね？』
「分かってる！！それくらい分かってるけど！！・・・それでも、許せないのよ。わたくしはそんな嘘望んでいなかった。治らないって分かっているなら教えて欲しかった！！そうすればかなうはずの無い夢なんて見ることも無かった！かなわないと知って絶望することも無かった！！・・・これがわたくしが嘘を嫌いな理由よ」
『そう・・か・・・、興味深い話が聞けたよ。感謝する。・・・では私はそろそろ行くとしよう』
「いや待ちなさい、まだあなたの悩みを聞いてないわよ？」
『・・・どうしても聞くのかね？』
「当然」

はぁ、とため息を吐いて佐悟は一言漏らした。
『・・・私は、何がしたいのか分からないのだよ』
「はぁ？」
『私の生きる意味、と置き換えてもいいかもしれないね。・・・それがいまだに見つからないんだ』
「ふぅん・・・随分小さなことで悩んでいるのね、意外よ」
『む？小さなこととは心外だな』
「そうね、やることがないのならここに来なさい。そして私の話し相手になりなさい。・・・私は暇なのよ、病弱な私の唯一の趣味がこの池に来ること。でもずっと一人じゃ流石に飽きてきちゃうしね」
『いや私は暇ではないのだが・・・』
「わたくしの名前は清水青葉（きよみずあおば）、あなたは？」
『・・・佐悟、川流佐悟だ』
「いい名前ね、じゃあ明日の同じ時間にまたここで会いましょう、ではバイバイよ」
こうして佐悟の前から青葉はいなくなった。

次の日、約束の時間。
別に佐悟にとってはあんな無理やり取り付けられた約束をわざわざ守る必要は無かったのだが、何故か行かなくてはならないような気がして、佐悟は池に来ていた。
「あら、先に来ていたのね。待たせてしまったかしら？」
『ああ、それなりに待ったよ。約束を取り付けたのは君だろうに』
「・・・そういう時は別に待っていないよと答えるべきよ。女性の扱いがなってないわね・・・でも来てくれたのね、うれしいわ」
『それで、何のようだったのかね？』
「何って・・・暇つぶしに決まってるじゃない。佐悟は何を言ってるの？」

『何か納得がいかんな・・・』
この日、彼らはどうでもいいことを話し合い、また明日会う約束を取り付けて別れた。
それからというもの、来る日も来る日も彼らは池でなんてことのない会話を楽しんだ。
いつしか、彼らは随分親密な仲になっていた。

第二十七話　霊能太郎と佐悟という男　後編

『佐悟社長、会社を途中で抜けるようになってから・・・とてもいい顔をするようになりましたね』
『そうか？私は以前となんら変わらんよ』
『またまたぁｗｗｗ嘘ばっかりｗｗｗ』
『・・・嘘はいかんな、青葉に嫌われてしまう』
『『・・・ッ！！』』

第二十七話　霊能太郎と佐悟という男　後編

『佐悟社長！青葉さんとはいったい・・・！！』
『聞いちゃったｗｗ聞いちゃったｗｗｗぜってぇ女の名前だｗｗｗ佐悟社長にも春がｗｗｗ』
『・・・はぁ、青葉はそんなに君らが興味を持つようなことではないよ。ただ・・・私の結婚相手だと言うだけだ』
『『・・・・・・・・』』

『『ハァァァァァァァァ！！！！！？』』

『ちょマジでマジで！！？嘘まジで！！？えっちょはぁ！？』
『落ち着け私落ち着け私・・・そうだ、素数を数えて落ち着くんだ・・・素数は一と自分以外では割ることの出来ない孤独な数字・・・私に勇気を与えてくれる・・・２・４・６・８・１０・１２・・・』
『下地、慌てすぎじゃないか？上地、それは偶数だ。・・・ったく、

私の結婚ごときでどうしたんだ？二人とも・・・』
『慌てるわぁｗｗ！！マジでざけんなよｗｗｗ』
『佐悟社長、それは本当ですか？』
『本当だ、もうおなかに胎児もいる』
『『ハァァァァァァァァァァ！！！！！？』』
こうして佐悟と青葉は結婚し、子供も生まれた。
子供の名前は二人で考え、悟丈（ごじょう）と名づけた。
結婚式は青葉の要望でさほど目立たないものにし、少人数で祝った。もとより佐悟に親戚はおらず、青葉もすでに両親は他界していたので人数を呼びようも無かったが。

それからと言うもの、彼らは幸せに時を過ごした。
いままでの不幸を取り戻すかのように笑顔を振りまいていた。
だが、そんな日常も長くは続かなかった。

「佐悟、久しぶりにわたくしたちだけであの場所へ行かない？」
『構わんよ、たまにはいいだろう。では悟丈は・・・そうだな、上地と下地に預けておこうか』
二人の最愛の息子を友人に預け、二人が出会った池へと歩く。
「ふふ、なんだか楽しみね。昔に戻ったみたい」
『昔に戻りたいのかね？』
「それは無いわよ、だって今わたくしは幸せですもの。ね、佐悟」
『・・・そうだな、愛してるぞ、青葉』
激甘である。
「ついたわね、・・・わたくし、池が好きよ。昔から好きだったけど・・・今はもっと好き。だってあなたと出会えた場所ですもの」
『私もだ。私は今、過去に比べればとてつもないほど幸せだろう。だが・・・』
「はぁ・・・またいつもの？生きる意味なんて簡単でいいのに」
『それでも、だよ若葉。私はいまだに自分が何をしたいのかが分か

らないんだ』
「もう・・・はぁ、佐悟はやっぱり女性の扱いがなってないわね。こんなときにそんな話は無しよ、もっと紳士的にわたくしをエスコートしなさいよ」
『どうもそういうことは苦手でね・・・まぁいいじゃないか』
「ま、いまさらって感じよね。さぁて、キレイな池を眺めながら昔話でもしま」

ザザッ！！

その時、池の隣の茂みから何かが出てきた。
それはどことなく見覚えのあるような気がする人間の男だった。
「ふひゃひゃひゃひゃ！！やっとだ！やっと見つけたぞ川流佐悟ぉ！！」
彼は手に大きなナイフを持ち、ゲラゲラ笑っている。
「え・・・な、なに・・・？佐悟、知り合い？」
『・・・いや、知らん。私の友人にこんなやつはいないな』
「いや、あなたの友達って上地さんや下地さん以外にいるの？」
『・・・青葉、デリケートな部分をあまりつつくものではないよ』
「てめぇらぁぁぁぁぁぁ！！何俺をシカトしてやがるぅ！俺を誰だと思ってんだぁ！！？」
『「・・・変質者？」』
「ぶっ殺すぞぉおお！？・・・佐悟よぉ、まさか本気で俺を忘れたわけじゃねぇよなぁ？」
『・・・すまない。何に対して怒っているのか分からんが、私が悪いというのなら謝ろう』
「んだとぉ！？っざけんじゃねぇぞてめぇ！！俺の人生狂わしといて何悠々と生きてんだよぉ、俺はアレからてめぇを殺すためだけに生きてきたんだぜぇ？」
「佐悟、あなた何か人に恨まれるようなことしてきたの？」

『・・・心当たりは数多くあるよ。私は会社のために非道とも言われることをしてきたのでね。・・・その関連か？』
「そぉさ！てめぇに会社を潰された松霜電工の松霜だよ！！さて分かった所で死にやがれ！！」
その言葉と同時にナイフを前に突き出すようにして松霜が飛び出してくる。それに対して佐悟は体を横へずらし、ギリギリで避けることに成功した。だが一度では松霜も止まらず、幾度もナイフを佐悟に向けて振り回す。
そしてついにナイフが佐悟の肩へと突き刺さった。
『・・・ック！』
「オラオラァ！さぁ死ねぇぇぇぇ！！！」
肩の痛みにより動きを止めてしまった佐悟に心臓めがけてナイフが向かう。
だが、すんでの所で［何か］がナイフと佐悟の間に滑り込む。

グシュッ・・・

ナイフが突き刺さる、噴出す血、肉を断つ音。
『・・・なっ！？』
「・・・アァァ？」
その音は全て、佐悟ではなく青葉の体から鳴っていた。
『あ、青葉ぁぁぁぁぁ！！！』
「へへっ、こいつを守ったつもりかよ・・・馬鹿な女だ。まぁいい、佐悟ぉ、すぐにてめぇも同じ場所に送ってやるよぉ・・・」
『青葉！！青葉ぁ！！しっかりしろ！青葉ぁぁぁ！！』
「ふひゃひゃひゃひゃ、死ねや佐悟ぉ！！」
『・・・少し、黙れ』
「はぁ？なんか言ったかぁ？」
『前にも一度言っただろう？・・・目障りなんだよ』
佐悟が男の頭をつかむ。その頭からはメキメキと音が鳴る。

『覚えておくといい、人間の体のおよそ六割は水で出来ているのだよ。［水流操作　破裂］』
パァン！！
一瞬にして男の頭ははじけ飛んだ。周りにとびちる肉片、血、だがそんなものには目もくれず、佐悟は青葉を見つめた。
『青葉ぁ！！返事をしろ！青葉ぁ！！』
「・・・あら？・・・泣いているの？駄目よ？女性の前では常に落ち着いて、紳士的にならないと」
血まみれで、腹部からは出血が続き、呼吸音もノイズが走る。
そんな青葉に佐悟は語りかける。
『青葉！いいい今すぐ病院へ行こう！血は私が止めるから！！』
「・・・ありがとう、・・・でももう駄目よ、・・・わたくしのことだもの。なによりわたくしが一番分かっているわ・・・もう助からないって・・・ゴフッ」
『そんなことはない！！助かる！！病院へ行けばすぐに良くなる！！だから・・・』
「・・・もう、忘れたの？・・・わたくし、嘘吐きは嫌いなのよ？・・・女性の好き嫌いもすぐに忘れるようじゃ紳士失格ね・・・」
『分かった！！もう私は嘘をつかない！！紳士にもなる！！・・・だから・・だから死ぬんじゃない！！青葉ぁぁぁ！！！』
「・・・佐・・悟・・・愛し・・てる・・・」
『私もだ！！青葉ぁ！！だから！だから目を閉じるなぁぁ！！青葉ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

青葉の葬式は、小さく行われた。
それは、とても月がきれいな夜だった。

『佐悟社長、本気ですか？』
『無論、本気だ。この会社は本日で永久に業務停止だ。いままでご苦労だった』
『ちょｗｗ・・・マジか・・・』
『・・・佐悟社長、ひとつ、聞いてもよろしいですか？』
『・・・構わん』
『会社をつぶすということは・・・生きる目的が見つかったということですか？』
『・・・そう・・だ。もっとも・・・既に見つかっていたのに・・・今ではなくなってしまったものだがね』
（そう・・・私は・・・私がしたかったことは・・・ただ一つ、今なら分かる。私はただ――――青葉と一緒にいたかった）
『そこで君ら兄弟に頼みがある。友人としての頼みだ。悟丈をしばらくの間預かっていてくれないか？』
『・・・ま、いいっすよｗｗ』
『・・・これからどうするのかは、佐悟社長が何をするのかは聞きません。・・・ですが、絶対にこの子を引き取りに来てくださいね』
『・・・では、出来ることならばまた会おう。さらばだ』
こうして二人に息子を預けた佐悟はあの池に来ていた。
そう、夢のような日々が始まり・・・悪夢が起きたあの池だ。
『さて・・・青葉、すぐに君に会いに行くよ』
佐悟はナイフを胸に突き刺し、命を絶った。

『・・・ここは、・・川？』

気がつけば佐悟は見覚えの無い川に来ていた。
死後に来る川、・・・三途の川だ。
『まいったな・・・まさか死後の世界なんてものが本当にあったとは・・・。青葉は間違いなく天国で、私は地獄だろう。・・・これでは会えないではないか・・・』
佐悟が途方に暮れていると、後ろから声がかけられた。
それは体格のいい鬼だった。
『・・・どうかしたんか？ワシでよければ話を聞くぞ？』
『最愛の人が天国へ行き、私は地獄へ行くのだよ。・・・もう二度と会えないと考えると・・・な』
『・・・まだ三途の川にいるような奴が何をいっとるんじゃい、立ち止まっている暇があるなら自分が本当に地獄行きなのか確かめればよかろう』
『・・・そう、だな。・・・私の名前は川流佐悟と言う。名前を聞いても？』
『ワシは帝鬼と呼ばれとる。さて、ここで会ったのも何かの縁。閻魔様のところに連れて行ってやろう』
『感謝するよ、帝鬼』
こうして通常なら時間がかかる閻魔までの道のりを、帝鬼の先導によって最短で着くことができた。死者の列も並ばずに直接閻魔のところへ連れて行ってもらえたのは幸運としか言いようが無いだろう。
『閻魔様・・・私は川流佐悟と申します。以前、清水青葉と言う者がここに来られたでしょう？彼女の行く末を教えていただきたい』
『ふん・・・我にはそれを教える義理は無いな』
『そうですか・・・ならば力ずくでも聞き出して見せましょう！！』
『おっ！おい佐悟！！落ち着くんじゃ！！閻魔様にはかなわん！！拳を開け！！』
『離れてください帝鬼！私は青葉のためなら全てを敵に回す覚悟がある！！』

『・・・ックク』
『・・・何？』
『ックククククハァーハッハァ！！我相手にそこまで言うか！！気に入った！！特別に教えてやろう・・・清水青葉、だったな？』
『・・・お願いします』
『・・・む？この者は天国にも地獄にも既にいないぞ・・・』
『・・・そ、そんなはずは・・・！まさか青葉は生きて・・・いや、葬式をしたのは私たちだ、間違えるはずが無い・・・』
『ふん、そうだな。この者は一度死んだよ。・・だが生前よほど徳を積んだとみえる。すでに転生しておるぞ』
『・・・転生・・・？』
『そうだ。どうやら強く転生を要望していたようだな。・・・ふん、人間ごときがどれだけの徳を積んだのか・・・転生先は・・・女神、だそうだ』
『・・・女神・・・？』
『ふん、分かったなら貴様はさっさと地獄へ行くんだな・・・ぬ？貴様・・・なんでここにいる。おい帝鬼、何故この者を連れてきた』
『閻魔様？・・・三途の川にいたからですが・・・』
『馬鹿者が・・・こやつはまだ死んでおらん。死ぬほどの怪我を負っただけだ。・・・今すぐにこやつを現世に送り返せ！！』
『はい！分かりました！・・よかったな佐悟、ワシについてこい！！』
その後、佐悟は死のふちから蘇り、出血は自分の水流操作で止め、体を休めた。
これからの佐悟の生きる意味・・・佐悟のしたいことはただ一つ、彼女との最後の約束・・・嘘をつかないことと、紳士的に振舞うこと。
これらを絶対のものとし、いつかもう一度彼女と出会いたい。
転生した魂に記憶は残っていないが、本質は変わらない。
（私はもう自分が何をしたいのかを見つけた。青葉、私は紳士を極

める。そして・・・君に会いに行く。それまで、待っていてくれ）

こうして、佐悟の歯車は・・・再び回りだした・・・・。

◇

『とまぁ・・・こんな所だよ、私と青葉の話は』
「まさか佐悟さんにそんな過去があったなんてな・・・」
『うぅぅ・・・ヒッグ、幸せになって欲しいどずぇ～・・・』
「べ・・別に泣いてないっです・・・でもくっちーさん、ハンカチを貸して欲しいっです・・・」
『ｍｙブラザー・・・心から尊敬するよ』
『ふむ・・・こんな私だが、どうだ？今の私は紳士になれているだろうか？今の私を見て思った・・・率直な意見を聞かせてくれないか？』

そう言われた霊能たちの目の前には、正座をしている佐悟がいる。

そう、覗きがばれて自分より圧倒的に年下の女子たちに叱られている佐悟が・・・。

「『『『「『台無し（だ！！）（だよ！！）（どすぇ！！）（よ！！）（っです！！）（でござる！！）』」』』』」

『・・・はぁ、締まらないわね。もう一度死ねば治るかしら？・・・エロガッパ』

第二十八話　霊能太郎と卓球勝負

「さぁ・・・温泉のあとと言えば・・・」
『ふむ、アレしかないな』
『うん、アレしかない』
「お、流石二人とも分かってるじゃねぇか・・・そうたっきゅ」
『『女子の浴衣姿！！』』
「お前らの頭に今すぐ弾丸サーブぶち込んでやるよ」

第二十八話　霊能太郎と卓球勝負

温泉から出て浴衣に着替え、一息ついた。
体も温まり、心なしかいつもよりも体の調子もいい気がする。
「卓球だ卓球！温泉に友達ときたらこれしかねぇぜ！！当然、やるよな？」
『ふ、愚問だね霊能・・・この次世代の卓球マスターと呼ばれたいこの僕に卓球勝負を挑むとは！返り討ちにしてあげるよ！』
『おおー！蘇我はんはそんなにすごい人だったんどすかぁ！？』
『馬鹿な根暗ね、よく聞きなさい。ただのアホメガネの願望よ』
『卓球でござるか・・・拙者も参加したいでござる』
『ふむ・・・私も参加させてもらおう、何・・・紳士スキルの中には当然卓球も含まれているから心配はいらない』
『紳士って言葉の意味が分からなくなってきたわね・・・。あ、私

はやめとくわ、あんまり卓球って得意じゃないし・・・』
「じゃあ・・・温泉卓球大会参加者は俺と蘇我と佐悟さんと小次郎でいいか？」
『あ、私もやりたいどすぇ～』
「さっちん卓球できるのか？・・・まぁいいやんじゃ参加なー。・・・五人かぁ・・・店長はやんない？」
『・・・私は部屋に戻ってるわ、行くわよ、口裂け』
『あ、はい。・・・じゃ、またね、みんな』
「おーう、またなー」
『五人かぁ・・・どうする霊能？一人はシードにしようか』
「ちょっと待ったぁ！！・・・あたしを忘れてもらっちゃ困るっですよ！！この伝説の卓球の申し子とよばれるかもしれないこのあたしをっ！！」
『おおー！ツキミはんもそんなに凄い人だったんどすかぁ！？』
『さっちん殿、学ぶでござるよ…』
「よし！ならこれで六人、・・・では今から！！温泉卓球大会を始めるぜぇぇぇ！！！」
こうして始まった温泉卓球大会。
出場者は六人。勝てば栄誉が、負ければ敗者の烙印が手に入る。
今ここに、彼らのプライドをかけた戦いが始まるのである。ちなみに対戦相手はくじで決めることとなった。

◇

どうも、お久しぶりです。
棒　燐子です。
今日はおじいちゃんと一緒に温泉に来ていて、いざ温泉に入ろうとしたら女湯と男湯の壁が壊れたとかで温泉に入れませんでした。

なんかでっかい岩が裏山のほうから降ってきたそうです。
ここの旅館の女将さんにとても謝られました。女将さんはその岩について何か知ってるみたいで、ひたすら慌ててたけど燐子には関係ないかな。
で、温泉に入れなかったのを落ち込んでいるとおじいちゃんが卓球に誘ってくれました。
それで今燐子は卓球場にいるんだけど・・・

「親父直伝!!零式バック!!」
『なっ!・・・ふむ、これは私も本気を出さざるを終えないね・・・』

なんか周りが超次元卓球を繰り広げています。
え?なにアレ?
とととりあえず落ち着いて説明すると・・・
卓球場はそこそこ広い。
で、燐子とおじいちゃん以外にもここで卓球する人がいる。
それで今、燐子たちの周りでは三箇所で卓球が行われている。
みんなどこかがおかしい。
いやだって何よあれ!!まずあそこの茶髪の高校生!!零式バックって・・・!
卓球なのにバウンドしなかったわよ!?絶対打ち返せないじゃない!!卓球にボレーはないんだから!!
とまぁびっくりしてたら・・・

「くらえ!零式バック!!」
『紳士に二度同じ技は通用しないのだよ!!』
「な!!やるじゃねぇか佐悟さん!!」

・・・打ち返しちゃったよ!!バウンドと同時にすくい上げるよ

うな感じで打ち返した！！
紳士って凄い！！
・・・？紳士ってそういうものだったっけ？
「燐子や、あるがままに受け入れるのも大事じゃよ？」
「うん、でもおじいちゃんが何故か上半身裸なのは受け入れれそうにないや」
「燐子や！見るのじゃ！この肉体美！！」
「うん早く浴衣着てねー」
ったくおじいちゃんは・・・たいした筋肉も無いくせに・・・。
まぁそんな感じで茶髪の人と頭に皿を載せた人が対戦してる。
その隣の卓球台ではどうやらメガネの人と帯刀してる人が打ち合ってるみたい。

『なかなかやるね！小次郎！！』
『温いでござるよ！蘇我殿！！』

・・・よかった。
こっちはどうやら普通みたい。

『くらえ小次郎！！［変幻自在のピンポン玉（ドリームスマッシュ）］！！』
『しまった！・・・ぬかったでござる・・・ッ！』

・・・普通じゃ無かったよちくしょう！！
ありえないよ！ボールがありえない方向に空中で曲がったよ！！
なんなの？どんな回転をかけたらボールがいきなり進行方向と逆に動くの！？空気の層でバウンドしたとでも言うの！！？
「燐子や、あの球の秘密をしりたいかね」
「え！？おじいちゃん分かるの！！？」
「ワシも知りたい」
聞いた燐子が馬鹿だったよ・・・

はぁ・・おっ？帯刀してる人が構えた！
・・・なんかちょっとどんな球を打つのか楽しみになってきた自分がいるわ・・・
『いくでござるよ！［幻影流　蜃気楼］』
あれ？普通の球じゃない？別に変な回転してる訳でもないし・・・
『勝負を捨てたか小次郎！これくらい簡単に・・ってぇええ！！？』
メガネの人のラケットを球がすり抜けた！！？
え！？嘘？何で！！？
「若さじゃ」
ごめんおじいちゃん黙ってて。
あと早く服を着て。サムズアップしないで。
なんかもうこれもはや卓球じゃないよう・・・
ん？反対側の台は女の子がやってるじゃん！よかった・・・やっと普通の卓球が見れる・・・
『流石に無機物に呪いは効かないどすぇ・・・っ！』
「もらったー・・・ってさっちんさん！？球に効かないからってあたしに直接やるのは反則っですぅぅぅぅぅ！！」
『［呪殺式　盲目］どすぇ～』
「見えない！前が見えないっですよぉぉおおお！！」
・・・うん、見た目は普通だ！
呪いとかいう言葉が飛び交ってるけど見た目は普通だよ！
しいていうなら金髪の子がふらふらしてるくらいかな！
目が～目が～って言ってるけどきっとラピュタが好きなんだよ！
真似しちゃうくらいに！

うん普通普通！
なんか燐子の中で普通の定義がちょっとずれてきた気がするけど気のせいだよ気のせい！
「燐子や燐子や・・・」
「ん？どうしたのおじいちゃん？」
「バルス！！」
・・・イラッ☆
「・・・アレ？ウケなかった？今ヤングの中で馬鹿ウケと弟子に聞いたんじゃが・・・燐子！？なんで右手をチョキにしとるんじゃ！？」
ブスゥッ！！
「目がぁぁぁぁ！！目がぁぁぁぁ！！！」
・・・ふう、おじいちゃんったら！本当に昔からラピュタごっこが好きなんだから！
ったく・・・山田さんもいったい何を教えてるんだか・・・そもそもあの二人は何の師弟なのよ、ガイザーって何よ・・・
はぁ、なんか最近ため息ばっかりついてる気がするわ・・・

◇

「一回戦、勝ったのは俺と小次郎とツキミか・・・三人だと・・・一人シードかな？」
卓球大会一回戦勝者は霊能と小次郎とツキミだった。
どうやら佐悟さんと蘇我とさっちんは負けてしまったようだ。
『そのようでござるな・・・ならばシードはくじで決めるでござるか？』
「ちょっと待ったっです！・・・あたしとってもいいものを見つけたんっですよ～！」

そう言ってツキミが卓球場の奥を指差す。
その指の先にはなにやら丸いテーブルが置いてあった。
『ふむ、どうやらあれは卓球台のようだね』
『丸い卓球台・・・あ！そうか、三人以上で卓球ができる訳だねmyブラザー』
丸い卓球台にはネットをかける場所がしっかりついており、最大八人まで同時対戦できるようになっているようだ。なかなか便利な卓球台である。
「よし、じゃあ決勝は三人同時対戦でいこうか・・・」
『望むところでござるよ』
「あたしも負けないっですよ？いざ尋常にっです！！」
こうして温泉卓球大会、決勝戦が始まった。

「超トップスピン！！」
『なんの！！反射神経ならそこそこ自信があるでござるよ！！』
「甘いっですよ！！この天才卓球少女を夢見るこのあたしはそう簡単に負けないっです！！」
三人同時対戦は思っていたよりも盛り上がった。
霊能が小次郎にスマッシュを打ったと思えば、小次郎はその球を受け流すかのようにツキミの方向へ打ち、ツキミは霊能に打ち返すと見せかけて小次郎・・・と思わせつつ霊能に打ったりしていた。
カン！コン！カン！コン！
規則正しいリズムで音が鳴る。なかなか白熱した試合のようだ。
ちなみに特別ルールで、五ポイント先に取られた人が抜け、残った二人で一騎打ちである。
今すでに小次郎がマッチポイントにされている状態である。
さりげなく霊能とツキミが小次郎をまず落としにかかったのだ。
『・・・ッ！なかなか酷いでござるよ！さっきから拙者のところばかりに球が・・・ッ！』

「気のせいじゃないか？・・・・・くらえ小次郎！！ハイパースマシュ！！」
『ななななんの！！！』
「気のせいっですよ・・・ミスるっですよ小次郎さん！！ウルトラスマッシュ！！」
『ぬわぁぁぁぁ！！絶対狙い打ちにされてるでござるよ！！』
「「・・・しぶとい（な）（っですね）・・・」」
『ホラ！ホラ拙者絶対狙われてるでござるよ！！二人とも鬼でござる！！』
『小次郎！この二人を鬼って言っちゃだめだ！！・・・帝鬼さんに失礼だよ！！』
「おい蘇我それどういう意味だよ」
『っていいながらもスマッシュはエグイ所ばっかりでござるぅぅぅ！！！』
「もらったっです！！スーパースマッシュ！！」
『容赦無しでござるか！！・・・無念』

小次郎、決勝戦途中脱落。

こうして決勝は二人の卓球勝負に変わる・・・
霊能、ツキミ、両者ともに実力は均衡している。ゆえになかなか長いラリーが繰り広げられる。
カン！コン！カン！コン！
「やるじゃねぇかツキミ！！」
「舐めてもらっちゃ困るっですよ！！」
カン！コン！カン！コン！
『どうも、実況の蘇我です。いやぁこの白熱した戦い、今後どうなると思いますかｍｙブラザー』
『ふむ、両者とも卓球の強者。凄まじい戦いになりそうだね』
『そうですか、・・・ｍｙブラザーは一回戦霊能選手と戦いました

よね？どうでした？』
『ふむ、的確なボールコントロール、圧倒的なスピン・・・そして必殺技、どれも一流だったよ』
『ズバリ、敗因は？』
『ふむ・・・霊能君の父君が直々に教えたというあのテクニックの数々・・・かな』
『ありがとうございました。では次に一回戦ツキミ選手と戦ったさっちん選手に話を伺いましょう。どうでした？』
『ツキミはんは強いどすぇ。私がまさかあんなに圧倒的な差で負けるなんて思いもよらなかったどすぇ・・・』
『そうですか、どういったあたりが強かったのでしょうか？』
『私の得意な呪いを試合中にかけたんどすけど・・・すぐさま適応してきたんどすぇ・・』
『呪い、というと？』
『目が全く見えなくなる呪いをかけたのに・・・ツキミはんは言いはりましたんどすぇ・・・目が見えないなら見なきゃいいだけっです・・・と』
『ま・・まさか目をつぶったまま卓球を・・・？』
『そうどすぇ・・・それができるほどツキミはんは卓球が得意なんどすぇ・・・』
『そうですか・・・では、ズバリさっちん選手の敗因は？』
『・・・ただ純粋に・・・技術の差どすぇ』
『技術・・・？』
カン！コン！カン！コン！
「っく・・・なかなか・・・強いじゃねぇか・・・」
「・・・卓球王女と呼んでもいいっですよ・・・ッ！」
「は！言ってろ・・・ッ！」
カン！コン！カン！コン！
『・・・気づいてるどすか蘇我はん・・・ツキミはんはまだ、一度もお得意の［陰陽術］を使っていないどすぇ・・・』

『・・・なんだっ・・・・て？』
カン！コン！カン！コン！
「っく・・・もうマッチポイントかよ・・・流石だな・・・」
「さて、ここできめさせてもらうっですよ！！」
霊能がサーブを打つ、とてつもない回転がかかったそのボールはツキミの前でバウンドとともに横へ跳ぶ。
だがツキミのラケットは既にピンポン玉の動きの先にあった・・・！
「チェックメイト、っです。［陰陽術　次元穴］」
そう言って打った球は小さな穴に吸い込まれ、一瞬にして霊能のコートの隅へと出現した。
つまり、ワープである。
「な！！・・そいやぁぁぁ！！！」
だが霊能の反射神経はその球を捕らえた。
そして霊能は跳び上がり球を追う。
「ギリギリ・・・セェフ！！」
球に追いついた霊能はラケットを振りぬく。
カコン！・・・と鳴る予定だった音は鳴らない。
霊能のラケットは空振り。球は霊能が跳んだ逆方向に転がっている。
「甘いっですよ、ワープが一回で終わる・・・そう考えたのが霊能さんの敗因っです」
ここに、温泉卓球大会優勝者が決まった。
『優勝おめでとうどすぇ～』
「あたしにかかればこの程度余裕っですよ！！」
「負けたーーー、流石に悔しいぜ・・・」
『霊能でも負けることがあるんだねぇ、スポーツだけど』
『ふむ、完璧な人間などいないということだよ』
『拙者も一斉攻撃を受けていなければ・・・ッ』
温泉卓球も終わり、和気藹々ムードの彼ら。やり残したことも特

になく、あとは寝るだけである。まぁ寝るときもなんかこう・・・修学旅行の夜のようなテンションになるのだろうが。
とりあえずこれで、温泉旅行の夜はもう終わりそうである。

◇

ここは温泉旅館の前、そこに黒服の男たちが大量にいた。
その集団の先頭にいる男と、その両脇の男が旅館を指差し話している。
『ここか、龍脈がぎっしりがっしり詰まった絶好で最高の場所ってのは』
『そうでゴンス、ここの女将が強情でして・・・』
『なかなかこの場所を我々に譲らなかったのでガンス・・・』
『はっ！・・・それでこれで俺っちが呼び出された訳だ。・・・オイ、既に宣戦布告はきっちりがっちり叩きつけたんだろうな？』
『やってやったでゴンス、数時間前に旅館の命である温泉を壊してやったでゴンス』
『さぁて！ならさっさとこの地上げ屋アリス様がすっかりちゃっかり任務遂行してやろうかねぇ！』

・・・前言撤回、温泉旅行の夜は・・・まだまだ続きそうだ。

第二十九話　霊能太郎と旅館襲撃

旅館の入り口で、大量の黒服を引き連れた男と旅館の女将であろう女が話し合っている。
いや、話し合っているというよりは・・・交渉をしているというべきか。
黒服を引き連れた男が笑いながら言う。
『ふひゃひゃひゃひゃ！！女将さんよぉ、ここの土地を売る覚悟はすっかりきっちり決まったかぁ？』
「・・・いえ、絶対に売りません。絶対に」
『おいおい・・・わざわざ俺っちが親切にお話で済ませてやろうってのによぉ・・・』
「あなたたちに渡せば間違いなく悪用するでしょう。女将として、それだけは避けなければなりません」
『おおぅ・・・せっかくの親切がすっぱりがっちり無駄にされちまったよ・・・悲しいなぁ・・・悲しいなぁ・・・』
黒服たちのリーダーであろう男・・・アリスは歪んだ笑顔で口を開いた。
『悲しすぎて・・・暴れちまいそうだぜぇ・・・』

第二十九話　霊能太郎と旅館襲撃

「ヤングドーナツが食べたい」
『・・・はい？いきなりどうした霊能？』
「いや深い意味はないんだけどさ、なんか突然ヤングドーナツが食

べたくなるときってあるよな」
『いや、ないよ』
ここは旅館の男部屋、ここには霊能と蘇我と小次郎がいる。・・・布団は二組しかないが。
そりゃそうだ、小次郎は言わば無断宿泊しようとしているのだから。
ちなみに佐悟さんは
『ふむ、では私はここで失礼するよ。やることがあるのでね』
と言って出て行ってしまった。
「ああやべー、マジでヤングドーナツが食べたくなってきた。ホラ手が震えてきたぜ」
『禁断症状でござるか・・・』
『・・・霊能ってそんなにヤングドーナツ好きだっけ？』
「いや、別に？何で？」
『むしろこっちが聞きたいわ！え？なんで突然ヤングドーナツなの？意味がわかんないんだけど！！』
「ああ、人生ってのはいつも分かんないことばっかりだ・・・」
『何でこのタイミングでなんかいい感じのセリフが言えるの！？全然いい感じじゃないからね？』
「ああ・・・近くにヤングドーナツの木とか生えてないかなぁ・・・」
『無いよ。間違いなく無いよ』
『拙者先ほどヤングドーナツの自動販売機ならそこで見かけたでござるよ？』
『あるの！？何で！！？本当に分かんないんだけど！！』
「蘇我、人生ってのはいつも分かんないことばっかりだ・・・」
『だからそれ別にいいセリフじゃないって言ってるだろぉぉぉ！！？』
そんな訳で霊能と蘇我は部屋を出て、自動販売機へと向かった。
蘇我はつきそいであり、本当にヤングドーナツが売ってるかどう

かを確かめについてきたのだ。ちなみに小次郎はお留守番である。
「確かこっちって言ってたよなぁ・・・あ、アレか？」
『うわ・・・本当にあったよ・・・信じられないね・・・』
廊下の角に自動販売機を見つける二人、若干まだ位置が遠いので確定ではないが自動販売機の胴体にでかでかとヤングドーナツと書いてある。
「やっとヤングドーナツが食べれる・・・もう手が震えすぎて・・・」
『・・・残像がでてるね』
チャリンチャリン、小銭を入れてボタンを押す・・・
だが悲劇はボタンを押す直前に起こった・・・

ガシャァァン！！

自動販売機は、横から跳んで来た何かにより破壊された。
霊能たちの目の前で。
「・・・」
『・・・』
「ヤングドォォオオオオナァァァァァァッッ！！！！！」
魂からの叫びである。
『・・・何？・・・・霊能っ！！見て！！』
「なんだよ・・・ヤングド・・・は！？なっ・・・・大丈夫か！！？」
蘇我が指差した先にいるもの・・・
それは着物姿の女性だった。血まみれで、気を失っている。
そう、横から跳んできたのはこの女性だったのだ。
『おいおいおいおい・・・無駄に抵抗すっからだぜぇ？・・・・きっちりがっちり死んで詫びろよクソ女将』
「・・・は？え？・・・・誰だお前」
『アァァ？邪魔だよテメェ・・・まぁいいか、どうせここのやつらは全員しっかりばっちり皆殺しだからなぁ！！』

「うをぉおお！！危な！！」
物騒なことを言いながら男が手に持った斧を振り下ろす。
しかし間一髪で避ける霊能。
『ストップ！！とりあえず斧の人！！何がどうなのか説明よろしく！！』
『アァ！？断る』
『ですよね！』
『オイラたちがこの土地を巻き上げるために女将を脅したけど、女将が強情でなかなかうなずかなかったから、ここの土地のやつらを皆殺しにして無理やり力ずくで奪うなんて絶対言わないでガンス』
『そうでゴンス、ついでにこの依頼が終わったら多額の報酬が出るから明日は焼肉！・・とかは絶対に言わないでゴンス！！』
「『『・・・』』」
『オイ矛盾兄弟、お前らあとでしっかりきっちりおしおきな』
『『すいませんでしたーーー！！』』
『ったく・・・オラさっさと散れ！地上げ屋アリス総動員でここをみっちりがっつり制圧すんぞ！』
おおー！と声をあげながら多くの黒服たちと、矛盾兄弟と呼ばれた細いのと太いのも旅館の奥へと入っていく。
「っち！まずいぞ！奥にはさっちんやツキミたちが・・・っ！」
『っく、僕はとりあえずこの女将さんを安全なところへ運ぶよ！それからみんなのところへ行く！』
「ああ！任せたぞ蘇我！・・・さて、斧野郎・・・ここは通さねぇぜ？・・・アレ？・・・あれ？？」
腕の辺りを触りながら首をかしげて困惑した声を出す霊能。
『・・・霊能、どうしたんだい？』
「・・・腕輪が外れねぇ・・・」
「『・・・・・』」
『ハァァァァァ！！？え？嘘でしょ！？それってあのトライアスロンのときのやつだよね？何で！？』

「いやなんでだろ・・・あ、温泉に直接つけたからか？温めたら縮んだ？」
『いやいやいやいや！！どうすんのさ！こんな時に！！』
「・・・よし、蘇我。・・・斧野郎の相手は任せた！！俺は女将さんを安全なところへ運ぶぜ！」
『・・・凄まじく嫌だけど分かった！・・・頼むからすぐに戻ってきてね！！』
こうして霊能が旅館の奥へと引っ込んでいった。
と、言うわけで今現在・・・蘇我と斧野郎・・・アリスが一対一である。
『さててめぇ・・・死ぬ覚悟はしっかりばっちりできてんだろうなぁ？』
『・・・死ぬ覚悟なら昔に決めたよ、でももう一度は死にたくないなぁ・・・』

◇

『何よ・・・ッ！さっきからこいつらは・・・ッ！！店長！大丈夫ですか！！？』
『ええ、問題ないわ。・・・それにしてもこの旅館悪質ね。ゴキブリがわらわら出てくるわ』
くっちーと店長の部屋に黒服が襲い掛かってきた。
部屋の中にどんどん入ってくる黒服たち。
皆それぞれ武器を持っており、明確な殺意を持って襲ってくる。
・・・まぁそれをくっちーと店長の二人は片っ端から再起不能にしていくのだが。
すでに部屋には大鎌で切られたり、峰打ちにされたり、大きな氷の氷像になった黒服がひしめいていた。

『・・・確かに黒服ですけどゴキブリ呼ばわりですか・・・』
『おっと・・・、凍りなさい。・・・黒くてテカテカしててまさにゴキブリじゃない。しかも・・・』

＞オイ！こっちだ！！こっちから仲間の悲鳴が！
＞よし、今行くぞ！皆殺しだぁぁぁあああ！！

『・・・一匹見たら三十匹は居そうだもの。絶滅すればいいのに』

◇

「困るのぉ・・・」
そう言ってまた一人、首に手刀を入れ、意識を飛ばせる。
すでに部屋の扉の前の廊下は、気絶した黒服でいっぱいだ。
「お・・おい、たかが爺さんだ。ひるむな！殺せ！！」
「お・・・お前が行けよ！！俺は嫌だ！」
「俺だって嫌だよ！！な・・・何者だよあのジジイ・・・」
「し、死ねぇぇぇくぴぎゃ」

バタッ

また一人、黒服が倒れる。
「もうちっとばかし静かにして欲しいんじゃが・・・」
「な・・・何なんだよ！こんな強えぇジジイなんて聞いてねぇぞちくしょう！！」
「・・・こっちのほうが数は上だ！一気に行くぞ！！」
「・・・愛しの孫娘が起きたらどうする気じゃ、馬鹿者どもめ・・・」

「う、うるせぇ！死ねぇぇぇ！！！」
「騒がしいのは貴様らじゃろうに・・・燐子は温泉を楽しみにしておったんじゃぞ？それで少し落ち込んでいるというのに・・・さらに安眠まで奪うような真似は・・・老師の名にかけて、やらせる訳にはいかんのじゃよ」
老人は右腕を上げ、腰を落とし、構える。
「なぁに、安心するがよい。・・・痛いだけじゃ。［パーフェクトガイザー・サイレント］」
無駄の無い、完璧な衝撃波が黒服を襲う。
だが、衝撃波は無音。
廊下に響いたのは、黒服の倒れる音だけだった。

◇

「なんなんっですかあなたたちは！！」
『そうどすぇ！！いきなり部屋に入ってこないで欲しいどすぇ！！』
「お、かわいいガキじゃねぇか・・・おい、どうせ殺すんだ。いろいろやってからにしようぜ」
「いいねいいね、ふへへへへ・・・」
さっちんとツキミが布団に入りながらおしゃべりしている最中に、部屋に黒服たちが入ってきた。
「ふへ、ふへへへへ・・・」
「キモいっです！！・・・陰陽じゅ・・・あ、札は全部かばんの中っです・・・」
『気持ち悪いどすぇ！！［呪殺式　激痛］！！！』
「アッガァァァァァァァ！！！」
「てめ！なにしやがる！！！」
「うっとおしいガキだ！殺せ！！」

「さっちんさん！全体に一気に呪いはかけられなんっですか！？」
『数が多ければ多いほど威力が下がるから無理どすぇ・・・』
「ッピンチっですね・・ッ！」
絶体絶命の状況。
さっちんとツキミは黒服たちに囲まれた。
ツキミはかばんのところまで行かなければ札が使えず、
さっちんの呪いは全体には通用しない。
「オラおとなしく死にやがれぇぇうひゃひゃひゃ！！！」
無慈悲にも黒服の一人の持ったナイフがさっちんに振り下ろされる。
『っひ！』
さっちんは恐怖で目をつぶった。

キィン！！

ナイフを何かで受け止めた音が聞こえた。
さらに、そこへ声がかかる。
『ふむ、理解しているのかね？』
さっちんが目を開けると、そこにはカメラを持った紳士が、ナイフをカメラで止めていた。
『理解しているのかと聞いているんだ、君』
「は？突然出てきて何が言いたいんだテメェ」
『君が傷つけようとしたものが何か、理解しているのかと聞いているんだ。答えろ！！』
「・・・このガキんちょに決まってんだろうが、見れば分かんだろ！！」
『ふむ、ハズレだ。ガキんちょなどではない・・・耳をかっぽじってよく聞くがいい、リピートアフターミー』
佐悟はいつになくカァっと目を見開いて、力強く言う。

『幼女は世界の宝だ！！！！』

その時、さっちんもツキミも、黒服たちもきっと同じ事を思っただろう。

・・・ああ、このおっさんもう手遅れだ。と。

第三十話　霊能太郎と旅行終了

旅館の廊下・・・
そこで蘇我とアリスは向かい合っていた。
『僕には！八千人の部下がいる！！』
『・・・そうか』
『ままま待て！とりあえず落ち着こう？ね？斧は下ろそう？』
『・・・俺っちはすっきりしっかり落ち着いてるぜ。落ち着いてお前を殺せそうだ』

第三十話　霊能太郎と旅行終了

『ＯＫＯＫまずは深呼吸だよ、ホラ吸って～吸って～吸って～・・・ゴホッゴホ！！！』
『・・・なぁ、そろそろいいか？俺っちもこれ仕事で来てるからあんまり全然時間無いんだが』
霊能離脱後、蘇我はいち早く思考を全力で回転させた。
今現在の状況、そしてここをどう切り抜けるかについて必死に考えた。
その脳内会議の様子がこれだ。
（では今から！紳士的脳内会議を始める！！議題はいかにして今を切り抜けるかだよ！）
（ハイ！議長！！ここは自力で目の前の男を倒せばいいんじゃないでしょうか！）

（・・・蘇我2号・・・それ真面目に言ってる？無理じゃね？だって斧だよ？）
（・・・うんアレ無理だね、やっぱり霊能が帰ってくるまで時間稼ぎをすべきだと思うな！）
（OKならば巧みな話術で場をつなごう！）
（さっちん好きだぁぁぁぁぁ）
（僕もだ！！さっちぃぃぃぃん！！！）
（お・・・おいお前ら！今は愛を叫んでいる場合じゃない！もっと真剣に考えろ！！）
（真剣に考えてるよ！さっちんのことを！！）
（奇遇だな！僕もだ！！）
（ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ～）

脳内会議、終了。
（・・・勝利の鍵は話術とさっちん）
作戦が決まった。
『・・・ところで君たちはなんでここの旅館を襲うんだい？』
『ああ？こっちにもいろいろあんだよ。オラさっさとちゃっちゃと死にやがれ！』
『うわうぉお！？』
アリスの斧が横なぎに蘇我を襲う。
それをギリギリの所でバックステップして避けるが・・・
『甘めぇ』
斧と連続でとんできた蹴りがボディにめりこむ。
相手は地上げ屋なんて商売をしている相手、言うならば荒事のプロなのだ。
『っぐは』
ズザァァァァ
蹴りをくらった蘇我は廊下に体を打ち付ける。
（・・・まずい、僕の話術が通用しそうに無い・・・どうする・・・

ハイ、蘇我４号答えて！）
（え・・・僕！？・・・そうだ！これならいける！！任せて！）
（よし、承認！そのアイデアで場を切り抜けてくれ！）
『おいおい一発で終了かぁ？』
『・・・いいやまだだよ』
そう言って蘇我が立ち上がる。
その顔には切り抜ける自信がありありと満ち溢れている。
『・・・いい目してんじゃねぇか・・・ま、さっさとぽっぽと死んでくれや』
アリスが攻撃に出ようとした瞬間、蘇我が動いた。
右手を一旦引き、腰をひねる。そして腰のひねりを伸ばし、その勢いで右手を斜め上に向ける！！
『あ！！あんな所にさっちんが！！』
『・・・・・』
『・・・って痛いっ痛いっ！！』
蹴られた。
『・・・そろそろいいよな、きっちりばっさり殺しても』
『いやいやいやいやちょっと！ちょっと待って！！しばらく待って！かなり待って！』
『・・・うるせぇな、どうせ全員殺すんだ・・・変に抵抗してんじゃねぇよ』
『・・・僕を殺したあとに、みんなを殺すの？なんで？』
『ああしっかりきっちり殺してやるよ、この土地を制圧しなくちゃなんねぇからな』
『そっか・・・そっか・・・そう・・・なら・・さ』
『ああん？』
『・・・なおさら負けられないね。準備は出来たし・・・ちょっと真面目に勝ちにいこうかな』
蘇我の目つきが変わる。さっきまでのふざけた目ではなく、真面目な目。

それを見たアリスは少しだけ気を引き締める。そうしてアリスが改めて回りを見ると、至る所に糸が張り巡らされているのが見える。
少し前までは無かったはずの糸だ。
『・・・何をしやがった？しっかりどっさり説明してもらおうか』
『嫌だね、せっかく張った罠だ。説明なんてしたらそれこそ馬鹿じゃないか・・・ほら、攻めてきなよ』
『・・・っち、これ見よがしな罠ぁ張りやがって・・・』
アリスは考える。
この短時間で張った罠、張り巡らされている糸のことを。
罠に費やす時間はほとんど無かったはずだ。目の前のメガネには不信な動きは無かった。
それはしっかりばっちり自分が見ている。
目の前のメガネは、メガネの周りだけならまだしも・・・アリスの後ろにまで罠を仕掛けられる余裕は無かったはずだ。
事前に仕掛けてあった？
いや、それはないだろう。今回の仕事の内容が漏れていたとは考えられない。
ならば見えない速さで一瞬の隙を見て糸を張った？
いやいやありえない、そんなことができるなら普通に戦えるはずだ。
・・・まさか、時間を止めた？
否、それこそありえないだろう。
そんなことが出来るようなやつには見えない。
どうする、罠だと分かっていて突っ込むか・・・？
こんな短時間で張った罠だ、最悪でもたいしたダメージには・・・
『ああそうそう、うかつに糸を切らないほうがいいよ。・・・前にこれを張った時は・・・自分でも見てて吐き気がしたっけ』
『・・・おいおい、どんなけ危険な罠張ってんだよ・・・』
再びアリスは考える。
ヒントは今のメガネの発言だ。

どうやら糸が切れると発動するタイプの罠らしい。
そして発動すると見てて吐き気がする・・・これはつまり、再起不能になるほどのダメージを負うと考えていいだろう。
つまり・・・糸と連動して何かが起こる罠だということ・・・
通常の罠を糸と連動させた場合、上から物が落ちてくるや横から物がとんでくる・・・と言うのが定番。
『ようするに・・・少し離れたところから糸を全部処理しちまえばすぱっとまるっと解決だわなぁ！！』
ばっとアリスが糸に気をつけつつ身を引く。
一番近い糸から三メートルは離れた。
『・・・あれ？ちょっと待・・そんなに離れちゃってどうするの？』
気のせいかどことなく蘇我の顔から勝気な表情が消えた気がする。
『簡単だ、こういうことだよぉ！！』
次の瞬間、何かがアリスの手から投げられ糸を切断していく。
そう、それはアリスの斧だった。
そうしてほとんどの糸を切断した斧はブーメランのようにアリスの手元へと戻っていく。
『・・・どういうことだぁ？』
糸をほとんど切ったにも関わらず、何も起きない。
『・・・まぁいい、何も起きないんならやっぱりがっちり構わねぇ』
離れたところにいるアリスがじわりじわりと蘇我に近づいてくる。
『・・・まずいね、ばれちゃった・・・』
汗だらっだらの蘇我。
と、ここであの罠について説明しておこう。
勘のいい人なら気づいてるかもしれないが、ただのハッタリである。
蘇我が不信な動きをアリスに見せていないのは当然、ポルターガイストを使っているからだ。
あれなら別に手を動かす必要は無い。
そして何故瞬時に糸を張り巡らせられたのかと言うと・・・

なんて事はない。糸は張り巡らされている訳ではない。ただ浮いてるだけなのだ。ポルターガイストで。
ちなみに当たり前だが、こんなしょぼいハッタリをかましたのは始めてである。ゆえに吐き気がした覚えも無い。
『・・・でもまぁ・・・僕の勝ちだよ』
『はぁ？こんな状況で何言ってやがんだ？まぁいいや、オラ・・・ばっちりがっちり死にやがれ！！』
アリスの斧が蘇我の頭を割るために振り下ろされる。
『なっ・・・』
いや、振り下ろされなかった。
正確には、振り下ろそうとしたのだが・・・斧が動かなかったというのが正しいか・・・。
アリスが自分の斧におそるおそる目を向けると・・・

「悪い、蘇我・・・間に合ったか？」
『ギリギリだね、待ってたよ・・・霊能』

そこには、右腕を血まみれにした茶髪の高校生がアリスの斧を抑えていた。
『てめっ・・・何者だ！？』
「さて、よくもやってくれたな・・・」
霊能の手に力がこもる。
『っち、一転して不利な展開だな・・・こりゃぁ不味いか・・？』
「仕返しだけはさせてもらうぜ？」
『・・・仕返し？・・・俺っちはお前にはまだ何もしてないぜ？いったい全体何の仕返しだって言うんだよ』
『なっ！そんなの当然僕のに決まってるだろ！』
「くらえ・・・ヤングドーナツの仇いいいい！！！！」
『グファ！！』
（僕ドーナツに負けたぁぁぁぁぁぁ！！！！）

「これで・・・一件落着か？黒服たちもなんか撤退しはじめたみたいだし」

＞あああ！アリス様ぁぁ！

＞退却ぅぅぅ！！退却でゴンスゥゥゥ！！

『うん、とりあえず・・・守りきれたみたいだね』

「ふぅ・・・良かった。ああ・・・でもさすがに痛むな・・・」

痛みに顔をゆがめる霊能、それを見た蘇我が問う。

『・・・その血まみれの右手・・・どうやってあの腕輪を外したの？』

「ああアレ？・・・急いでたからな、ちょっと強引に外したよ」

『・・・強引にって・・・まさか・・・』

「なぁに、手の肉を削いだだけだ。それだけで間に合ったんだから安いもんだろ」

『・・・そっか。・・・・・・ありがとね、親友』

「構わんさ、親友」

こうして旅館の戦いは地上げ屋の撤退と言う形で終わった。

次の日、帰り道

「いやぁ・・・昨日の夜は大変だったっですねぇ～」

『散々だったどすぇ・・・』

「まぁみんな無事だったしスリリングで良かったぜ！」

『スリリングと言うには危険すぎた気がするけどね』

旅館をでる時にやたら従業員に感謝と謝罪をされたのが印象的だった。

その際、店長が

「誠意ってその程度なの？その程度で誠意表したつもりなの？」

とこぼしたせい・・・いやおかげで粗品を全員もらうことになっ

たのは余談である。
今回の温泉旅行は最後に一騒動あったが、総じていい旅行だったのではないか。
それはおそらく旅行に行った全員の共通の認識だろう。
「ああ～またいつか旅行に行きたいっですねぇ～」
『そうどすなぁ・・・もうしばらく何も予定が無いどすぇ・・・』
『そうだね、しばらく暇かなぁ。霊能ー、しばらく予定ってゼロだよねぇ？』
「そうだな・・・あ、俺明後日誕生日だわ」
「『『え、マジで？』』」
「うん、マジで」
『明後日どすか・・・プレゼントを選ぶ時間が全然ないどすなぁ・・・』
『誕生日か・・・どうせならいいプレゼントを渡してやりたいな』
「あたしも何か探してみるっです」
「え？何、プレゼントくれるのか？」
『そりゃあげるどすぇ・・・ってどうかしたんどすか？』
「いや・・・今まで家族とゴンザレス（ちくわ大好き）からしか祝ってもらったこと無かったから・・・」
・・・すこしばかりの沈黙。
『よ、よし！！なら霊能！明後日は期待していろ！？あっと驚くものを渡してあげるよ！！』
『わ、わたしもどすぇ！』
「じゃああたしも珍しいもの持ってくるっです！！」
「お前ら・・・ありがとう、期待してるぜ！！」
かなりわくわくした目をしている霊能を見てそこに居た三人は同じことを思った。
（（（あの目・・・プレッシャー高けぇぇぇぇ））））
これは本気でいい誕生日プレゼントを用意しよう。
そう考えたそうな。

番外編　新訳第一話　原作開始と仲間たち（前書き）

本編が３０話も続いたことを記念し、第一話、霊能と人外（赤青さん）のファーストコンタクトを一新！！第一話では書かれなかったキャラクターも登場します（笑）

番外編　新訳第一話　原作開始と仲間たち

「あ～・・・友達欲しいなぁ・・・」

ここは県立左ヶ西高校。授業終了後の教室で、かなり寂しい独り言をつぶやいた男がいた。

何を隠そう、彼には友達がいない。

いない理由は分からない。

彼が人見知りだからではない。なぜなら彼には知り合いはたくさんいる。たとえば今いるこの教室の同じクラスのメンバーとは当然知り合いだ。

だが彼には友達ができない。

「なんだよ・・・俺は普通だよ・・・」

だが人は彼をそれとなく避ける、目をそらす。

唯一の友人とも言える存在、出家した幼馴染のゴンザレス（♂）いわく、

「おぬしはどこかずれておるからのぉ」

だそうだ。別にずれてるつもりはないんだが・・・と思う今日この頃。

だが一応気にはなったのでゴンザレスの妹に

「俺って別に普通だよな？」

と聞いたことがある。

結果は

「・・・あ、ああ！そ、そうっです！魔法少女タミフルたみ子が始まってしまうっですよ！！では！！」

・・・なんか目をそらした挙句に逃げられた。

そこそこ心にダメージを負った。

「はぁ・・・もうこの際誰でもいいよ・・俺と友達になってくれよ・・」
彼の名前は霊能太郎、筋トレ好きの高校生男子だ。
筋トレでは腹筋を重点的に鍛えつつ、それとなく背筋やふくらはぎもそこそこ鍛えている。
鍛える理由？・・・そこに筋肉があるからさ。
そんな霊能君だが友人がいないのは精神的につらいようだ。
誰も居ない教室で、彼はため息とともにそっとつぶやいた。
「トイレ行こう・・」
この時、このタイミングでトイレに行ったことが――――
――――後の人生に大きく関わってくることになる・・・

番外編　新訳第一話　原作開始と仲間たち

『はぁ・・・どうしようかなぁ・・・』
所変わってここは左ヶ西高校屋上、見渡す限り空が青く広がっている。
そんなここで困ったような独り言を言う幽霊がいた。
その幽霊は屋上の扉の前に立ち、何かを考えながらため息をつく。
『本当にどうしよう・・・僕じゃ無理だってどうしようもないって』
ぶつぶつ言いながら幽霊は前を向く。
その視線の先には・・・
『グルルルル・・・』
大きな犬がいた。
２ｍサイズの三つ首犬、まぁ・・・その・・・あれだ。
ぶっちゃけケロベロスだ。

『うわー無理無理こんなの相手にしたら僕死んじゃうって、もう幽霊だけど』
『グルルルル・・・』
『うわー真面目にこれは勝てないって、勝率０％だって』
『バウッ！！』ズシン！！
『でもまぁ・・・ここで僕が止めなかったら、犠牲者が出るんだろうね・・・はぁ・・・』
『ガァァァ！！！』ズシン！！
『・・・だからかな、不思議と逃げようとは思わないや』
幽霊がメガネをクイッと上げる。ケロベロスが今にも襲い掛かろうとしている。
すると幽霊はポケットに手を突っ込み、袋を取り出した。
『・・・学校の屋上で空を見ながら食べようと思ったんだけど、仕方ないか』
『グルルル・・ガァァァ！！！！』
ついに犬が幽霊に襲い掛かる！
だがその、飛び掛る寸前に幽霊は動いた！！
『食らえ！ビーフジャーキー時間稼ぎ！！！！』
犬は飛び掛るのを止め、ビーフジャーキーをむさぼる。
それを見た幽霊はほっとしながらそれを眺める。
『・・・まさか本当にこれに食いつくとは・・・もしかしたらこれでしつけられないかな、お手とか』
そう思い幽霊がケロベロスを見る。２ｍの三つ首犬、鋭いキバ、筋肉のついた前足。
そしてすぐさまこう思った。
・・・ああ、これにお手なんか無理だね。
もしお手に挑戦するやつがいたら・・・それは相当愉快な人か凄まじいバカだけだ。
でもそんなやつに限って一緒にいるとなぜか退屈しないんだよねぇ。

絶対いないとは分かってるけど、もしいるのなら・・・友人になってみたいものだね。

◇

「あ、紙が無い・・・困ったな。」

トイレで用を済ませたはいいが、なかなかのピンチに遭遇してしまった。

紙が無いのである、非常事態だ。切実に。

ヤバイ、本気でヤバイ。

具体的には満員電車で偶然となりの女性の胸に触ってしまい、悲鳴をあげられた時並にやばい。人生終了である。

いや実際はトイレで紙が無かったくらいでは人生は終了しないのだが・・・

その時の彼はそのくらい焦っていたのだ。

その焦りポイントはなんと５２万あせりを記録していたというのだから驚きだ。

余談だが黒塗りのベンツにボールを当ててしまった中学生のあせりポイントが平均３０万あせりだと言われている。

その時彼の脳内に名言が響いた。

（紙が無いなら、助けてもらえばいいじゃない）

うるさい。こちらとら助けを呼ぶ友達自体がいないんだよ馬鹿野郎。流石に知り合い程度のやつに紙を持ってきてくれとは頼めないし、他人ではもっと無理だ。そもそもこんな時間にここで叫んでもおそらく誰も来ないだろう。

ピンチだ、全力でピンチだ。

年末の飲み会で社長が「無礼講だ！」と言ったからってテンション上がりすぎて「ヘーイ」とか言いながら社長の頭を叩いたらズラ

が取れたときくらいにピンチだ。
これはマズイ。助けて神様。
いや本当に助けて、もうだれでもいいから。どんなやつでもいいから！！

◇

『・・・ッ！！今誰かに助けを求められた気がするどすぇ・・・』
少女は空を見上げる。そして次に周りを見渡す。
・・・何にも無い。あるのは森と井戸だけだ。
『まぁ・・・気のせいだって分かってるんどすけど・・・』
暗い顔でため息をつく。未来に希望が持てない目をしている。
少女は壁を背にして座りながら、うつむいている。
『・・・腰が痛いどすぇ・・・井戸の中は硬くて冷たいどすぇ・・・』
どうやらこの少女は井戸の中で生活しているようだ。
まわりにだれもいないところからすると、おそらく彼女一人で住んでいるのだろう。
ちなみに枯れ井戸なので水は無い。
『はぁ・・・前のおじいさんも結局怖がってくれなかったどすぇ・・・』
井戸の中に貯めてあったきのみを食べつつ独り言をつぶやく。どことなく寂しそうでもある。
変わらない空を眺め、変わらない景色を見て、少女は誰に聞かせるでもなくつぶやく。
『・・・次はいつこの世界は再生されるんどすぇ・・？私はいつまで繰り返せばいいんどすぇ・・？』
少女の言葉に、答えは返ってこない。

◇

少年の助けを呼ぶ声に、答えは返ってこない。
これは真面目にどうしよう、誰か紙をください。
もうどうしようもない。諦めて拭かずに帰ってやろうかとか考え出した頃・・・奇跡は起きた・・・
トイレの個室の中に、どこからともなく声が響いてきたのである。
『赤い紙が欲しいか？青い紙が欲しいか？』
そう、天の助けだ。
いや・・・実際は赤紙青紙という妖怪なのだが・・・
今の彼には関係ない。
彼からすればこの状況で紙をくれるなんて天の助け以外の何者でもないのだ。
「トイレットペーパーを頼む！！」
妖怪がでた開口一番にこれだ。
『赤い紙が欲しいか？青い紙が欲しいか？』
「だからトイレットペーパーだって！！頼む！！」
『・・・赤い紙か青い紙か』
「いやだから・・・ああもう！この際ティッシュでもいいから！！」
『赤い紙か！！青い紙か！！』
「分かった！赤でいい！何でもいいから紙をくれ！！」
そう、彼に色などこの際関係ない。紙でさえあれば拭くことができるのだから。
だがこの赤紙青紙という妖怪は当然のごとくトイレットペーパーが無くなった人に紙を渡す親切な妖怪何ぞではない。この妖怪は被害者に赤い紙か青い紙かを選ばせて、赤と答えれば血祭り。青と答えれば血を抜かれ真っ青になって死ぬという。

では他の色を選ぶとどうなるのか。
一説では冥界に引きずりかまれるとも言われている。
『・・・赤だな・・・』
そう妖怪は言うとその恐るべき力で彼の血流を操作し、血まみれにする――
グチャッ

◇

『私、きれい？』
「はぁ？何言ってんだてめぇ？でっけぇマスクなんかつけやがって」
薄暗くなった路地で、一人の女が男に声をかける。
突然後ろから話しかけられた男は、少し驚きながらも悪態をつく。
『私、きれい？』
「うっせぇなぁ・・・黙れよキメェなぁ・・・ったく」
同じ言葉を繰り返す女、その顔には大きなマスクがついている。
男は女の言葉に軽く答える。
『・・・私、きれい？』
「うっとおしいなクソ尼がぁ・・・ああ分かったきれいだよきれい。これで満足か」
何度も同じ事を聞かれた男が、イラつきを隠そうともせずに女に言い放つ。
それを聞いた女が、止まった。
そして、マスクを外し・・・言う。
『これでもかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』
「うわあああぁぁあああ！！！」
女のマスクの下にある口は、一般の平均よりも大きく、裂けてい

た。
そして、どこからか大鎌を取り出し、腰を抜かした男へと近づく。
「うわっ！キモッ！この化け物が！！死ねよ！！・・・オ、オイ・・・来るな！！来るなよぉ！！死ね！死ね！近づくなぁ！！」
無常にも、女は一歩一歩近づいていく。
「死ね死ね死ね！！来んな！！あああぁぁ！！やめろ！！頼む！たすけ」

ザシュッ

路地の壁に、真っ赤な花が咲いた。

◇

グチャッ
トイレの個室で、真っ赤な鼻になった。
「うわ鼻血がめっちゃ出た！」
『ッ！！何故だ・・・』
「ちょっとぉー鼻血でたんだけど、マジで頼むからなんか紙くれよ。頼むってマジで」
赤紙青紙の血流操作によって血まみれになるはずだった霊能は、なぜか鼻血だけで済んだ。
『・・・何故だ、何故死なないんだお前は』
「・・・いや知らんぜ。あ、分かった。多分アレだわ。うん間違いない」
『・・・答えてもらおうか』
「ズバリ、腹筋鍛えてるからな！！」
判明！霊能が鼻血で済んだ理由・・・それは腹筋のおかげだった

！！
『・・・なめとんのか』
「いや他に思いつかないし、いや今はそんなことより紙だって。下も上も両方紙が必要だって！」
『・・・解せんな』
「ヤバイって、このままじゃお尻も鼻も汚れたまんまになっちゃうよ？このままトイレ出たら俺本当に生きていけなくなっちゃうよ？社会的に」
　トイレから鼻血だらっだらの尻を拭いてない男が出てくるのを見たら誰だってトラウマもんである。
『青い紙欲しいか？』
「だから紙なら何でもいいって。頼むから急げって。トイレでしゃがみながら鼻血がたれないように上向いてる俺なかなかにシュールだよ？客観的に見たらキモいことこの上ないよ？」
『いいだろう・・・青い紙やろう』
　そして妖怪は彼の血を抜き殺す――

◇

＞鼻血がめっちゃ出た！
＞ッ！！何故だ・・・
『・・・なんだか隣の個室が騒がしいでござるな・・・』
　ここはとあるトイレの個室、ここにもトイレを使用している男が居た。
　やたら先ほどから隣の個室がうるさいが、今はそんなことを気にしている場合ではないのだ。
　そう、なぜなら・・・

『神も仏も無いでござる・・・』
・・・ここにも、紙に踊らされている哀れな男が居た。
『どうする・・・どうすればいいでござるか・・・いっそ全裸になって外で助けを求めるでござるか・・・？こう・・・ビックフットですけど何かようでござるか？みたいな・・・ッ』
それをやれば間違いなく通報確定である。
『・・・いや諦めてはいかんでござるな・・まだ、まだきっと何かあるはず・・・！！』
男は自分のポケットを念入りに探した。
そして、そこで一枚の紙と思われる手触りのものを見つけることに成功した！
『キタ！拙者の勝ちでござる！！さぁこれで・・・』

［紙やすり］

『拭けるかぁぁぁぁぁ！！！両面だししかもこれ、普通のより三倍は荒いでござるよ！！』
男の苦悩は続く・・・。

◇

「うわくらくらしてきた・・この状態で貧血ってひどくね？何この三重苦」
『・・・・なんでだよっ！！！』
どうやら妖怪も突っ込まざるを得なかったらしい。
「知るか！早く紙をくれ！！プリーズ！！紙プリィィズ！！」
『何でお前死なないんだよ！なんで鼻血と貧血で済むんだよ！！』
「日頃から腹筋鍛えてた甲斐があったぜ」

『意味が分かんねぇよ！！もうお前帰れよちくしょう！！』
「だから紙渡せって言ってんだろうがぁぁぁぁ！！拭くもん拭かないと帰れねぇ事くらい分かれやぁぁぁ！！！」
『・・・本当だな？本当に紙を渡したら帰るんだな？』
「当然だろうが、いいから紙もってきて！赤でも青でも黄色でもいいから！！」
『黄色でいいんだな？ふ・・・いいだろう』
その瞬間・・・その場の空気が変わった・・・
便器の向こう側が黄泉の世界へとつながり・・・彼を吸い込み始めたのだ！！
ゴォォォオオオ！！！！！
便器があらゆるものを吸い込む。個室にあったゴミから剥がれかけていた壁紙、紙やすりなどあらゆるものを吸い込む！！
「ああ・・・換気扇か」
だが霊能には無駄だったようだ。
『もういいよ！！俺が悪かったよ！！普通の紙やるから帰りやがれ！！プライドズッタズタだよこんちきしょう！！』
そうしてどこからとも無くトイレットペーパーが補充され、全ては終わった・・・
「それにしても・・・助かったな・・・俺に紙をくれるなんて・・・良いやつだったな・・つーか妖怪だかお化けだかの類って本当にいたんだ・・・友達・・・そうだ人間で作れないなら人外で作ればいいじゃねぇか！！」
彼、霊能太郎は個室から出た後、とても健やかな笑顔で言った。
「よし、明日からＧＴＯ作戦開始だ！！」　※Ｇ（人外と）Ｔ（友達になろ）Ｏ（お）作戦

第三十一話　霊能太郎と誕生日前編

『誕生日なんだし、外食しようよ』
ここは霊能家、ここに住む三人がイスやら座布団やらに座りながら話し合っている。
今日は霊能の誕生日なのだ。
だが誕生日会自体は夜だ。なので今の議題は、どこへ昼飯を外食に行こうかである。
『つまり、変にストーリーを入れるから途中で投げてしまうんどすぇ』
『あれ！？さっちん！？突然何を言ってるんだい！？』
「つまり俺たちにシリアスなんか似合わないって事だな」
『霊能まで電波を受信しだした！？せっかく今から霊能の誕生日だから外食へ行こうって話しになってたのに！！』

第三十一話　霊能太郎と誕生日前編

『止めてよ！訳の分からない話は止めてよ！！外食の話をしようよ！！』
「いやいや蘇我、ひとまず落ち着いて考えろよ。変に伏線とか張ったせいで回収がめんどくさくなることってあるだろ？」
『無いよ！いや伏線ってなんの話だよ！意味が分からないよ！！』
『そうどすぇ、だから全部放り投げてもう無かったことにするのも一つの手どすぇ』
『あああ！！正気に戻れぇぇぇぇぇぇぇ！！！』

パァンパァン！！

心地よいハリセンの音が室内に響く。

どうでもいいがなぜか霊能の家にはハリセンが常備されている。

「それでだ、本来のシリアス無しオールギャグの話が一番だと思う訳だ」

『おいいいいいい！！！何でだよ！何でまだその話題を続けるんだよ！戻る流れだったじゃん！ハッ・・・俺は何を・・・とか言いながら正気に戻る流れだったじゃん！！』

「ハッ・・・俺は何を・・・」

『遅いわ！！』

スパァン！！

「ひでぇ、・・・ま、でだ。俺はハンバーグが食べたい」

『そう？じゃあハンバーグ専門店にでも行こうか』

『私はオムライスが食べたいどすぇ』

『ハンバーグ専門店は却下だね、オムライス専門店にしよう』

「あれ！？今日俺の誕生日じゃなかったっけ！？」

『え？でもさっちんがオムライス食べたいって言ったんだよ？』

「さっちんに甘すぎるだろ！？・・・そういや蘇我は何が食べたいんだ？」

『僕？僕はなんでもいいよ。じゃまぁファミレスでいいよね？ハンバーグもオムライスもあるし』

「そうだな、よしファミレス行くぞ！」

『『おおぉー』』

と、言うわけでファミレスに到着した霊能一行。

「俺このハンバーグセットで」

『私はこのオムライスセットどすぇ～』
『じゃあ僕は・・・うん、このシェフの気まぐれセットでお願いします』
「ハイかしこまりましたー」
特に何事もなく普通に注文をすると、霊能が何かを疑問に思ったような顔で蘇我に聞く。
「蘇我・・・気まぐれセットなんかでいいのか？」
『え？なんで？なんか駄目だった？』
「いや・・・だって気まぐれだぜ？客相手にしっかり考えずに気まぐれで料理出すんだぜ？よく考えたらおかしくね？」
『いや・・・そんなひねくれた考えはしたこと無かったなぁ・・・』
『シェフが気まぐれに残飯を盛り付ける可能性も否定できないどすぇ～』
『そんな馬鹿な・・・もっとシェフを信用してあげようよ・・・あ、そうだ』
何かを思い出したように蘇我が箱を取り出す。
きれいにラッピングされたプレゼント用の箱だ。
『注文してから料理が来るまでの間は暇だからね・・・誕生日プレゼントを持ってきたんだよ』
「おお！！マジでか！！超うれしい！！」
『当然私も持ってきているどすぇ～』
さっちんも蘇我と同じくらいの大きさの箱をどこからか取り出す。
「空けていいか！？空けていいか！！？」
『前から僕は思ってたんだ、いつも霊能が戦ってるときって素手だよね、だから・・・』
「いいや限界だ！空けるッ！！」
蘇我のプレゼントを蘇我が話し終える前にあける霊能。
すると中から出てきたのは・・・
棘のついた鉄球に鎖と棒がついたもの。
『・・・武器が必要だと思ったんだ』

「モーニングスター！！？なんか滅茶苦茶物騒なんだけど！！？」
『霊能に似合うと思ってね！』
「嫌がらせだろこれ！！？え？何？お前から見た俺のイメージモーニングスター！？」
『・・・蘇我はん・・・モーニングスターって・・・』
「な！さっちん！おかしいよな！？誕生日にモーニングスター渡すって斬新過ぎるよな！？」
そう言うと無言で自分が持ってきたプレゼントを空けるさっちん。
その中から出てきたものは・・・
『・・・かぶってしまったどすぇ・・・』
「まさかのモーニングスターかぶり！？奇跡的だなオイ！！？」
『『カブーニングスター』』
「微塵もうまいこと言ってないぞ！？」
「おまたせしました、こちらハンバーグセットでございます」
とまぁはしゃいでいると店員が注文した料理を持ってきた。
モーニングスターを見ても動じないあたりにプロ魂を感じる。
「こちらがオムライスセットでございます」
さっちんの前にオムライスが置かれる。
しっかりとケチャップのかかったオムライスだ。
「そしてこちらがシェフのきまぐれセットでございます」
蘇我の前に皿が置かれる。
皿の上にはグロテスクな人面虫が体液まみれで置いてある。
『・・・・・・何これ？』
「はい、本日のシェフのきまぐれ、パンデモニウムでございます」
『食えるかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？なんなの？気まぐれってレベルじゃないよ！仮に気まぐれだとしても気まぐれと言う名の狂気だよ！！』
「蘇我、たしかお前俺が何食べたいか聞いたとき、なんでもいいって答えてたよな？」
『食べ物ならね！？これはもはや食べ物の領域を軽々と踏み越えて

るよ！？』
『蘇我はん、好き嫌いは良くないどすぇ』
『好きとか嫌いとかじゃないよ！生理的に受け付けないよ！！すいません店員さん、これ下げてください。あと僕もハンバーグセットで』
「はいかしこまりました。スイマセーン、このパンデモニウム、ハンバーグにまわしてくださーい」
『ビーフにして！！それの肉は使わないで！！』
「かしこまりました」
ふぅ、と一息つく蘇我。
その正面で霊能がハンバーグをつつく。
「なんか悪いな、先に食べちゃって」
『いや構わないよ・・・シェフを信用した僕が馬鹿だった・・・』
『オムライスおいしいどすぇ～』
にぱー、と笑うさっちん。
そのあまりにもかわいいしぐさを見た蘇我は小声で、生きてて良かった・・・とつぶやいた。
ハンバーグを霊能が食べ進めていると、対面に居る蘇我・・・の後ろのテーブルにから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『いや！店長はきれいですよ？いや確かに口は悪いけど・・・いやいやいやいやそう言う意味じゃなくて！！』
『・・・はぁ、世界滅亡しないかしら。まずは細菌テロでも起きないかしら・・・』
・・・どうやらくっちーと店長のようだ。
かなり落ち込みつつ機嫌の悪い店長を必死にくっちーが相手している。
「・・・蘇我、さっちん・・・どうする？」
『スルー推奨どすぇ』
『紳士危うきに近寄らず、だよ』
「・・・だな。うん、見なかったことに・・・」

そう結論を出して、もう一度くっちーの方を見る。
「！」
霊能とくっちーの目が合った。
ザッ！！
れいのうは　めを　そらした！
『あら霊能君たちじゃない、一緒に食べましょうよ』（助けて、店長の機嫌を治して）
しかし　まわりこまれてしまった！
くっちーが霊能たちを呼ぶ。その言葉と同時にしっかりと副音声が聞こえてくる。
「いや・・・俺たちは・・なぁ！？」
『そうどすぇ！二人水入らずの空間を邪魔しちゃ悪いどすぇ！』
『あ、店長、ちょっとみんなを呼んできますね』（逃がさないわよ）
（（（強制的につれてく気だぁぁぁぁ！！！））））
席を立ち、スタスタと歩いてくるくっちー。これはもう逃げようが無い。
『と、言う訳でなんとか店長の機嫌を治してほしいのよ』
「・・・拒否権は？」
『・・・今日の夜の誕生日会でのケーキを持ってくのは私よ？いいの？』
「よしお前ら！人外バスターズ久々のミッションだ！気合入れていくぞ！！」
『さっちん、見た？今の変わり身の早さ』
『見たどすぇ、ものすごい簡単に釣られたどすぇ』
「そこぉ！シャラップ！！つべこべ言わない！」
『・・・まぁ、いいけどね。で、くっちー・・・なんであんなに店長の機嫌悪いの？』
『それは・・・話せば長くなるわ』
くっちーが窓から遠くを眺める。
「三行で」

『新バイトいい感じのイケメン好青年
店長の口撃
泣きながら土下座してバイト止めた』
『短っ！？』
『・・・メンタルの弱いイケメンどすぇ・・・』
『分かった？だから今落ち込みつつ機嫌悪いのよ・・・』
「・・・分かった。それで俺たちに相手をしてくれ、と」
『そうなのよ、・・・でも大丈夫。さっき店長が大好物のカレーを頼んだからそれが来たら機嫌は治るわ。それまで場を持たせて欲しいのよ』
『意外と好物は少年っぽいんだね・・・』
『カレーさえ来れば私たちの勝ちよ、・・・やってくれる？』
「・・・分かった。蘇我、さっちん・・・準備はいいか？」
『『大丈夫だ、問題ない（どすぇ）』』
そんな訳で霊能たちは店長のテーブルにつく。当然自分たちの料理を持って。
と、ここで醜いアイコンタクト合戦が勃発した。
（・・・初めは誰が行くんどすぇ？）
（・・・さっちん、頑張れ！）
（さっちんなら出来るさ！）
（蘇我はんまで！！？）
（頑張ってね、さだこちゃん）
（味方はゼロどすぇ！？・・・・覚悟を決めるどす・・・でもどんな話題ならいいのか・・・）
（早くしないと機嫌がどんどん悪くなるわよー）
（ええぇ・・・よよよし！これどすぇ！）

『店長はん、今日はいい天気どすなぁ』
『曇りよ』

『・・・・・・そう、どすぇ・・・』

（（（一瞬でぶった切られたぁぁぁぁぁ！！！））））
（オイどうすんだこれ！一瞬で会話が終わったぞ！？）
（不味いわね・・・さだこちゃんの心がすでに折れてるわ・・・）
（よ、よし。僕がフォローに回るよ！！）
（ＯＫ行って来い！カレー到着まで時間を稼ぐんだ！！）
（ふ・・・時間を稼ぐのはいいけど・・・別に機嫌を治してしまっても構わないんだろう？）
（うわなんか蘇我が無駄にかっけぇ）
（・・・はたしてここから蘇我君がどう出るのかに期待ね）

『いやぁ曇りっていい天気だと僕は思うけどなぁだってく』
『私は思わないわ』
『・・・そっか・・・』

（（話してる途中でぶった切られたぁぁぁ！！！））
（いや、まだよ！まだ蘇我君の目は死んでないわ！！）
（蘇我は既に幽霊だけどな！）
（そういう意味じゃないわよ！）

『・・・霊能の武器って何が一番似合うと思います？』
『・・・そうねぇ・・・モーニン・・・いや、ひのきの棒かしら』
「おいいいぃ！！今モーニングスターって言いかけたよね！？しかもそこからランクダウンさせたよね！！？」
『モーニングスターなんて高度な武器はわんぱく馬鹿には扱えない

わ』
「鈍器だよ！！？全然高度な武器じゃないよ！！？」
『霊能、そろそろ認めようよ。扱えないって』
「なんで俺、前々からずっと言ってただろ？みたいな空気出してんだお前！？」
そこそこ場が盛り上がってきた。この調子でいけば店長の機嫌も治りそうだ。
『・・・それにしてもカレー遅いわね・・・使えないわ』
「いやもうそろそろ来るんじゃないかなー、な、蘇我！」
『う、うん！そうだね！』
と、そこへタイミングよく店員が料理を持ってきた。
『ホラ来ましたよ店長！・・・あ、でもあれは・・・』
「パッと見カレーじゃなさそうだな」
『あ、ってことは私の料理ね。・・・店長一口味見しますー？』
コトリ、とテーブルの上に料理が置かれる。
「お待たせしましたこちらシェフの気まぐれセットでございます」
・・・皿の上にはグロテスクな人面虫が体液まみれで置いてある。
『「パンデモニウムゥゥゥゥ！！！！！」』
『・・・口裂け、あなたこれを私に一口食えと？』
『いいい言わない言わない言いませんよ！！ってそれより店員さん！？これ何！！？』
「本日のシェフの気まぐれ、パンデモニウムのメスでございます」
『凄く真面目に答えられた！！ってこれにメスとかあるの！？心底どうでもいいわよ！！これ下げてください！！』
「はいかしこまりました」
一度置かれた皿が下げられる
ふと見ると店長の機嫌が空腹と気持ち悪いものを見た事でさらに機嫌が悪くなっている。
ここで再びアイコンタクトタイム。
（どうすんの！？店長めっちゃ機嫌悪くなってるぜ！！？）

（どうしようもないどすぇ、私たちに出来るのはカレーを待つことだけどすぇ）
（あ、さっちん復活したんだ。・・・でもこのまま無言でカレーを待つのはきついよ？どうする？）
（そうね、でも私の料理が来たんだからすぐにカレーも来ると思っていいと思うわ）
（じゃあ最後！まだ霊能はフォローに回ってないよね！頼んだ！）
（え？嘘！？俺！？・・・ぶっちゃけ話題とか無いぜ！！？）
（大丈夫どすぇ、カレーが来るまでの短い時間どすぇ！！）
（そうだよ！もうすぐカレーが来ますね。とかそんな感じでいいよ！！）
（・・・そうか？よし、じゃあ・・・もうカレーのにおいがしてきたからもうすぐにでもカレーが来ますよって感じでいくぜ！！？）
（（（グットラック！！））））
霊能が店長と目を合わせる。
・・・場に緊張が走る・・・！！
「・・・店長」
『・・・何？』
そして覚悟を決めて、店長の目を見て、店長の機嫌を治すために、店長に向かって、口を開いた。
「店長・・・もうカレー臭がしてきたぜ」
（（（お前何言ってんだぁぁぁあああああああああ！！！！））））
その日、霊能は闇魔と久しぶりに会ったと言う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1241r/

化け者交流会談記

2011年10月2日03時18分発行